

R281.03-D25-(1)ウ



始



4-174ス
あ

R28/03
D25
11)

訂正
増補

明治二十九年一月第三版

大日本人名辭書

上巻



經濟雜誌社出版

再板大日本人名辭書序



余友鼎軒田口君。夙興經濟雜誌社。稍二
連才俊。自執牛耳。連作良書。大日本人名
辭書其一也。頃者再版告竣。君來請余一
言。余與君有舊好。故不敢辭。而序之。曰。夫
短篇小冊。厚不盈寸者。滿都書房爭刻之。
利在目前也。浩翰大帙。要鉅費者。雖官府
之大。回避不當。勞多而功不俄著也。獨經

濟雜誌社毅然自任。曾有斯書及泰西政
事類典日本社會字彙等之舉。竝行于世。
不亦偉乎。初斯書之成。在明治十九年。爾
來學者置之座右。隨索隨獲。如探囊中物。
稱為操觚家至寶焉。然原板有限。購求無
罄。至近年市價暴貴。不啻倍蓰。於是乎遂
有再版之役。乃增加前書遺漏。及近時名
流之歸道山者五百餘人。逐次編纂。葛焉

大日本人名辭書序

經濟雜誌社員田口鼎軒纂大日本人名
辭書成。索余叙。鼎軒嚮著日本支那開化
小史。又論時勢。皆有獨創之見。不可磨滅之
識。猶新鑿地而出泉。他人所已汲。不復汲也。今
此人名辭書。亦我邦所未有。而鼎軒始任其
編纂。遂能完業。余未暇為世人賀。其得藝
林之一大便利。而先自喜。免于從前搜索之

難也。余自少小好聚書。及踰知命而所藏和漢之書二萬有餘冊矣。以防祝融之故。離居室數十步。踰一池而南。築書庫而藏焉。又固扃重鑰以防亡失。故若有欲搜索之事。則腰鍵而出室。風雨晝晦。一手持傘。一手秉燭。啓鑰而入庫焉。東索西求。書冊縱橫如獺祭魚。如此而或有獲。或有不獲矣。然而如漢士人名有萬姓統譜等書。雖未備。而尚可以資

考核。至于吾邦人名。則除帝王將相歌人高僧之表々著明者外。未嘗不以其難搜索故。廢然而返也。今也得此一冊。置諸案頭。吾邦古今各種人物事畧。隨求隨得。易如探囊取物。回想從前搜索之難。不啻若汽車與徒行之相懸絕也。余豈得不先自喜乎。夫汽車始作。而行旅之利便。為昔日所不見。故人不憚于行旅。行旅者日多。而人智益進于開明矣。

凡例

- 一 姓名記載の方法は専ら左の數則に従ひ以て其傳を掲ぐ
 - 一 天子は其の諡を用ふ
 - 一 皇子親王后妃は其の名を用ふ而して聖德太子の如き其諡を用ふ
 - 一 相將以下大抵の士人は其の姓名を用ふ譬へは竹内宿禰吉備眞備源義家足利尊氏徳川家康本多忠勝の如し
 - 一 學士は多く姓と號とを用ふ譬へは新井白石荻生徂徠の如し
 - 一 俳人畫工茶人の如き其の姓名かならざるもの及び號のみを以て通じ姓の著はれざるものは單に其の號を用ふ其の姓名かなるものは其の姓を記す
 - 一 俳優力士音曲家は凡て其藝名を用ふ
 - 一 劍客武人の内専ら通稱を以て行はるゝものは其の通稱を用ふ
 - 一 女子の姓詳ならざるものは單に其の名を記す而して別に阿の字を冠せず(例へは萬之方茶之局祇王)又名詳かならずして著明のものは單に姓氏若くは其父夫の姓名を書し其女若くは妻と書す
 - 一 僧侶は單に其の名を記するものあり又た號を併記するものあり
- 以上は此書編纂の大要なり畢竟世人の最も知る所の名稱の下に其傳を附するにあ
る也本邦の人古時姓あり氏あり名あり中古以後苗字あり通稱あり實名あり字あり
號あり別字別號あり紛々として混亂す而して歴史雜書記する所又た一定すべから
ず此の書は索引に便にするを主とす故に其の最も世に知らるゝものを執るなり而

今此書始成而搜索之利便實從前所未有
余故知今後人不憚于搜索搜索者日多
而一世之學問均向于進步也此則余又不
得不為世人賀焉

明治十八年十月四日

敬宇中村正直撰



も大率別名を掲げて以て索引に便にす
一 此の書姓名の順序は五十音の順序に従ふ其の轉載西洋の辭書に異ならず今之を畧説すれば左の如し

五十音

ア	イ	ウ	エ	オ	カ	キ	ク	ケ	コ																		
ク	ケ	コ	サ	シ	ス	セ	ソ	タ	チ	ツ	テ	ト	ナ	ニ	ヌ	ネ	ノ	ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ	マ	ミ	ム	メ	モ

此順序を以てする故に左の如く列記す

以上は三段の場合に於て其例を示したるものなり其の數増加するに於ては此の理を推して其の席次を求むべし

一 ン[○]の音はム[○]と同音とし其の席に配す

一 古人の姓名の間^ノ字を置くを常とす然ども此書に於て一切之を除けり

一 假名遣ひに數説ありて決しがたきもの及び同字にして讀方數多あるものゝ如きは甲所を檢して無き時則ち乙所を索むべし

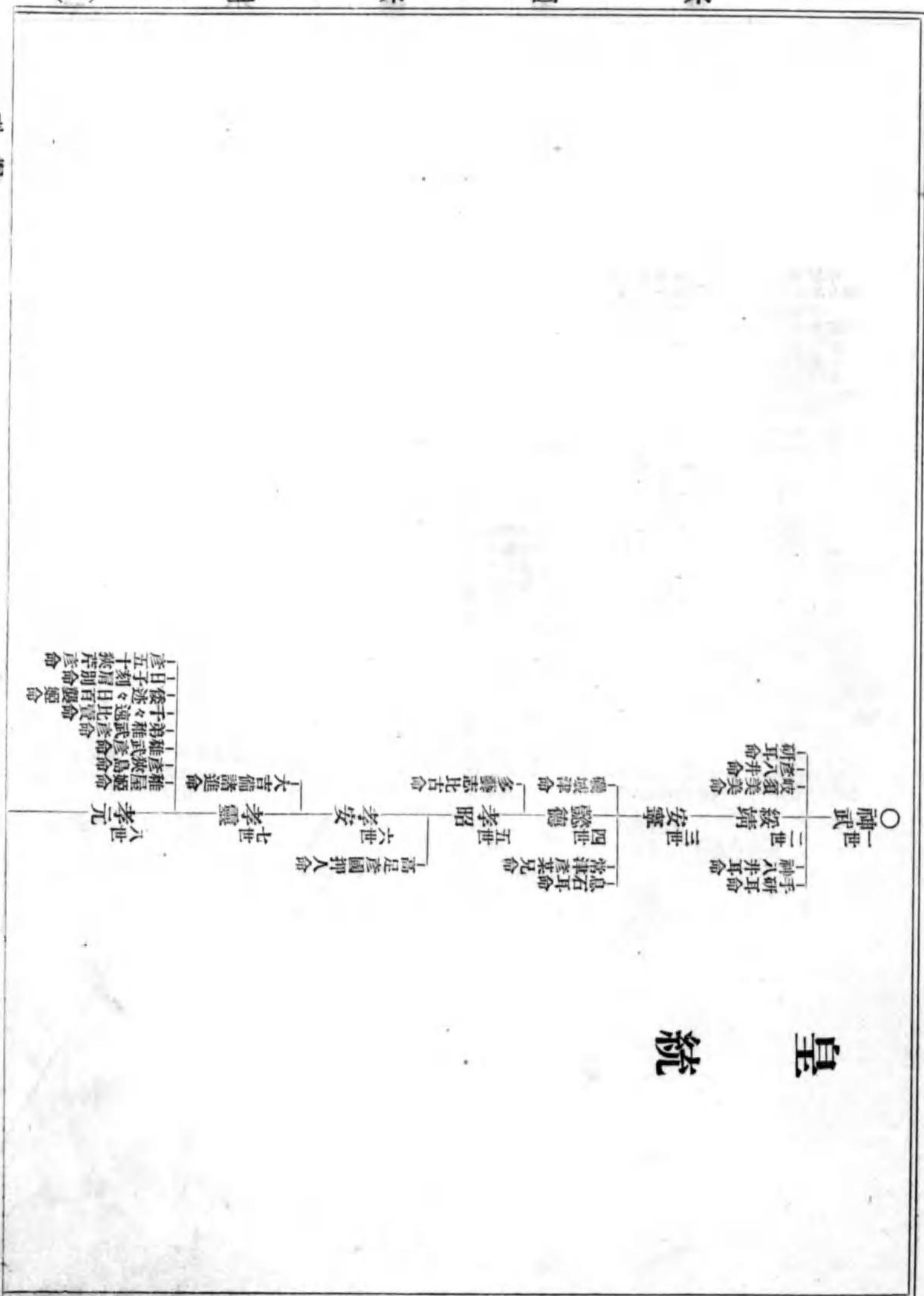
大日本人名辭書系圖目錄

系圖 第一	皇統	一頁
同 第二	親王家	一五頁
同 第三	藤原氏	二〇頁
同 第四	平氏	二四頁
同 第五	源氏	二五頁
同 第六	北條氏	二七頁
同 第七	足利氏	二八頁
同 第八	新田氏	三〇頁
同 第九	織田氏	三一頁
同 第十	豐臣氏	三二頁
同 第十一	上杉氏	三三頁
同 第十二	徳川氏	三四頁
同 第十三	皇學家	三七頁
同 第十四	儒者學派	三九頁
同 第十五	宗門系譜	四六頁
同 第十六	醫師派譜及鍼醫譜	五〇頁
同 第十七	武術諸流	五五頁

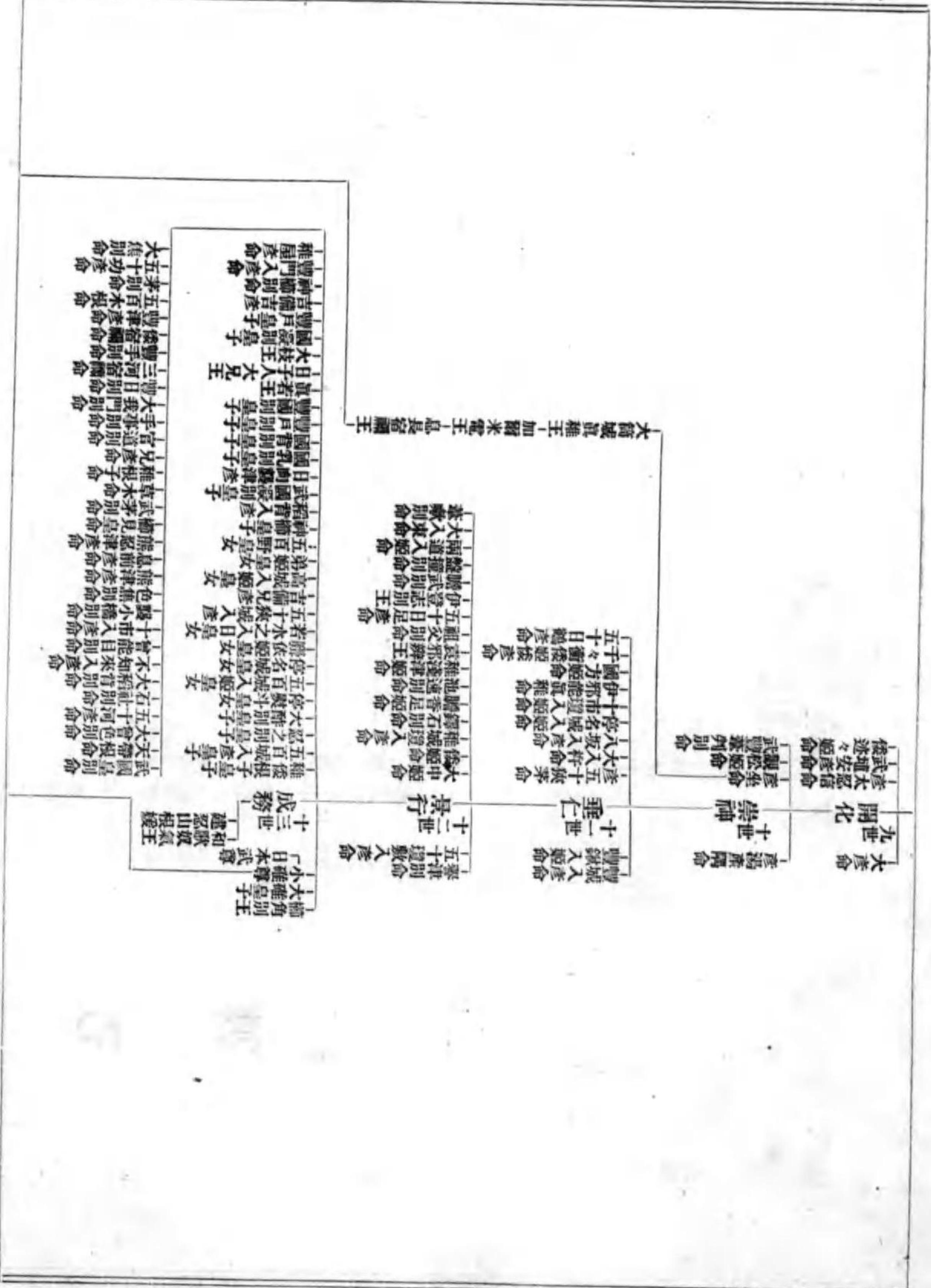
大日本人名辭書系圖目錄 (終)

同	第十八	繪畫諸流	六一頁
同	第十九	刀劍師及金工	六八頁
同	第二十	佛工	七六頁
同	第二十一	相撲及行司	七七頁
同	第二十二	猿樂家譜	七九頁
同	第二十三	茶流系圖	八四頁
同	第二十四	俳優系圖	八五頁
同	第二十五	淨瑠璃諸流	九二頁
同	第二十六	長唄系圖	九七頁
同	第二十七	俳諧系圖	九八頁
附	同時代偉人年表		一一二頁

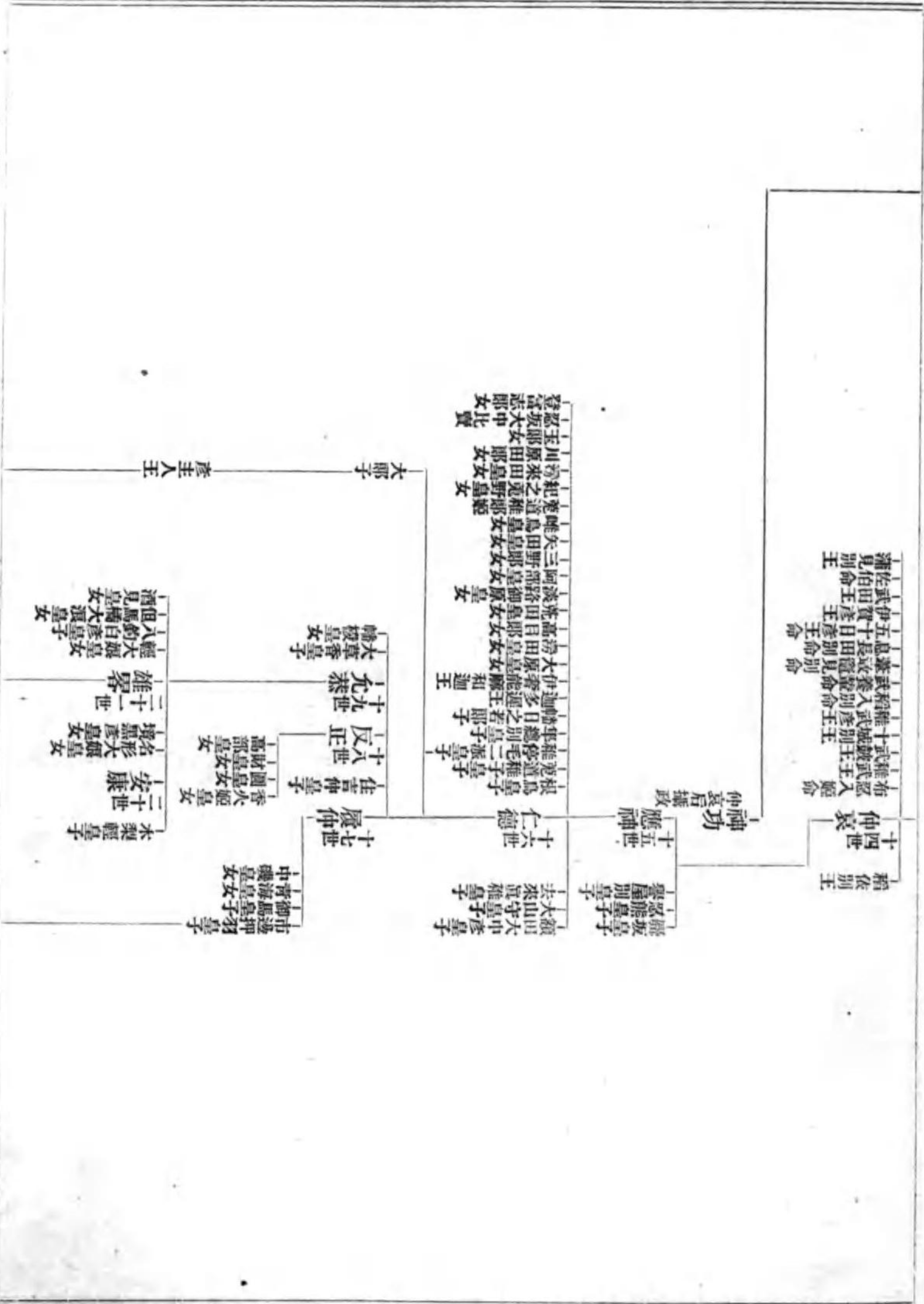
皇統



(二) 系圖第一



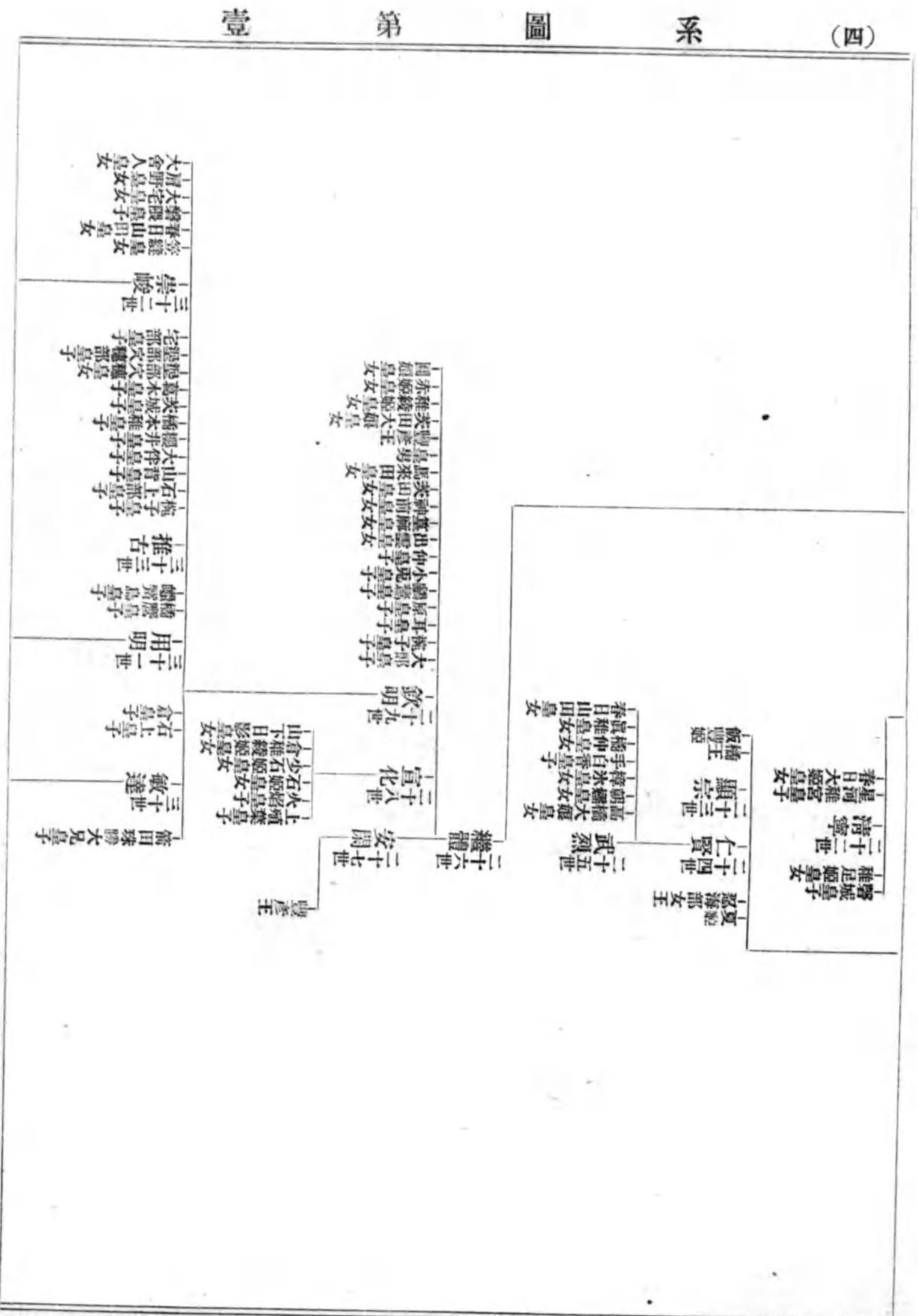
(三) 系圖第一



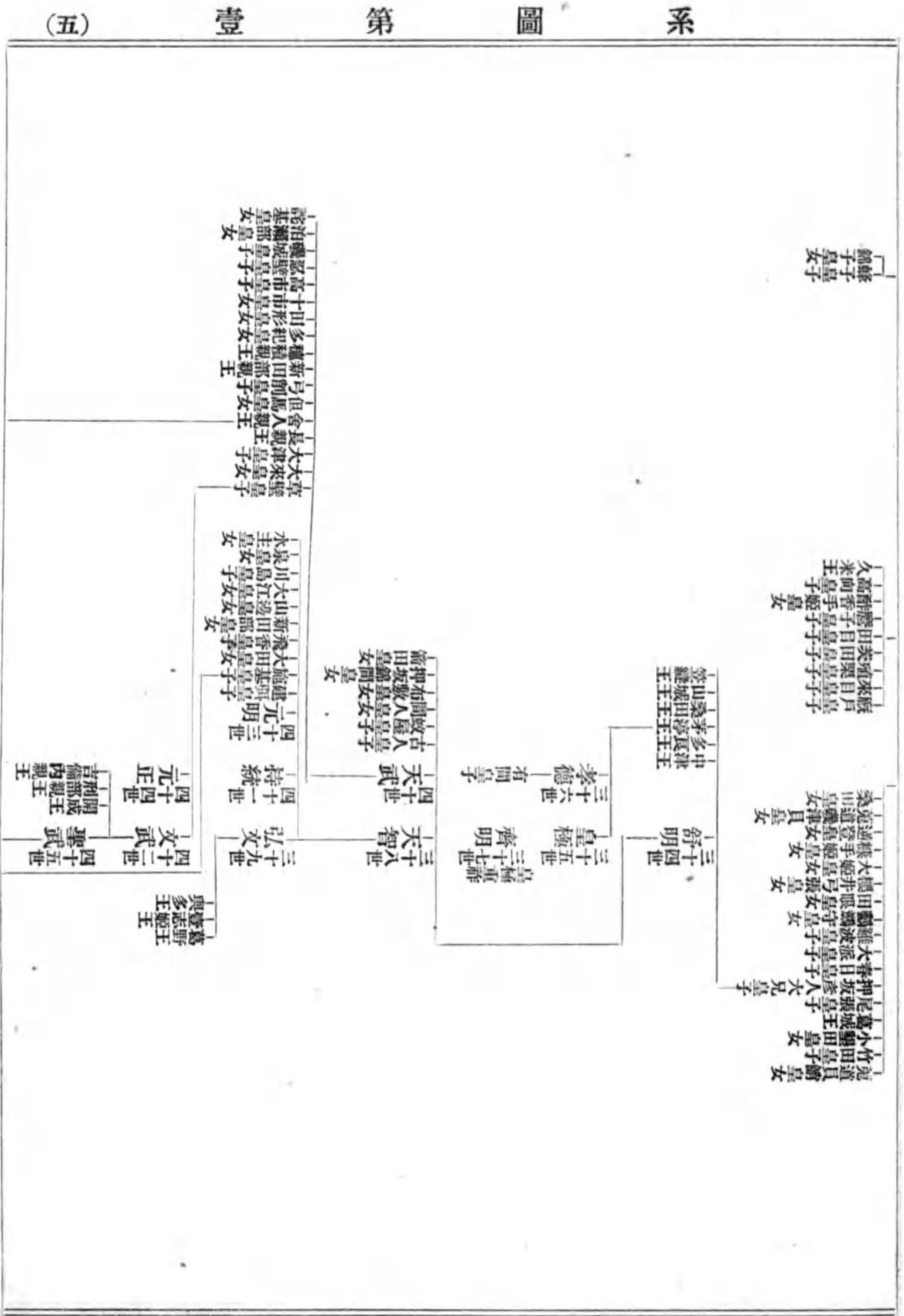
皇統

皇統

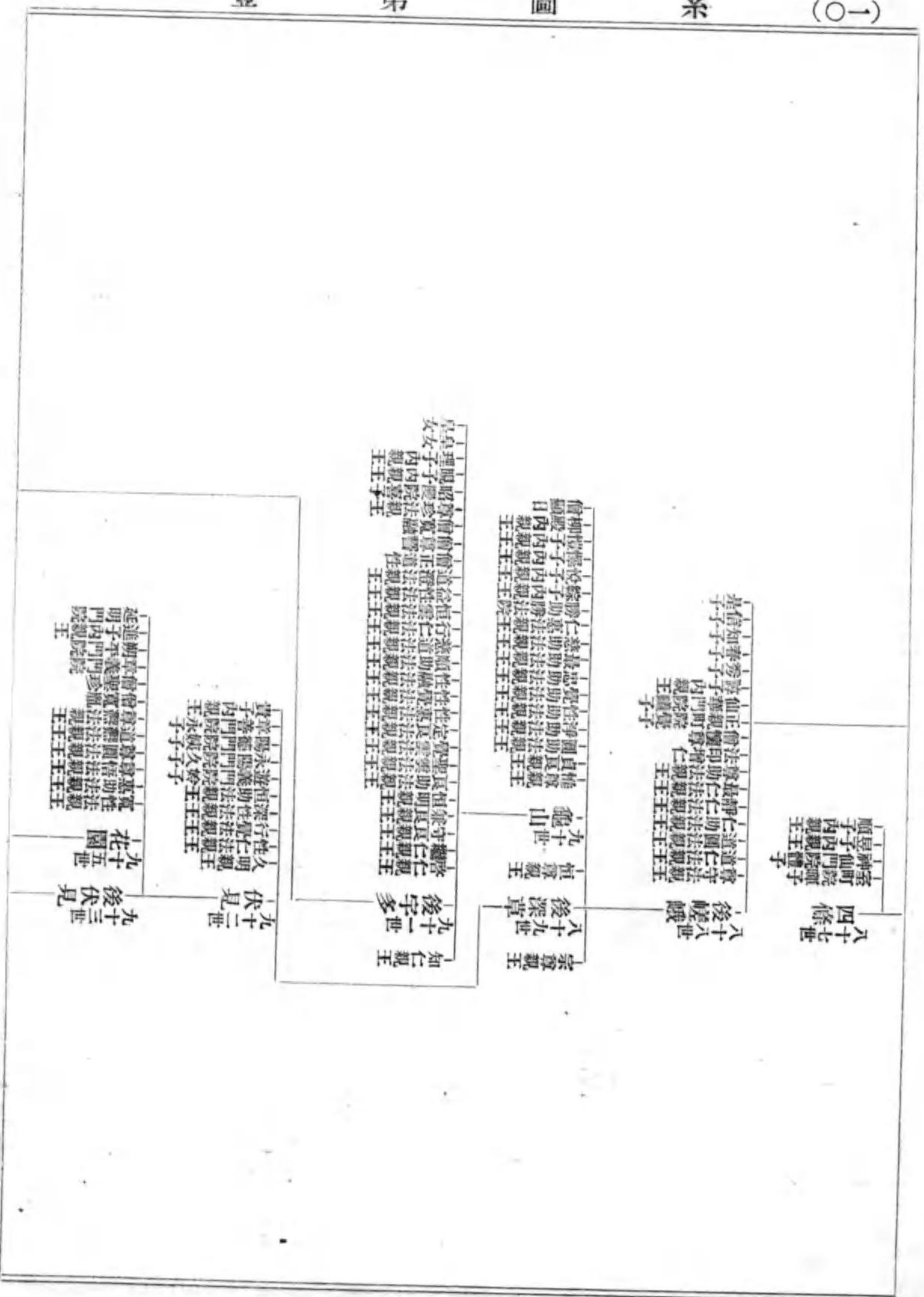
皇統



皇統

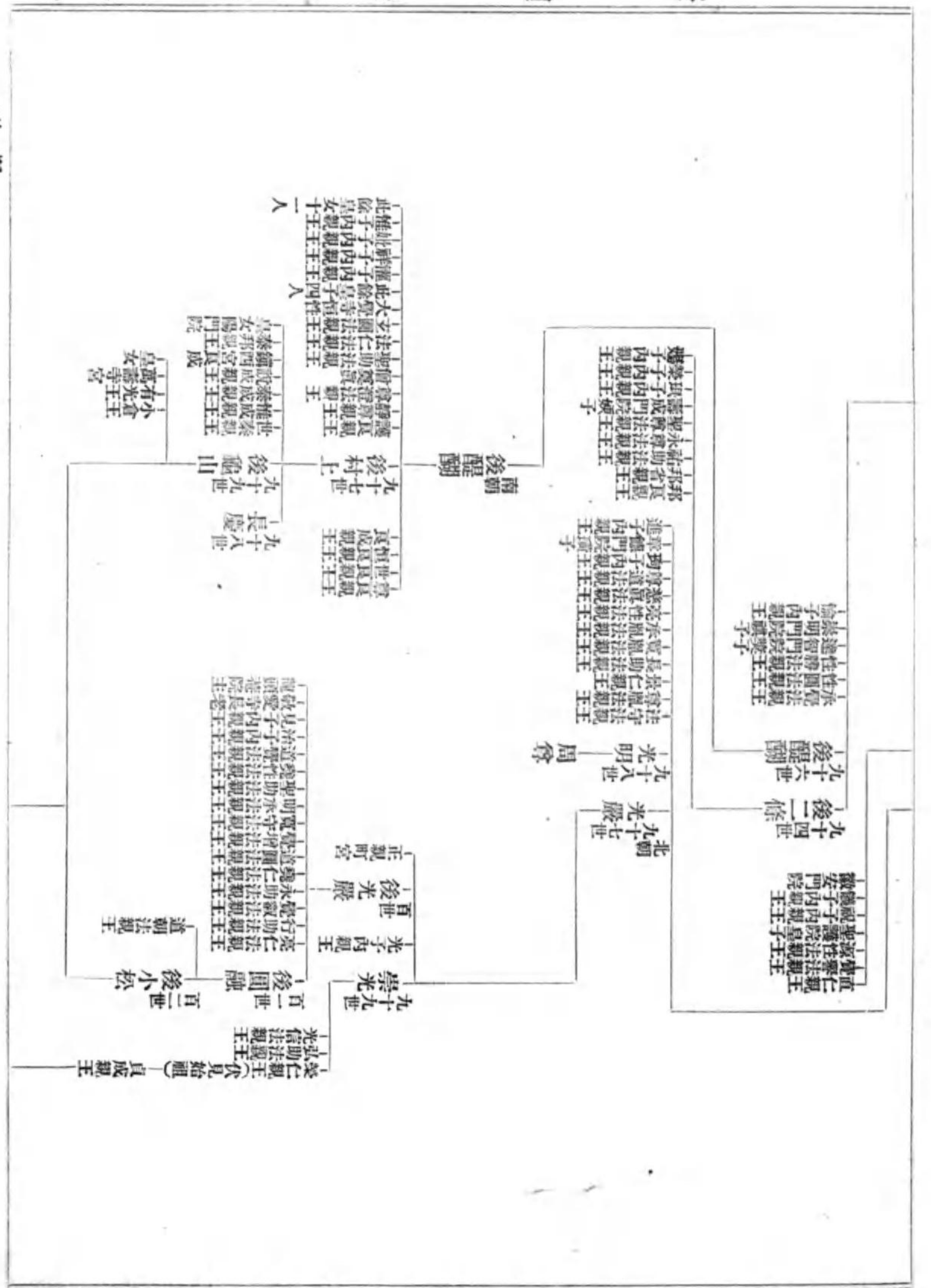


(〇一)



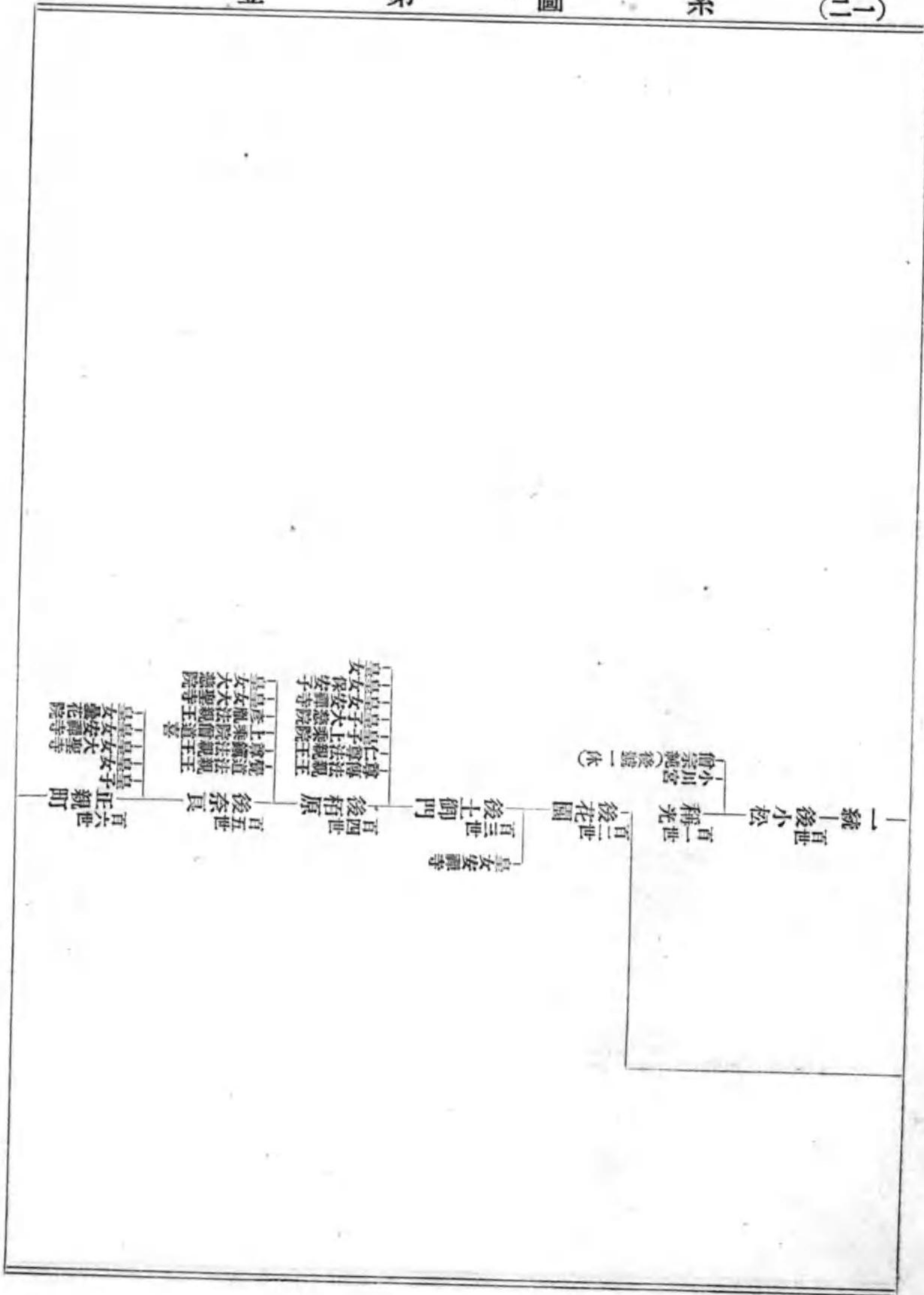
壹 第 圖 系

(一一)

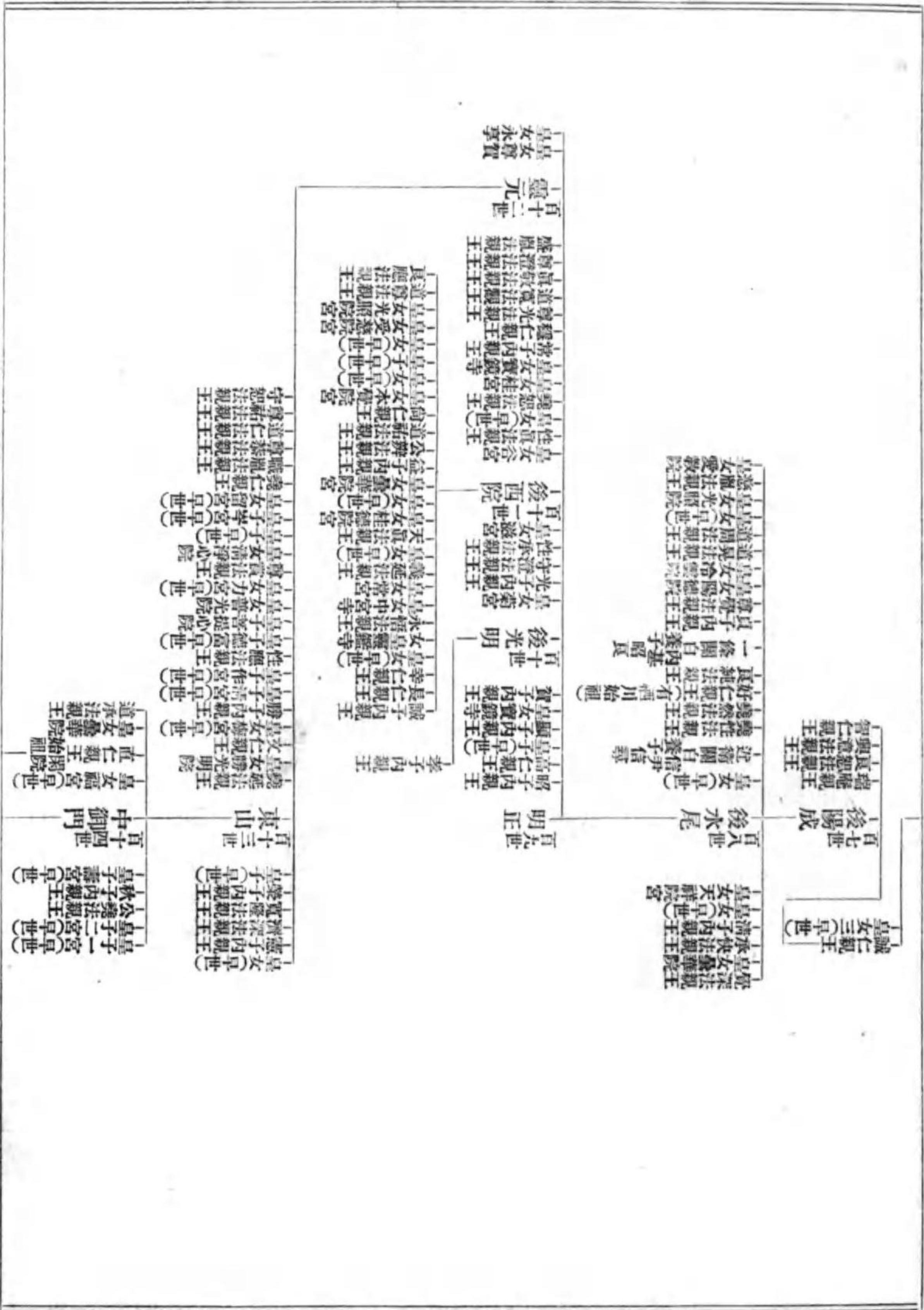


壹 第 圖 系

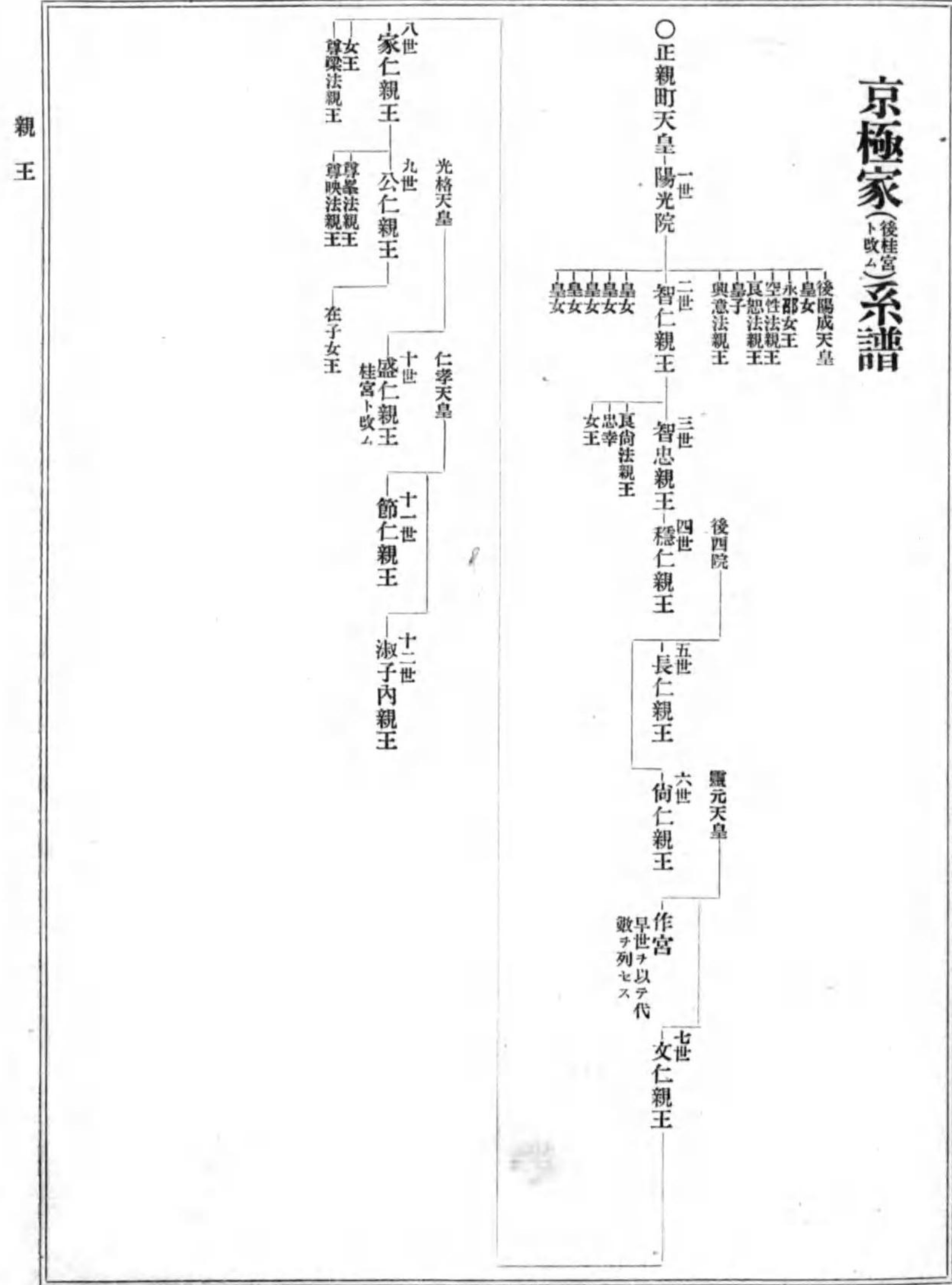
壹 第 圖 系 (二一)



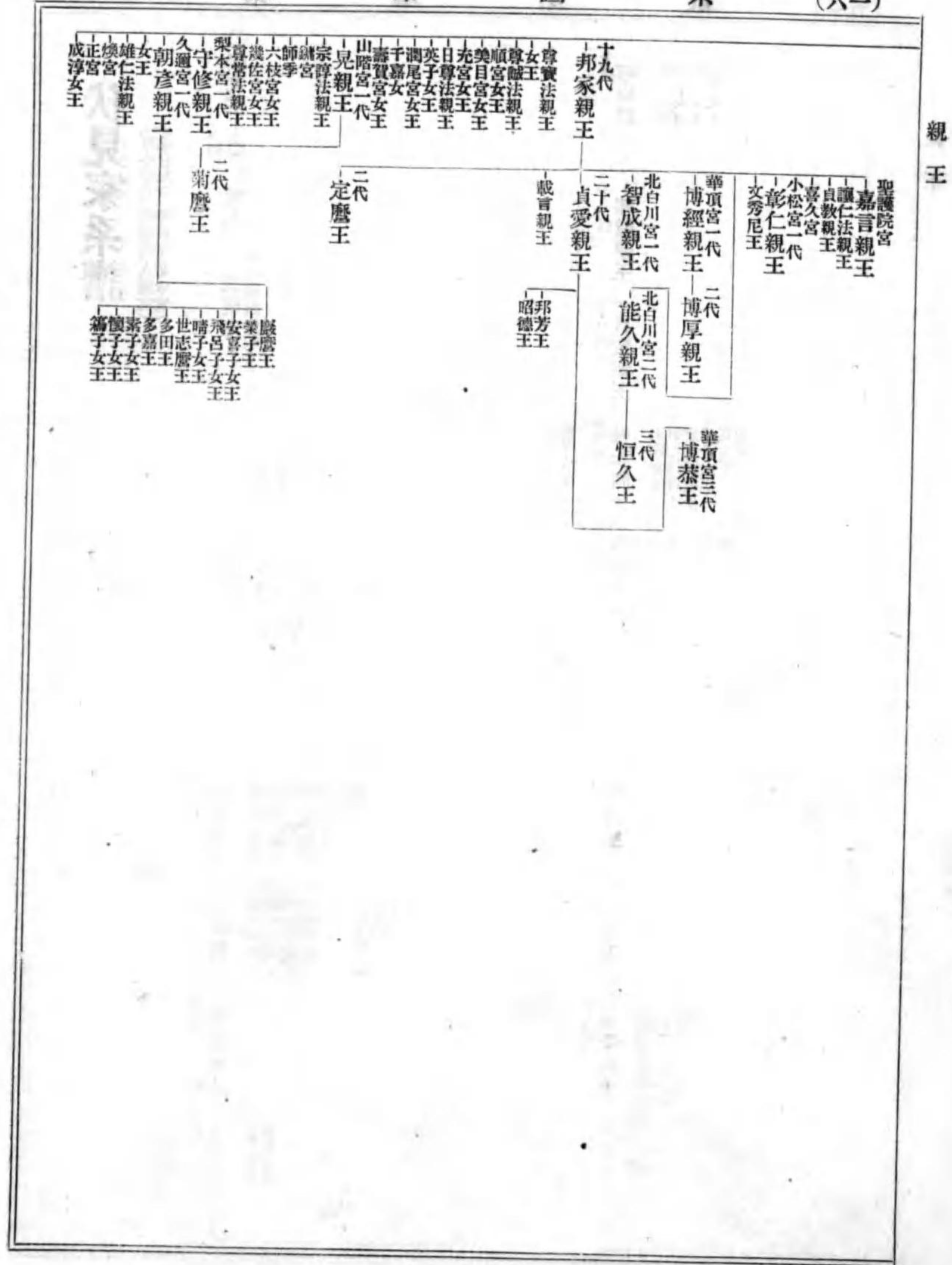
壹 第 圖 系 (三一)



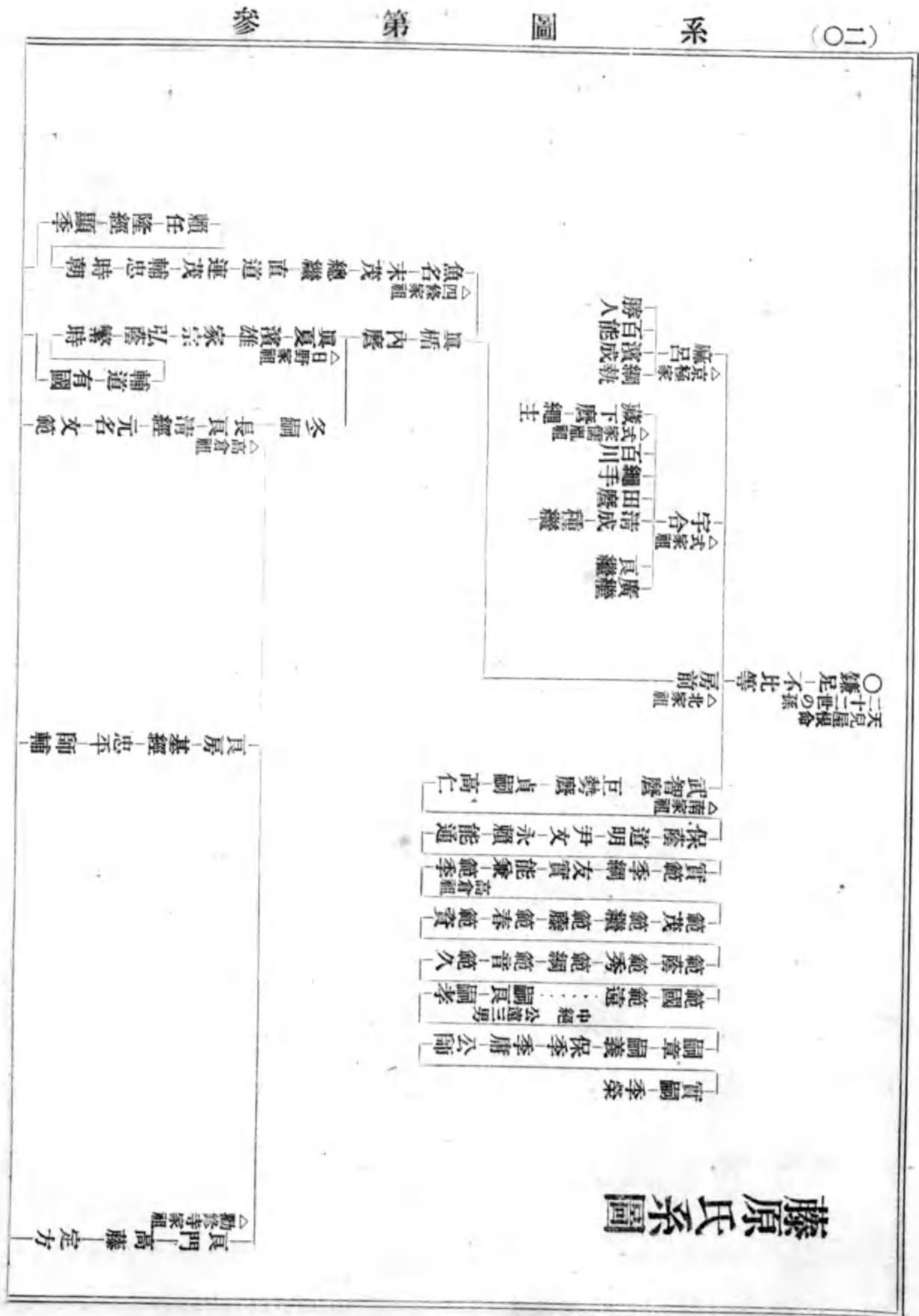
系圖第貳 (七一)



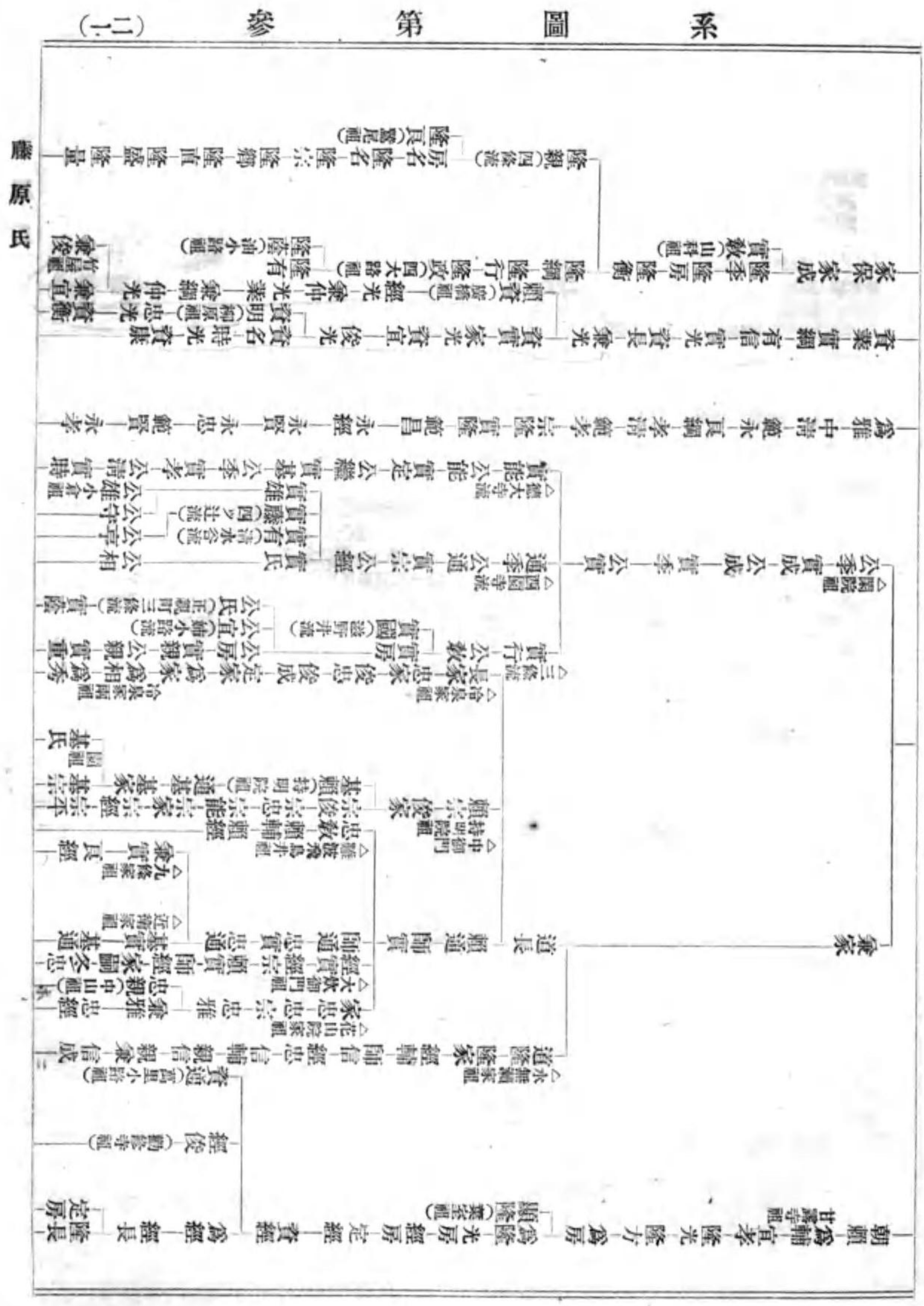
系圖第貳 (六一)



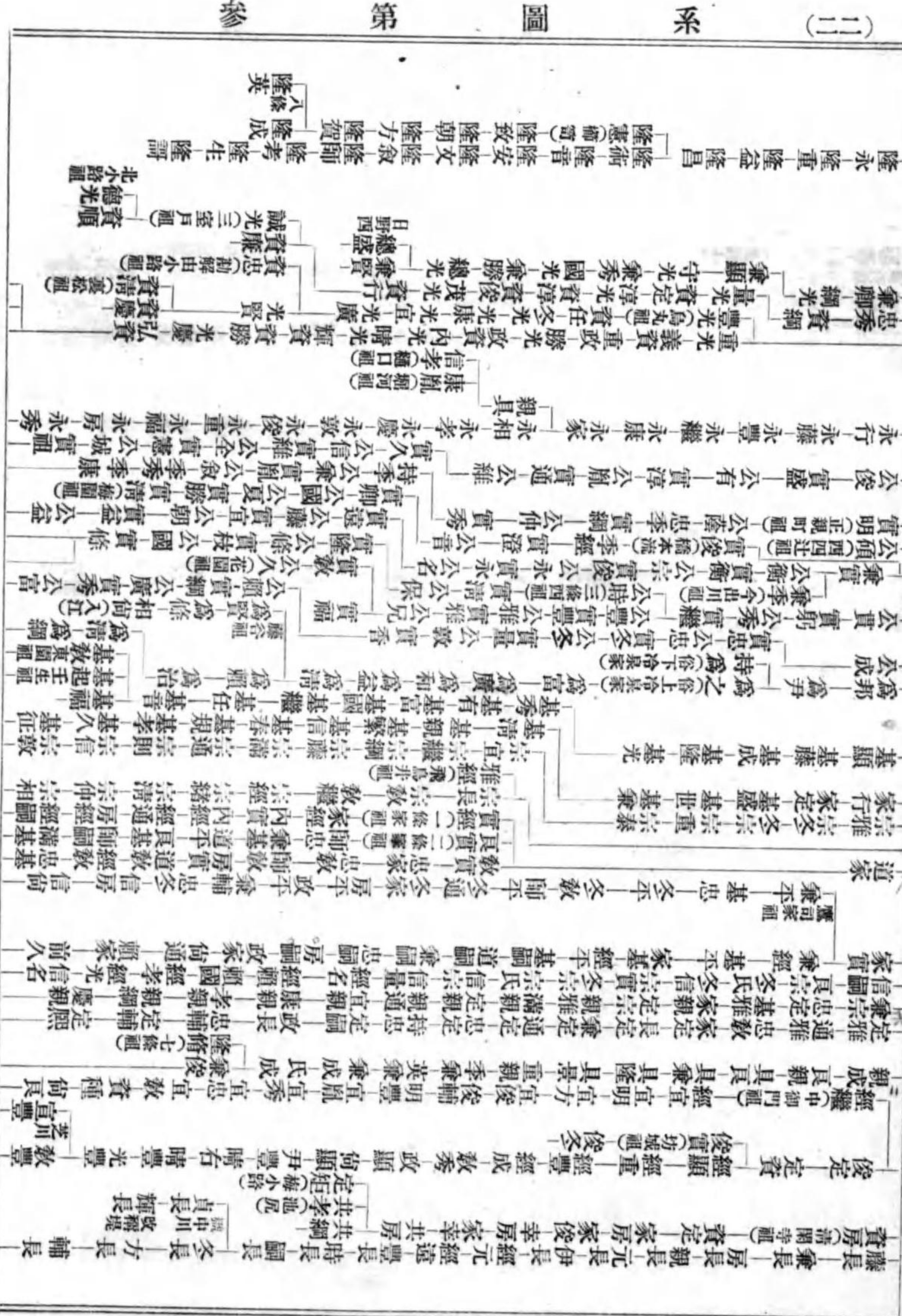
(110)



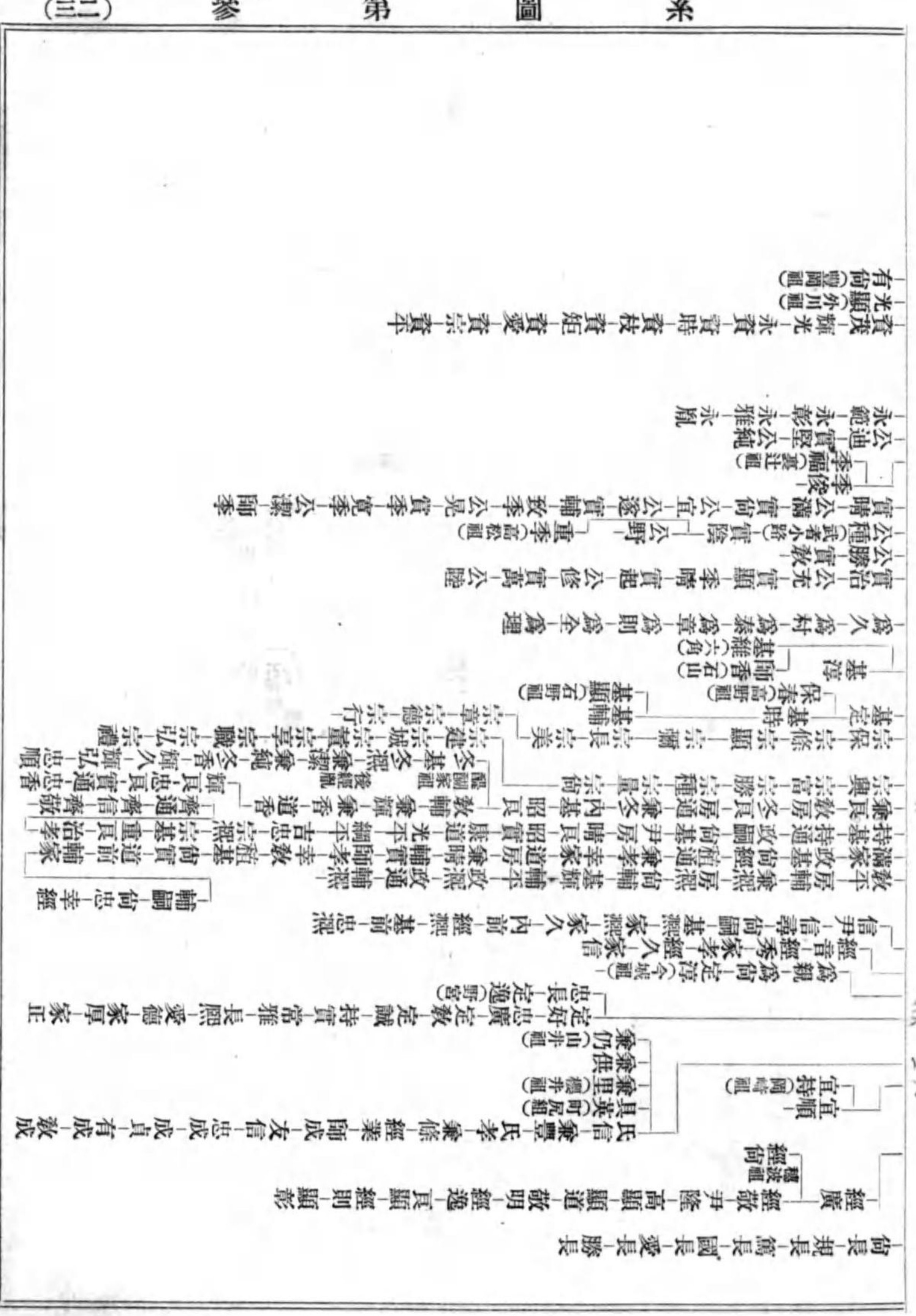
采 圖 錄 珍



采 圖 錄 珍 (111)



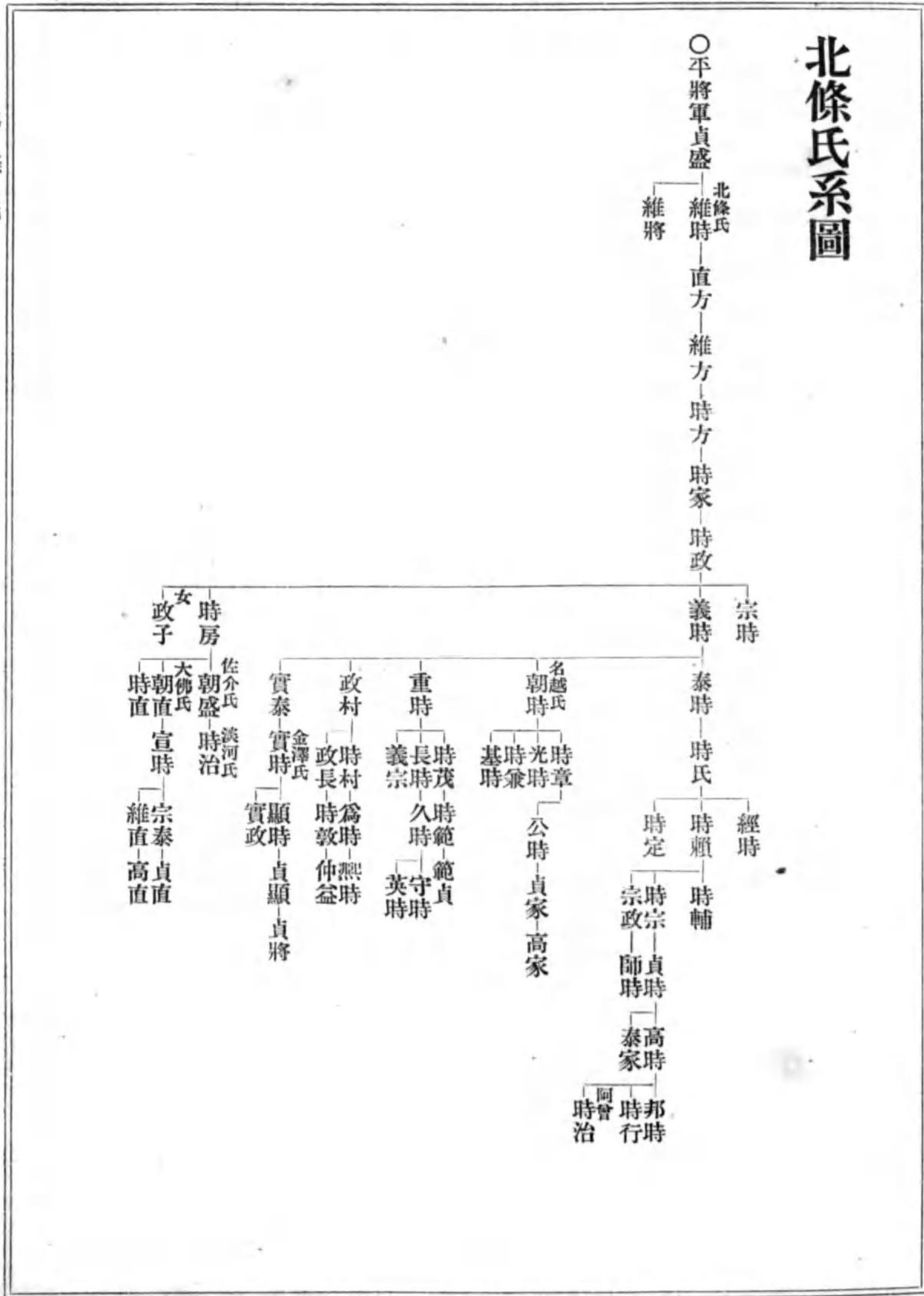
(11) 保 圖 保 驗



(12) 保 圖 保 驗

北條氏系圖

北條氏



源氏

村上源氏

○村上天皇

為平親王 — 憲定 — 賴清 — 滿清 — 顯滿 — 政國 — 顯國 — 義清 — 村上市祖

具平親王 — 師房 — 顯房 — 雅實 — 雅通 — 通親 — 通具 — 通光 — 通宗 — 通方 — 通成 — 北島祖

中院 雅兼 — 定房 — 定忠 — 師季 — 季房 — 赤松祖

久我唐橋祖

信泰 — 義光 — 義隆 — 村上氏祖

扶義 — 成賴 — 章經 — 經方 — 季定 — 秀義 — 時賢 — 有資 — 經資 — 茂賢 — 重資 — 資蔭 — 田向祖 — 庭田祖

子トナル 高綱 — 盛綱 — 經高 — 高綱 — 泰綱 — 高綱 — 氏信 — 滿信 — 宗氏 — 高氏 — 京極祖

爲義ノ義 高綱 — 盛綱 — 經高 — 高綱 — 泰綱 — 高綱 — 氏信 — 滿信 — 宗氏 — 高氏 — 京極祖

明舒 — 實善

常弘 — 希等

定宿 — 唱俊 — 順沃

清生 — 致舉 — 順沃

融身 — 仕宛 — 苑綱 — 箕田渡邊

嵯峨源氏

○嵯峨天皇

近江源氏

○宇多天皇 敦實親王 雅信

時仲 — 濟政 — 資通 — 政長 — 有賢 — 資賢 — 時賢 — 有資 — 經資 — 茂賢 — 重資 — 資蔭 — 田向祖 — 庭田祖

扶義 — 成賴 — 章經 — 經方 — 季定 — 秀義 — 時賢 — 有資 — 經資 — 茂賢 — 重資 — 資蔭 — 田向祖 — 庭田祖

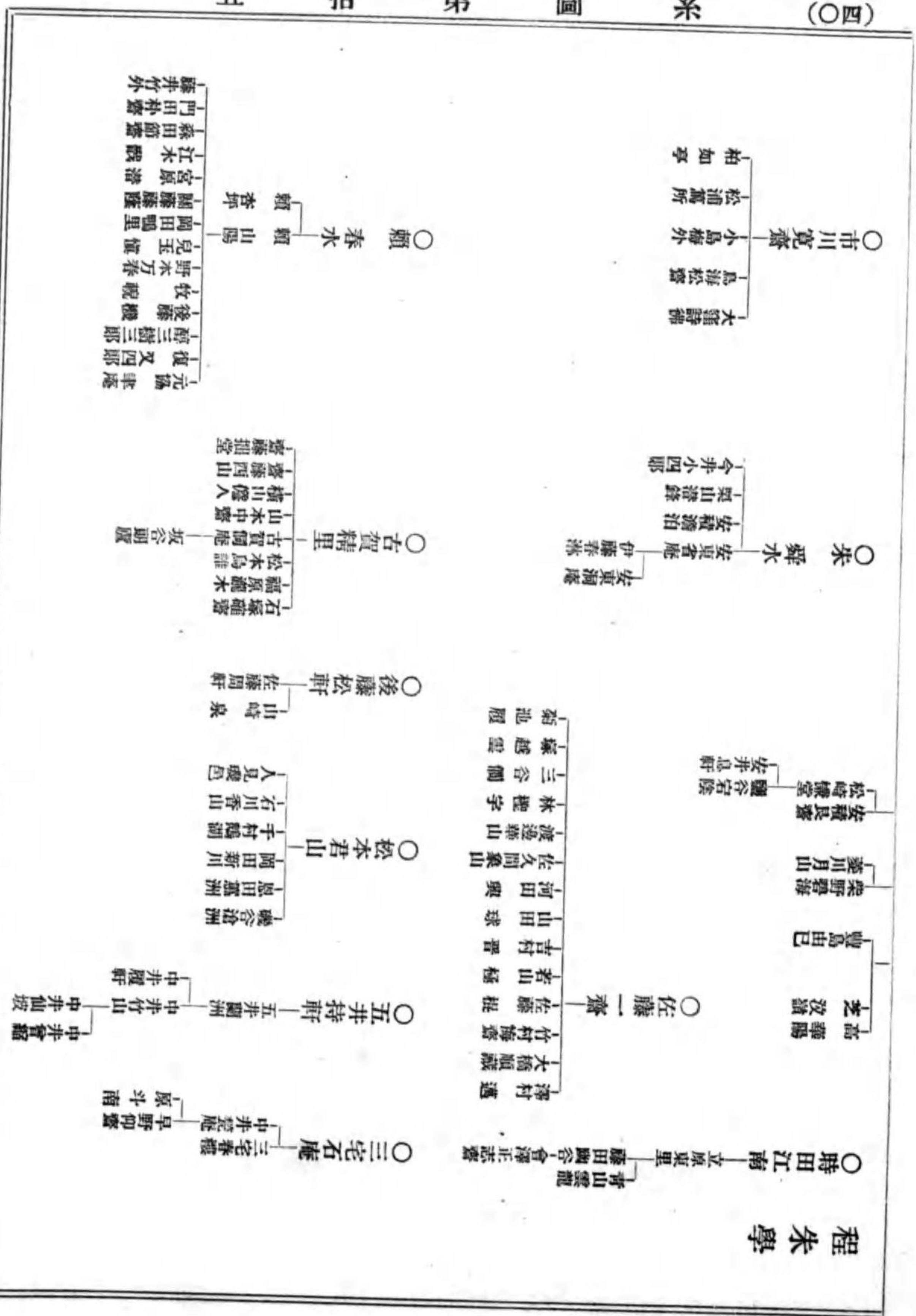
明舒 — 實善

常弘 — 希等

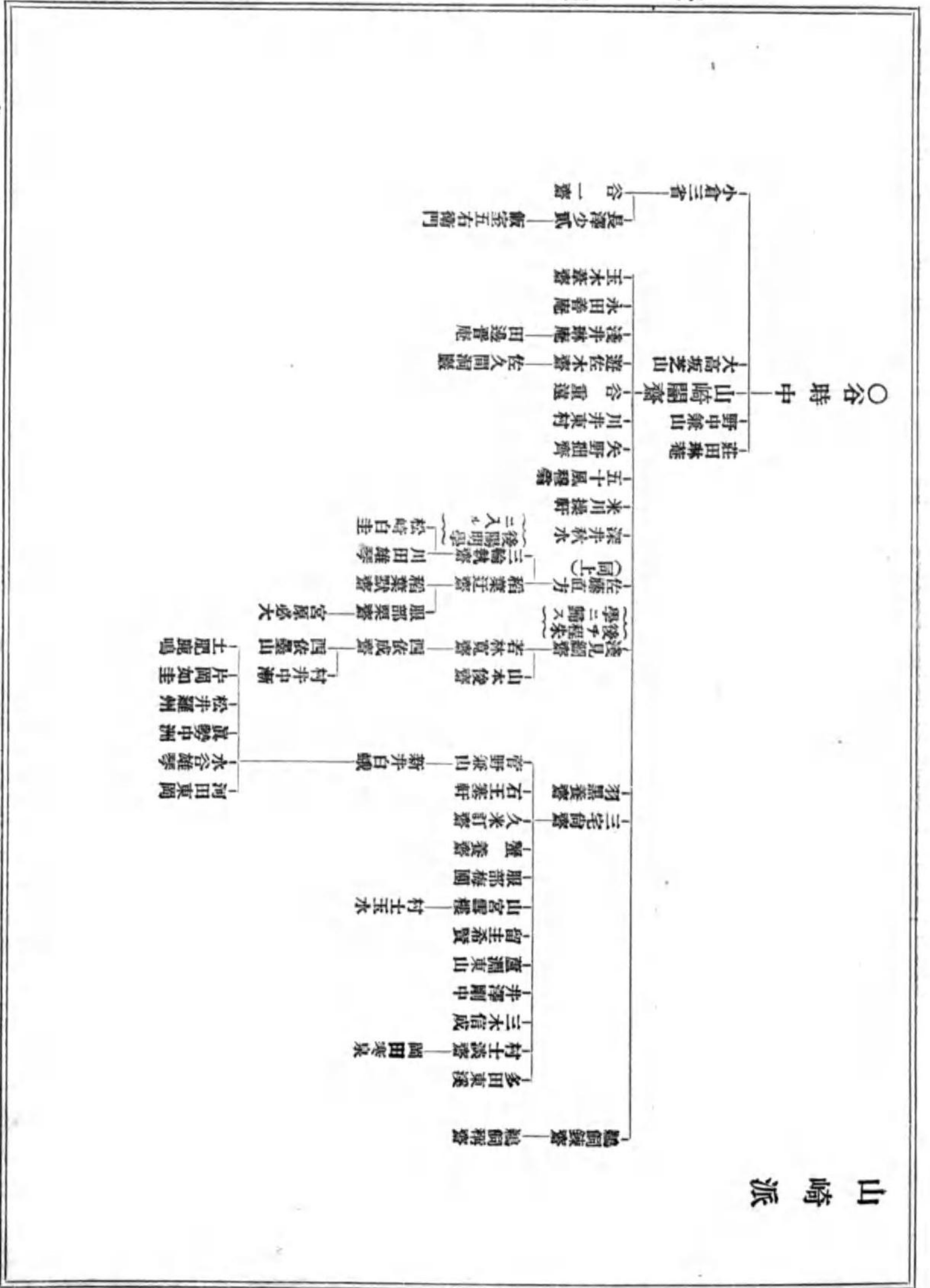
定宿 — 唱俊 — 順沃

清生 — 致舉 — 順沃

融身 — 仕宛 — 苑綱 — 箕田渡邊

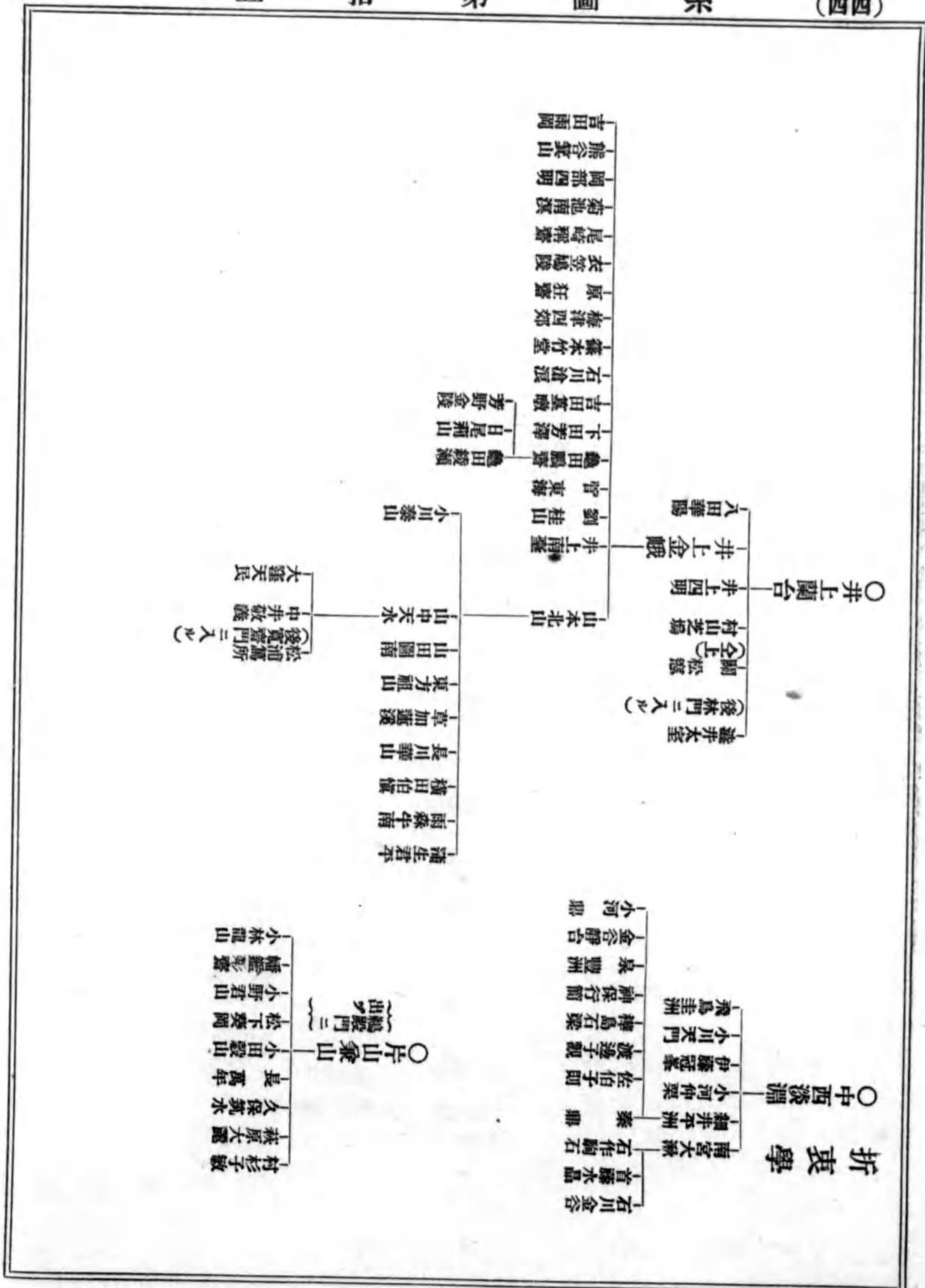


程 朱 學

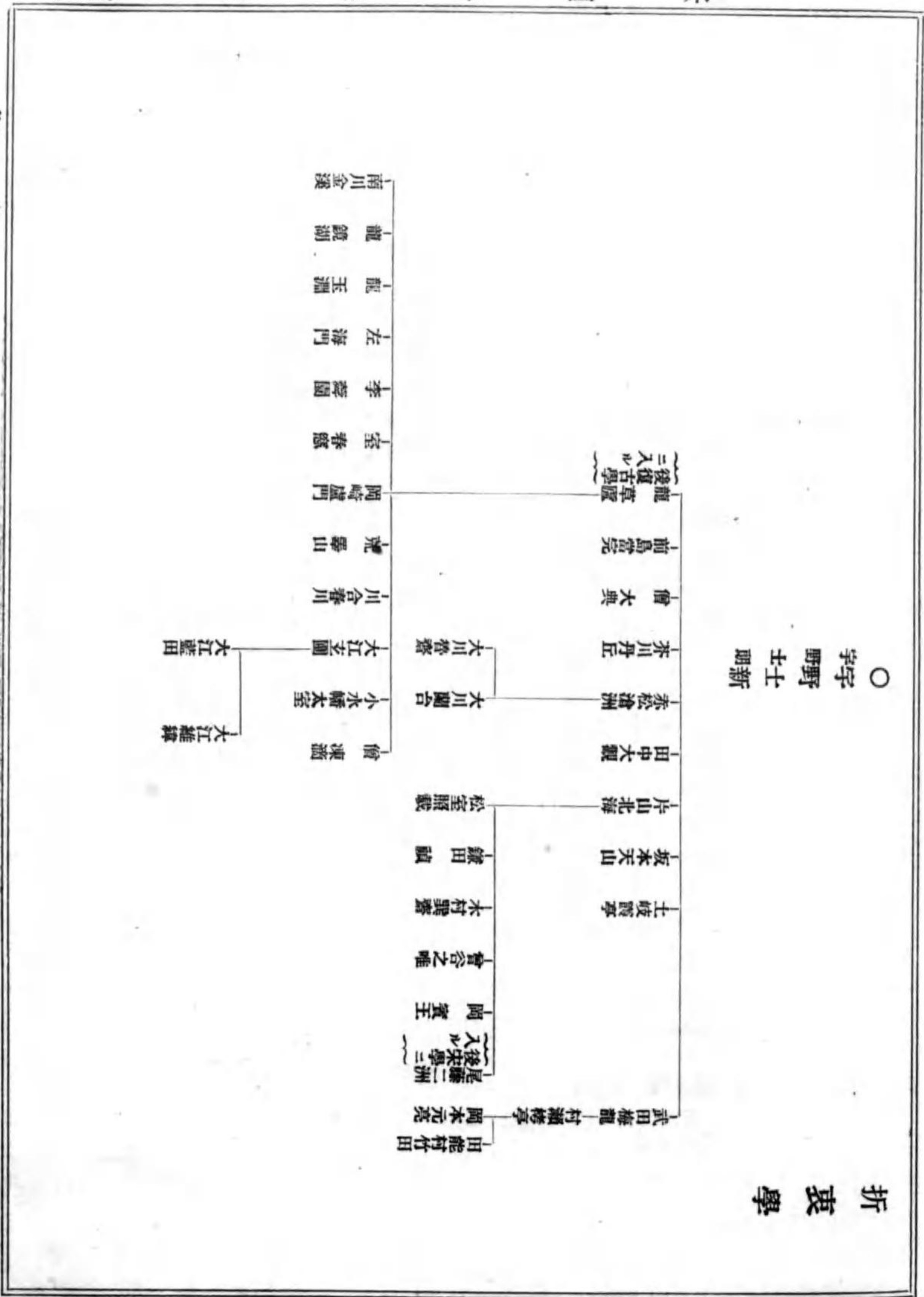


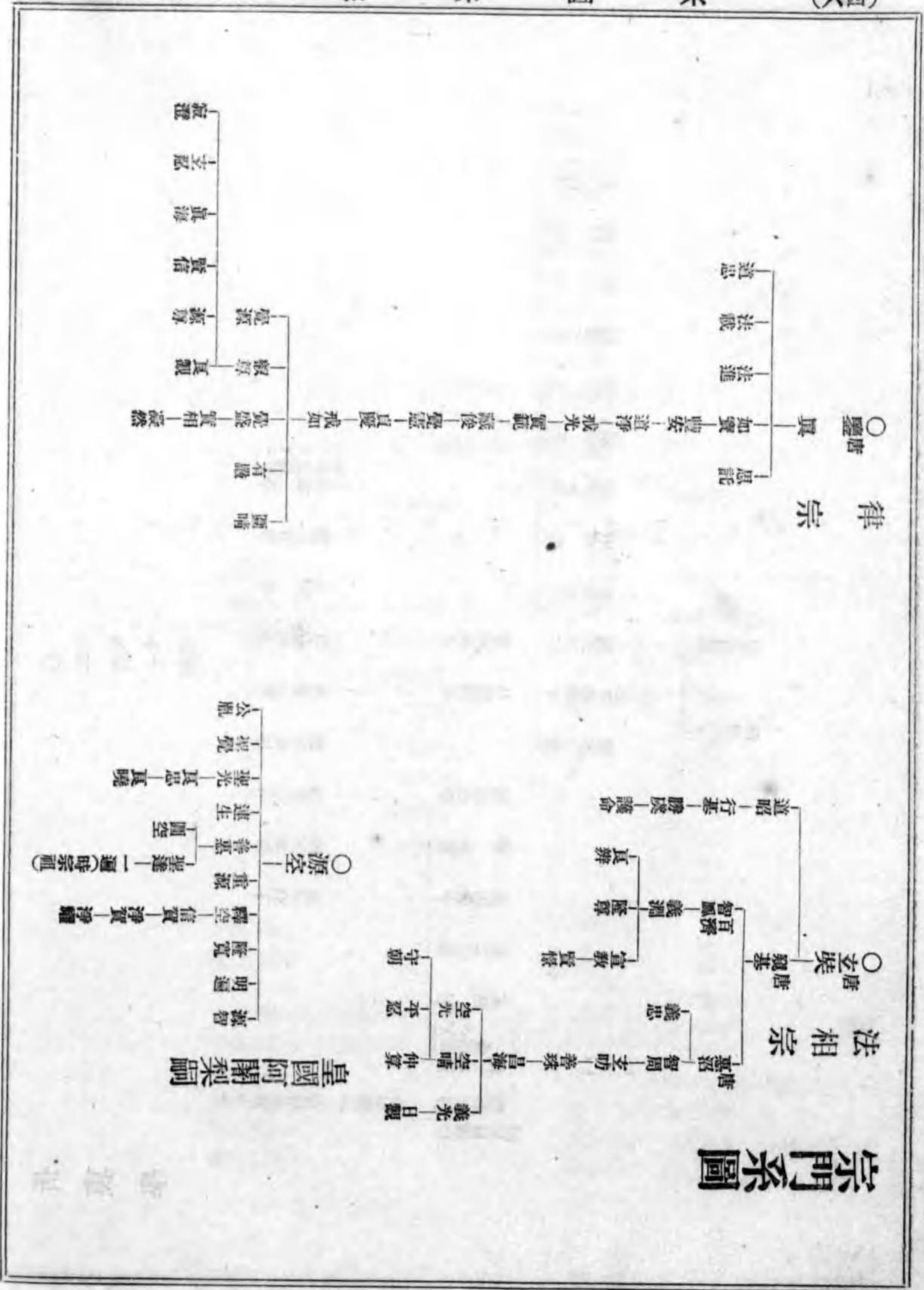
山 崎 派

系 圖 第 拾 五 (四四)

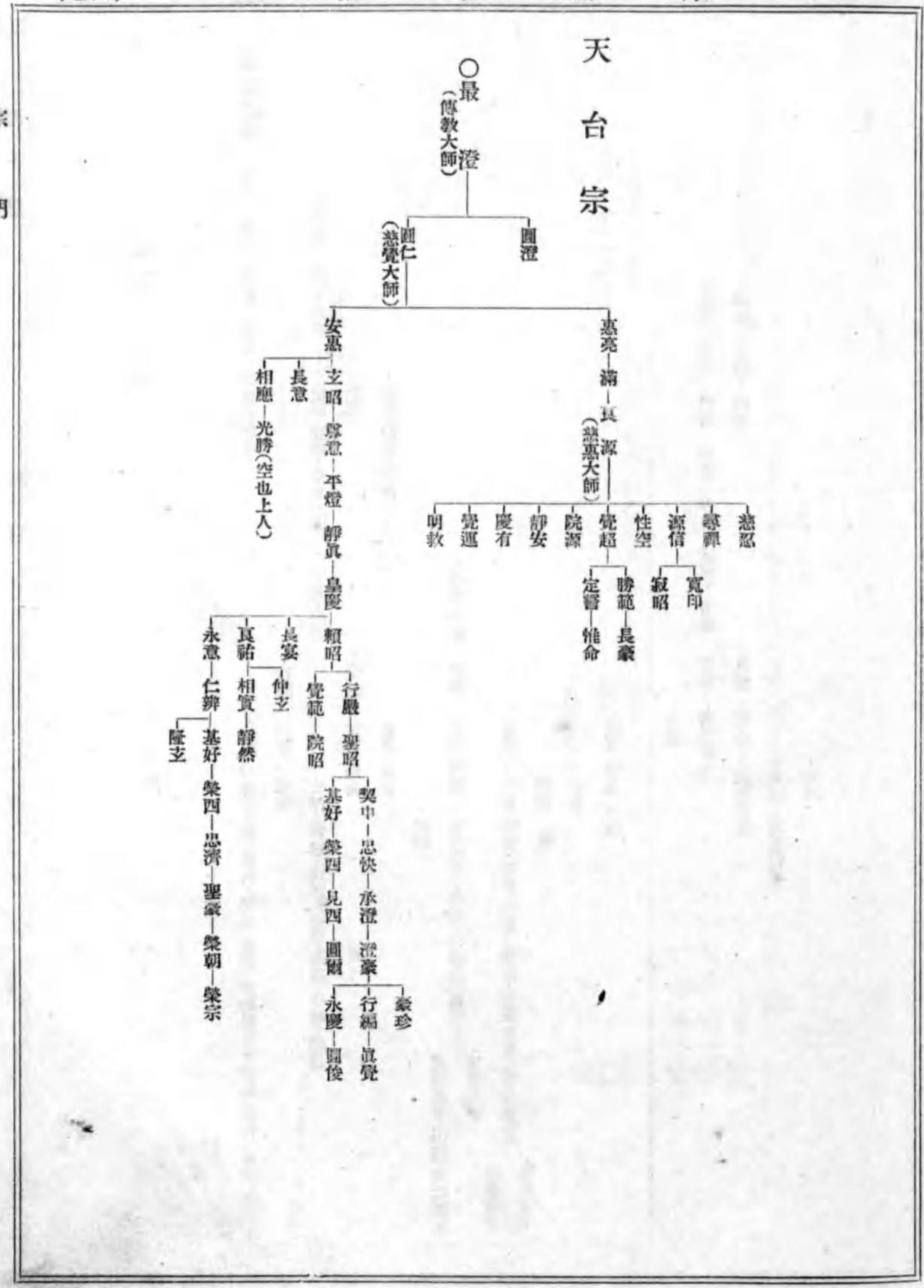


系 圖 第 拾 五 (五四)





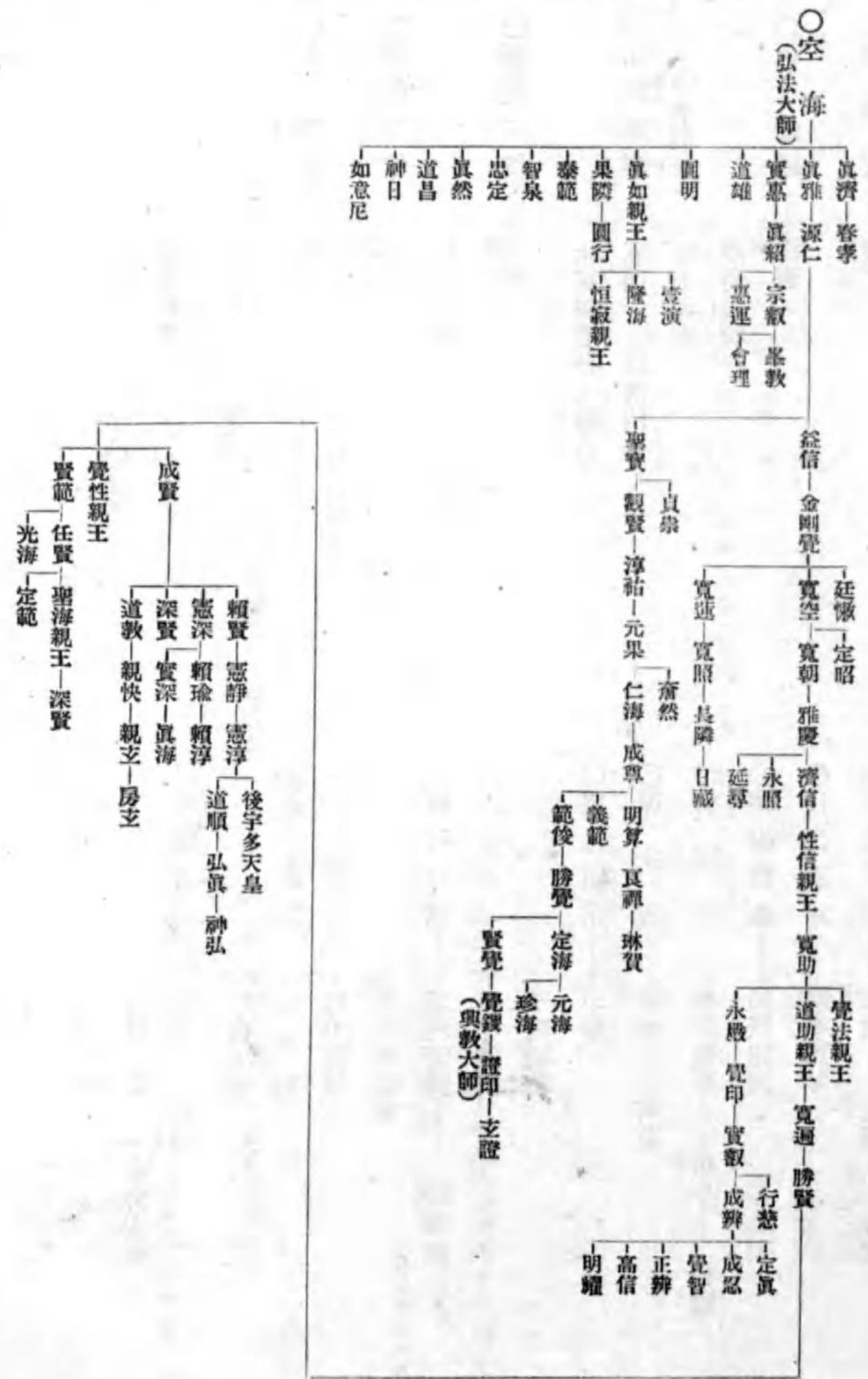
宗門



宗門

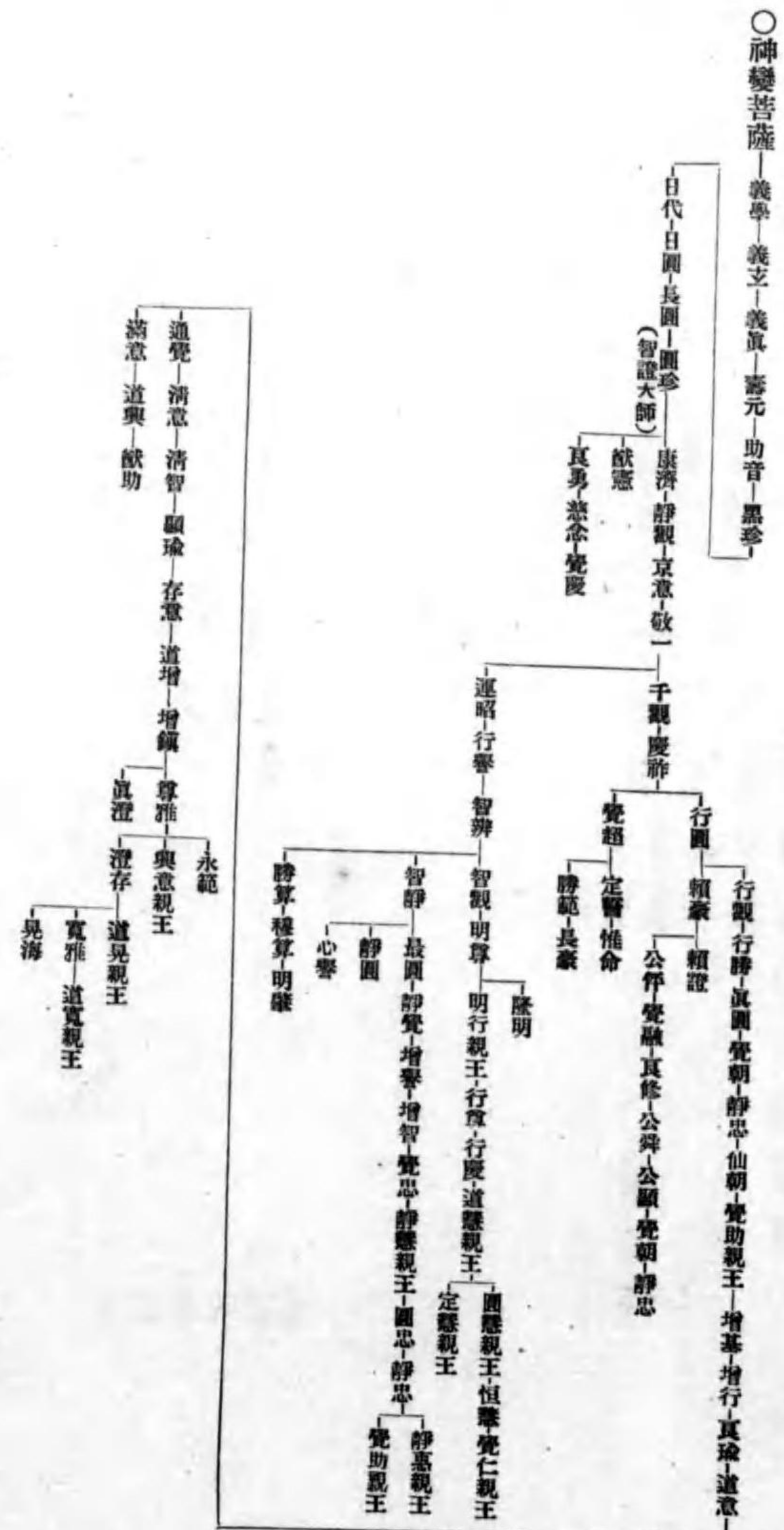
宗門

真言宗



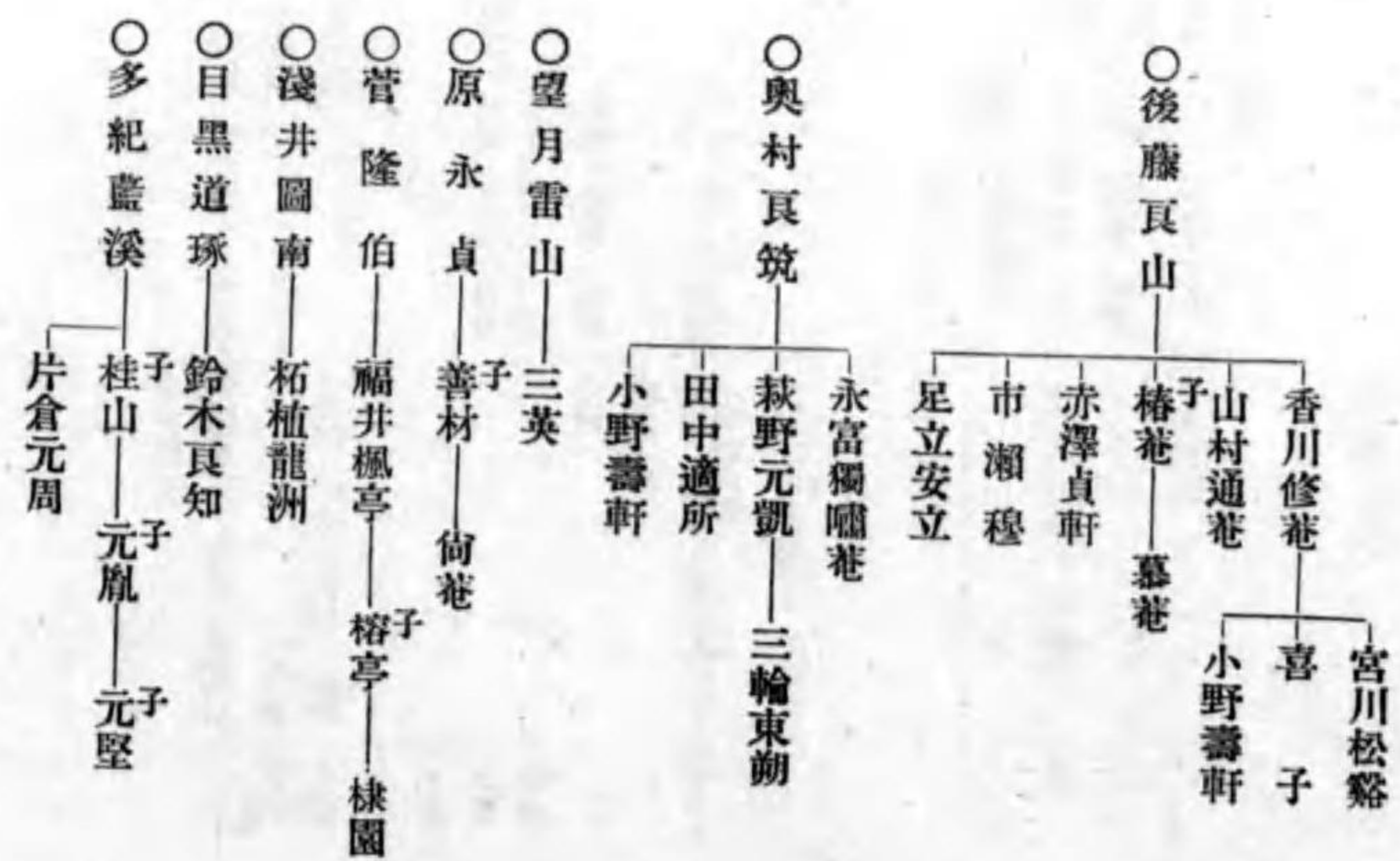
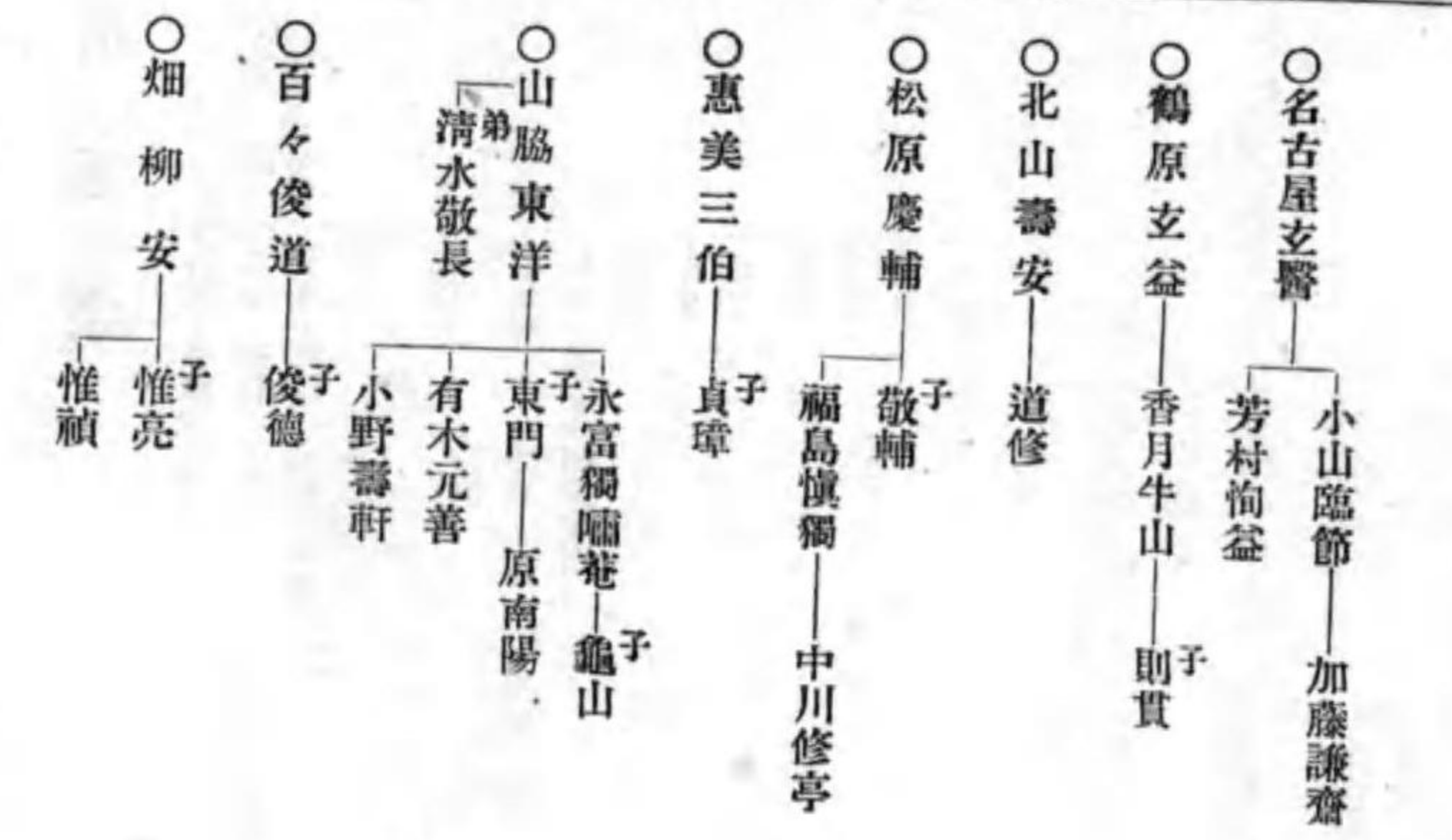
宗門

天台宗 修驗三井派



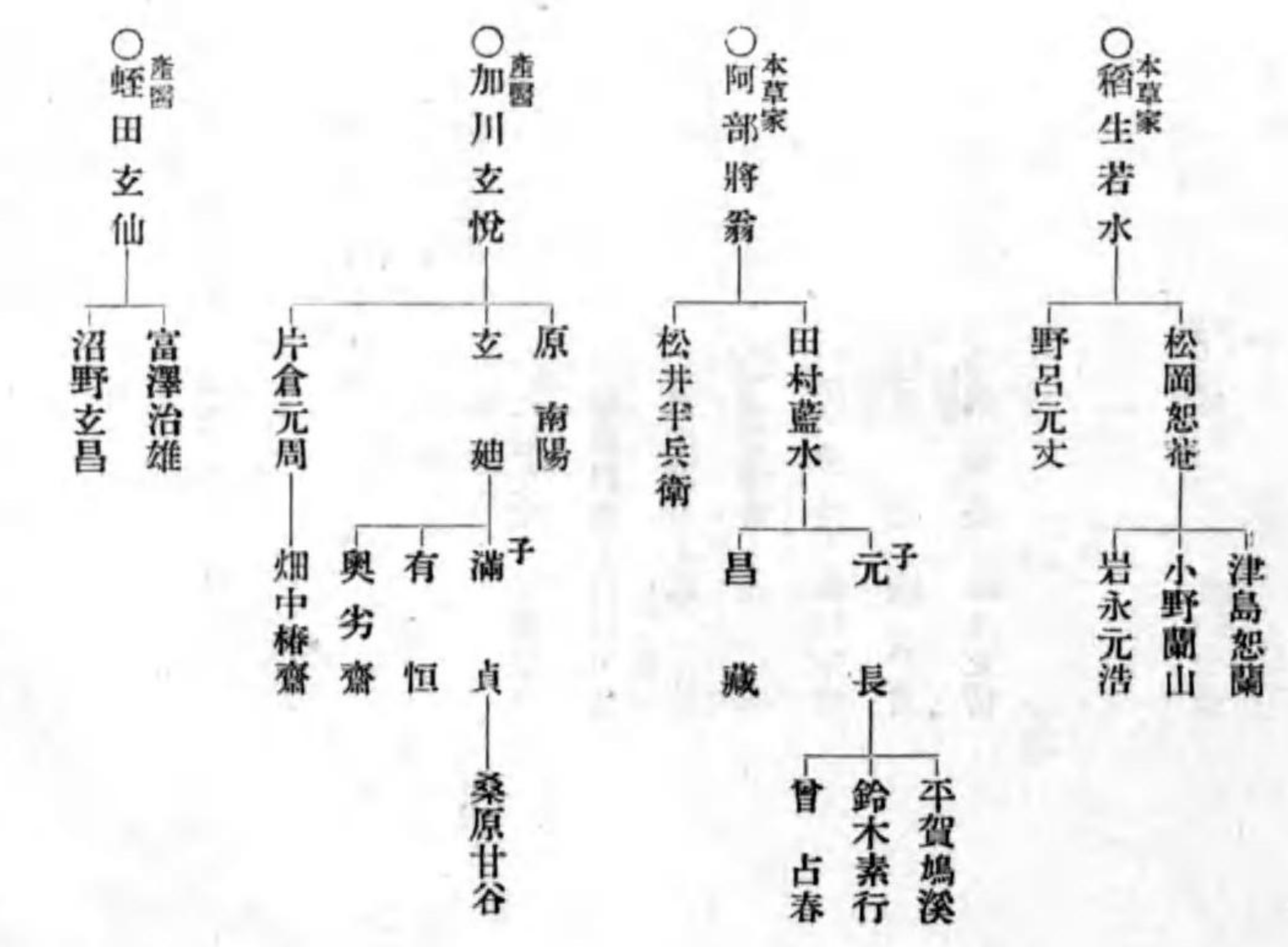
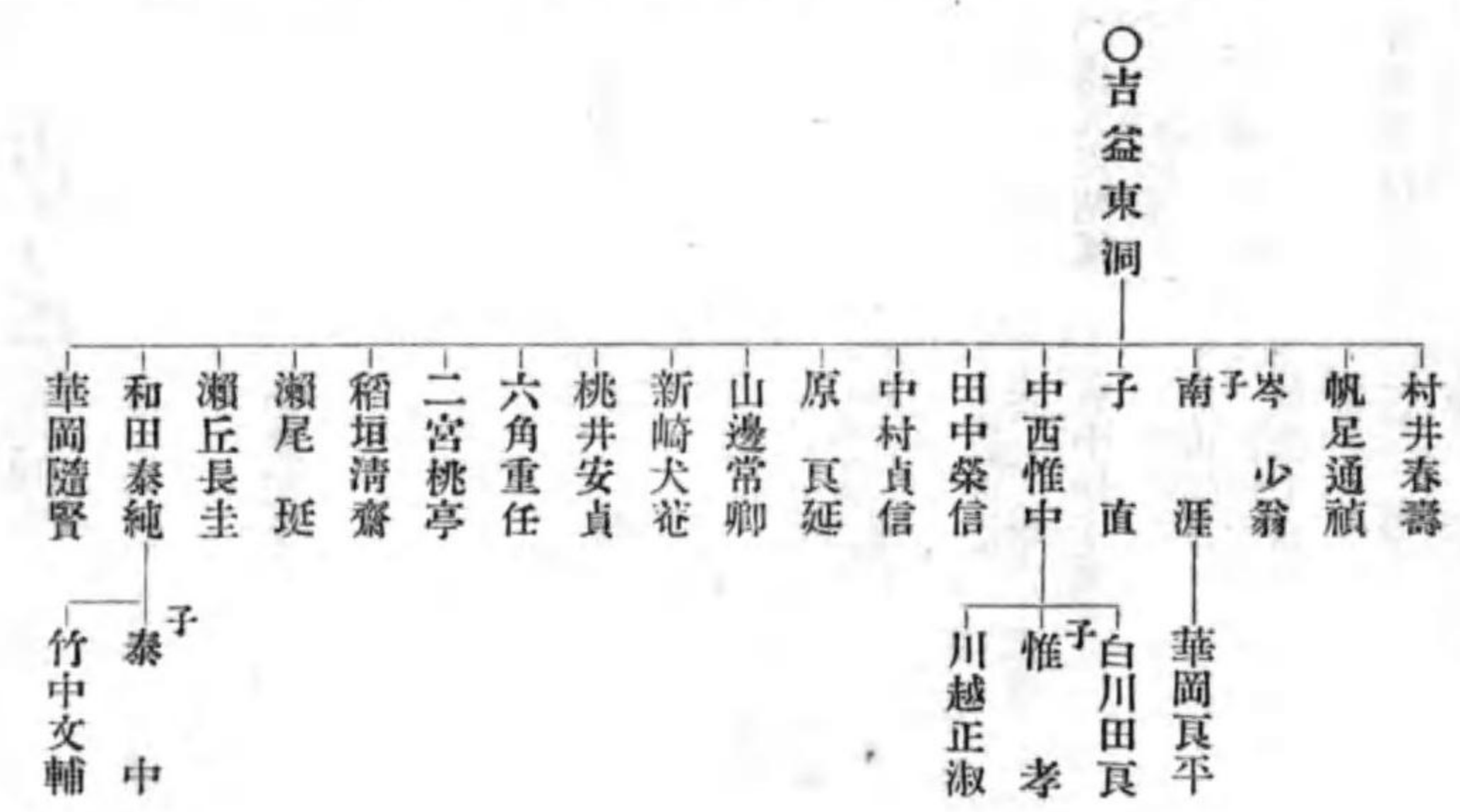
古方家

古方家醫譜

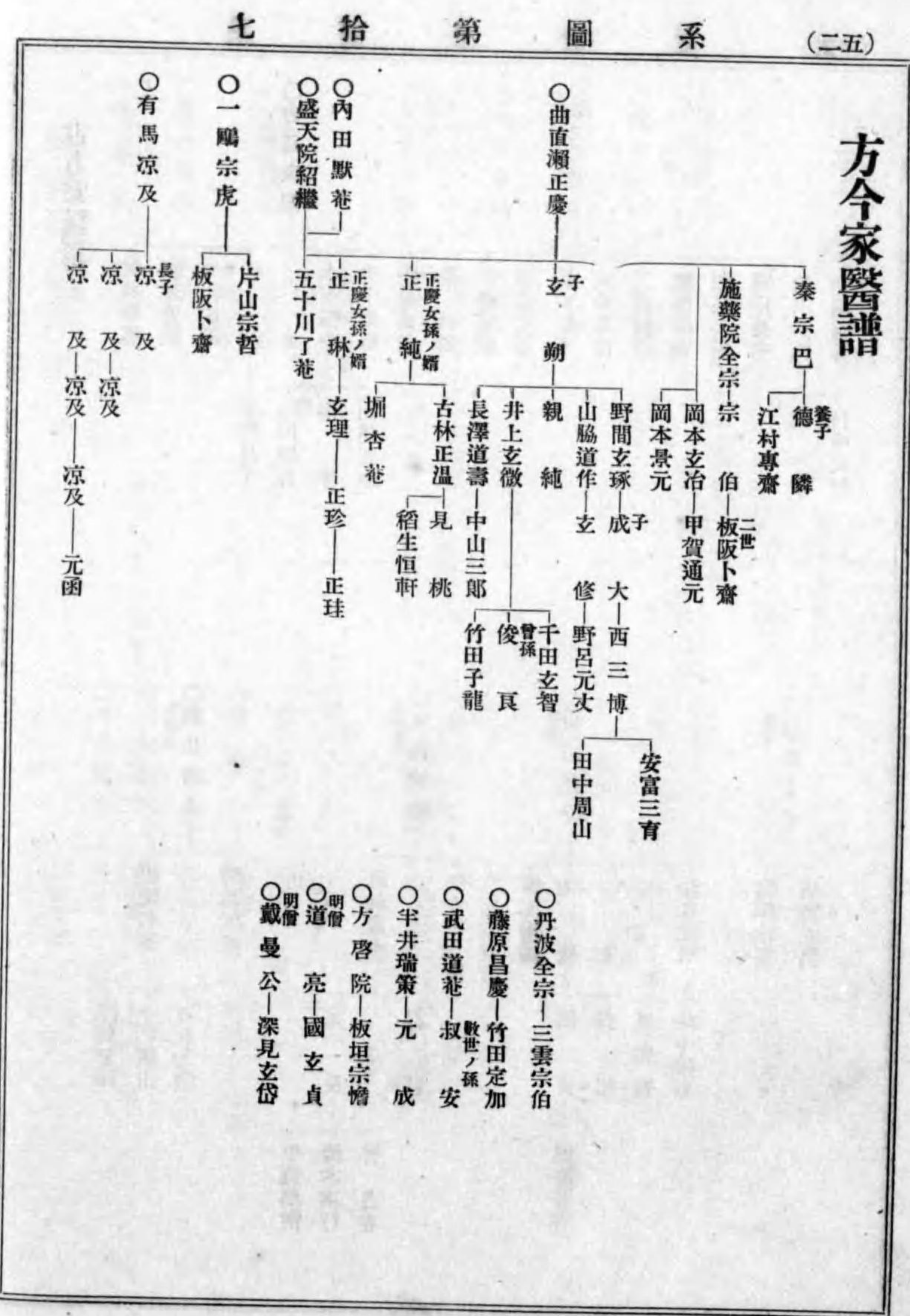


古方家

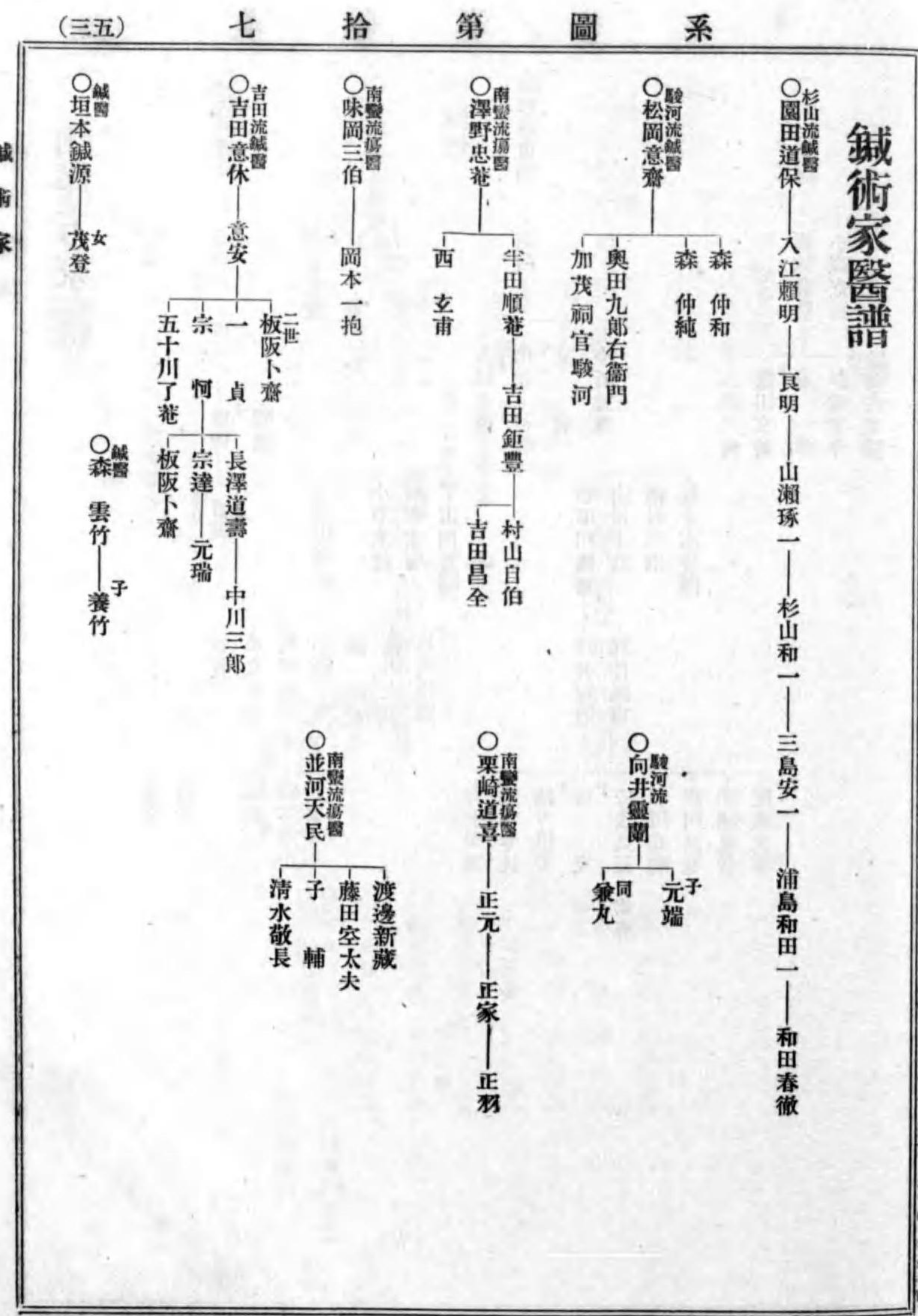
古方家醫譜



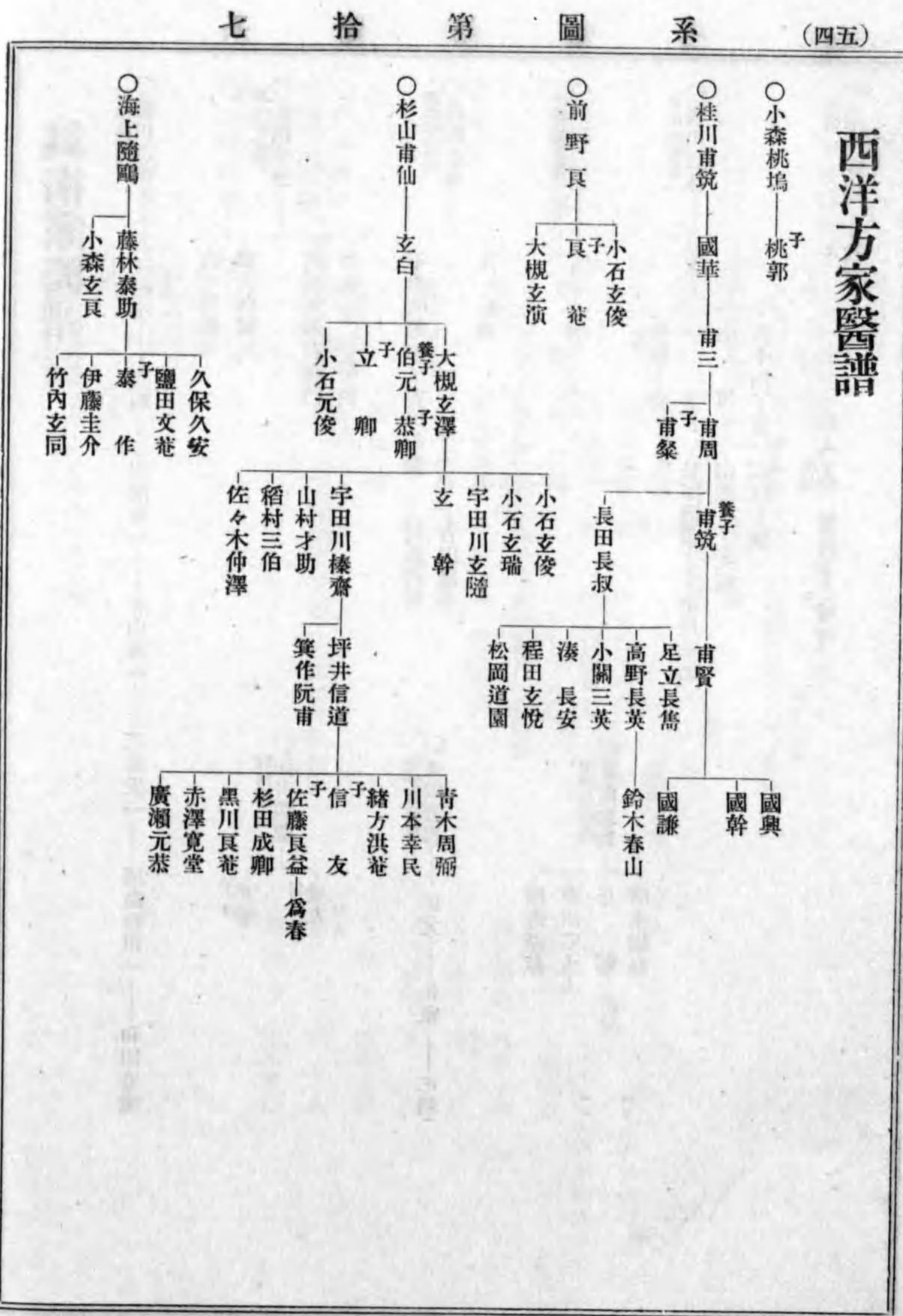
方今家醫譜



鍼術家醫譜

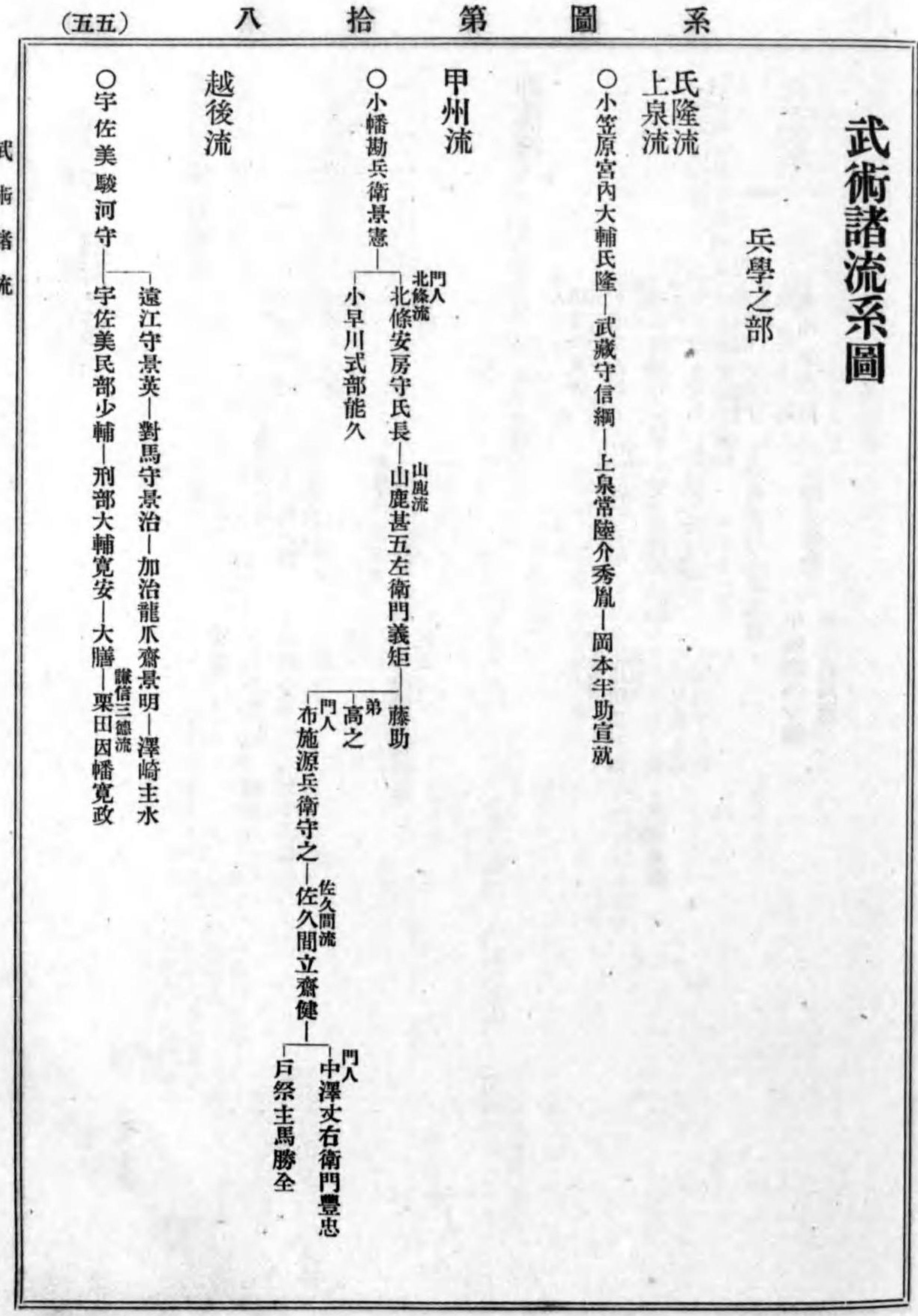


西洋方家醫譜



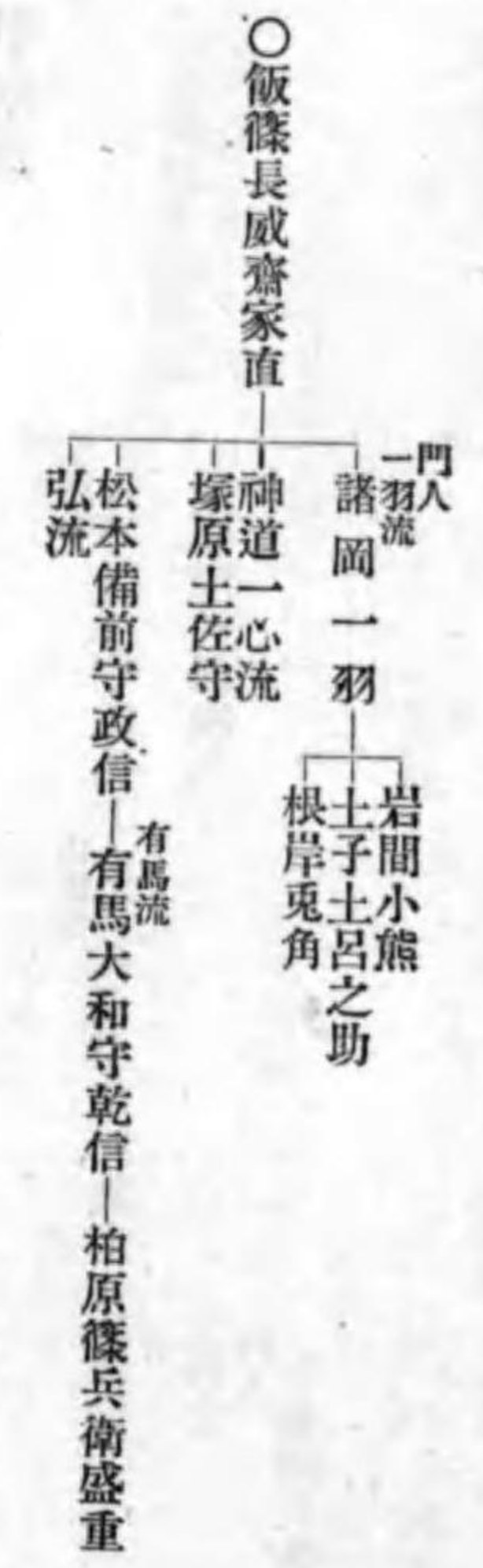
武術諸流系圖

兵學之部

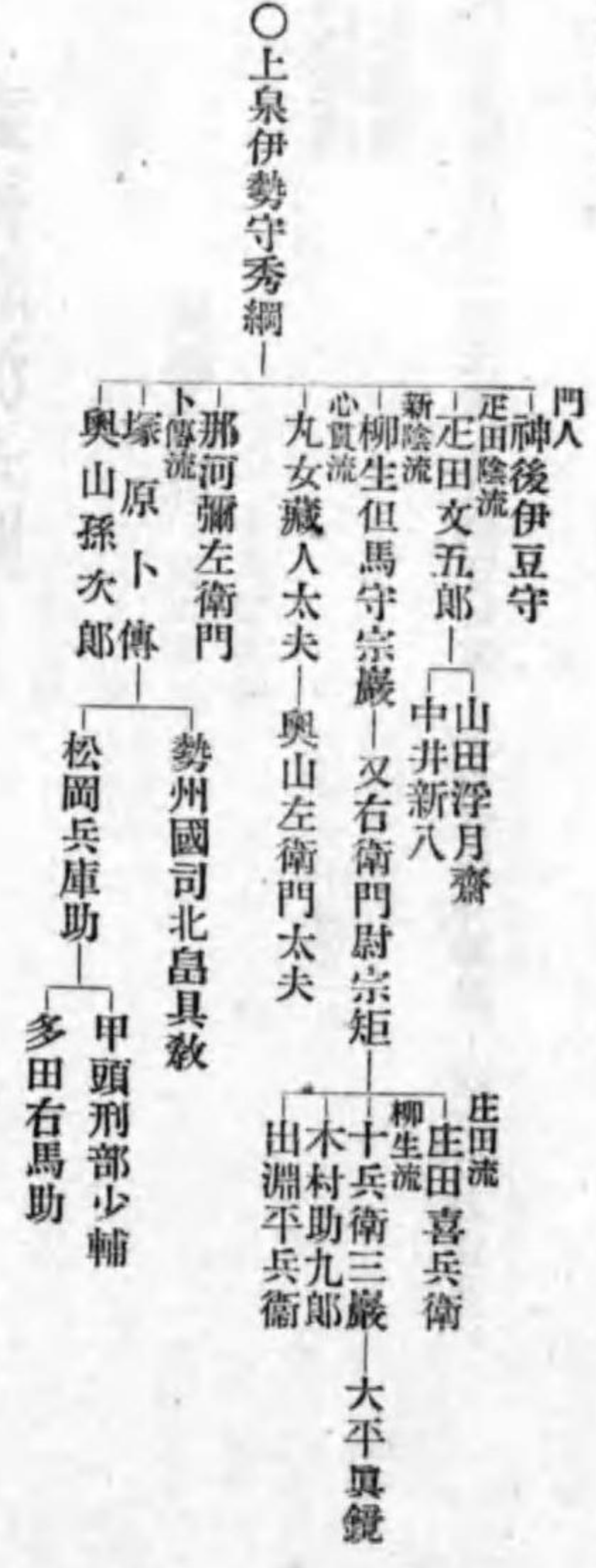


劍術之部

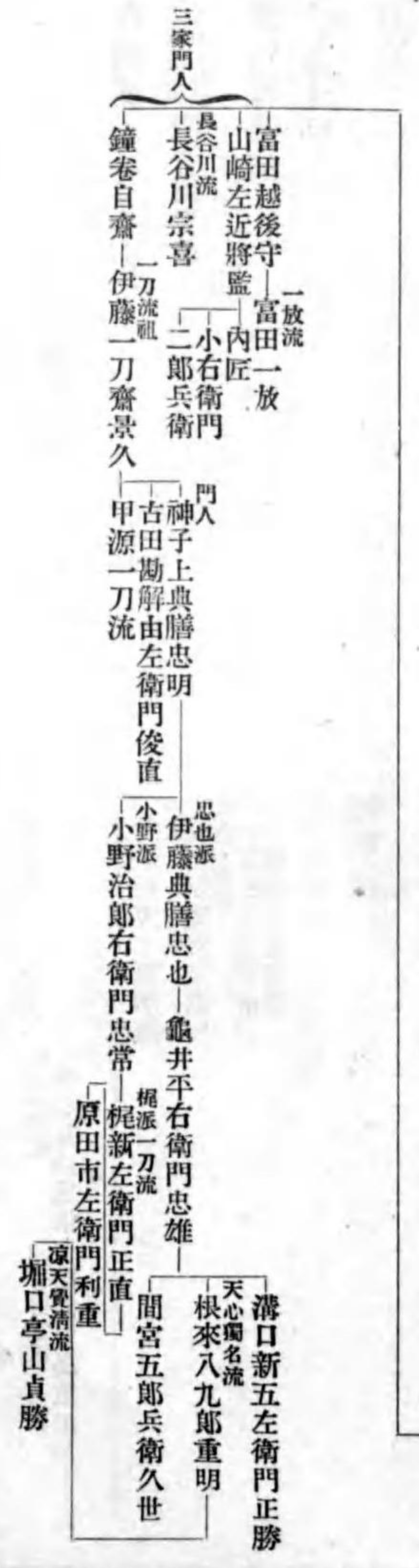
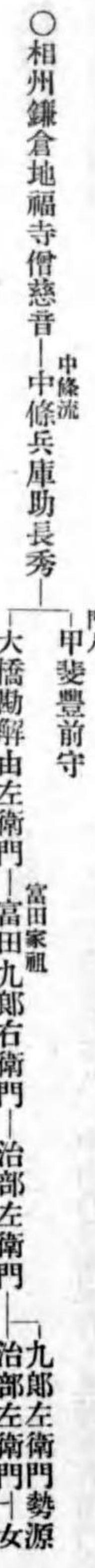
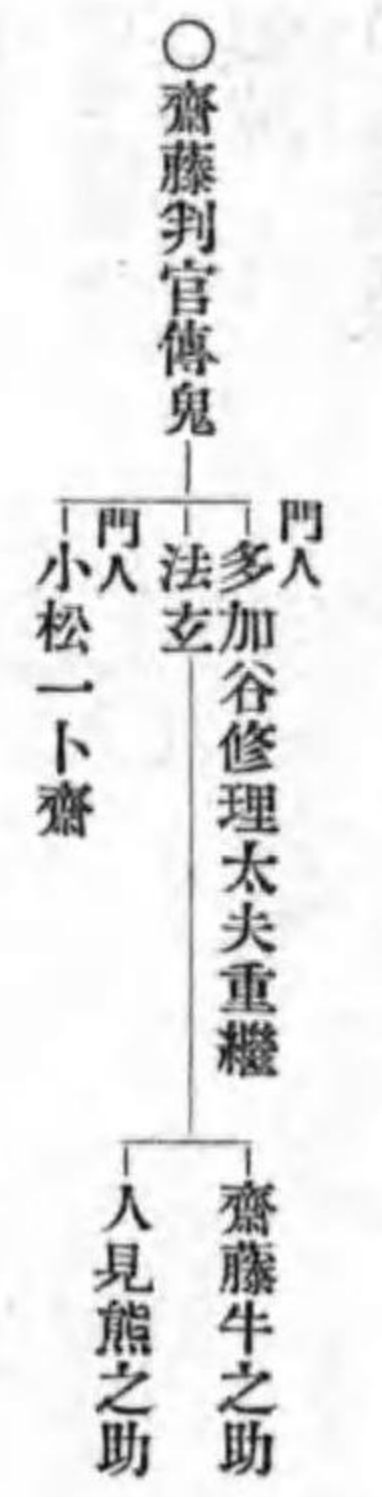
天真正傳神道流



神陰流



天道流



二刀政名流

○宮本武藏政名二刀藏人流青木城右衛門金家

吉岡流

○祇園藤次吉岡憲法

將監鞍馬流

○大野將監

願流

○松林佐馬助

諏訪流

○方波見備前守

京流

○前原備前守

源流

○木曾庄九郎

小田流

○小田讚岐守孝朝—讚岐守治朝—小田應變流

神明無想東流

○東下野守平元治

拔刀中興祖林崎甚助重信—拔刀田宮流田宮對馬重正

對馬長勝—無形流

長野無樂齋權露

拔刀一宮流

一宮左大夫照信

上泉孫次郎義胤

無明流

○石田伊豆守

念流

○上坂半左衛門安久—中山角兵衛家吉—飯野加右衛門宗正

東軍流

○東軍坊—川崎鑰之助五世孫川崎二郎太夫—高木甚左衛門

丹石流

衣斐丹石入道—飯沼牛齋—太郎

自源流

○自源坊—瀬戶口備前守

貫心流

○宍戶司箭家俊—河野大内藏道昭

拔刀一傳流

○九目主水正

拔刀伯耆流

○片山伯耆守久安

○柳生克己流

○神道流—心形刀流—柳剛流

○富田流無海流

○無眼流—大東流

馬術之部

○大坪流—上田流佐々木流

○八條流

○新當流

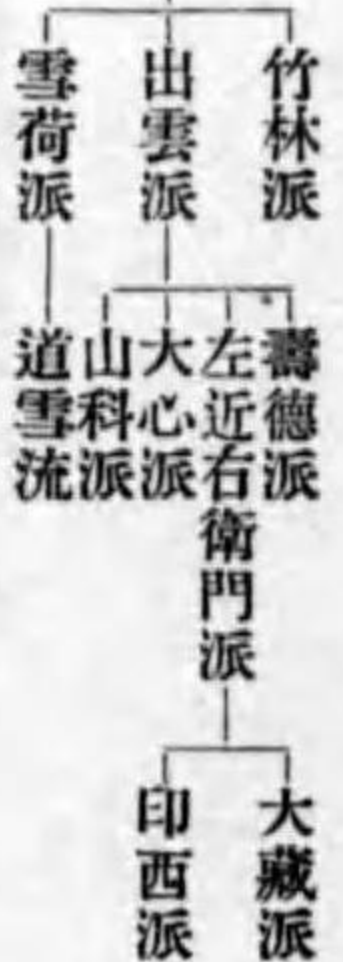
○新八條流

射術之部

○大和流

○日置流—吉田流

○小笠原流



槍術之部

○鎌寶藏院流—下石派旅川流—中村派高田派

○木下流

○穴澤流薙刀

○先意流薙刀

○無邊流—山本無邊流

○建孝流—虎尾流田邊流

○富田流—中根流打身流—佐分利流

○神道流—本間流樫原流—本心鏡知流一中派

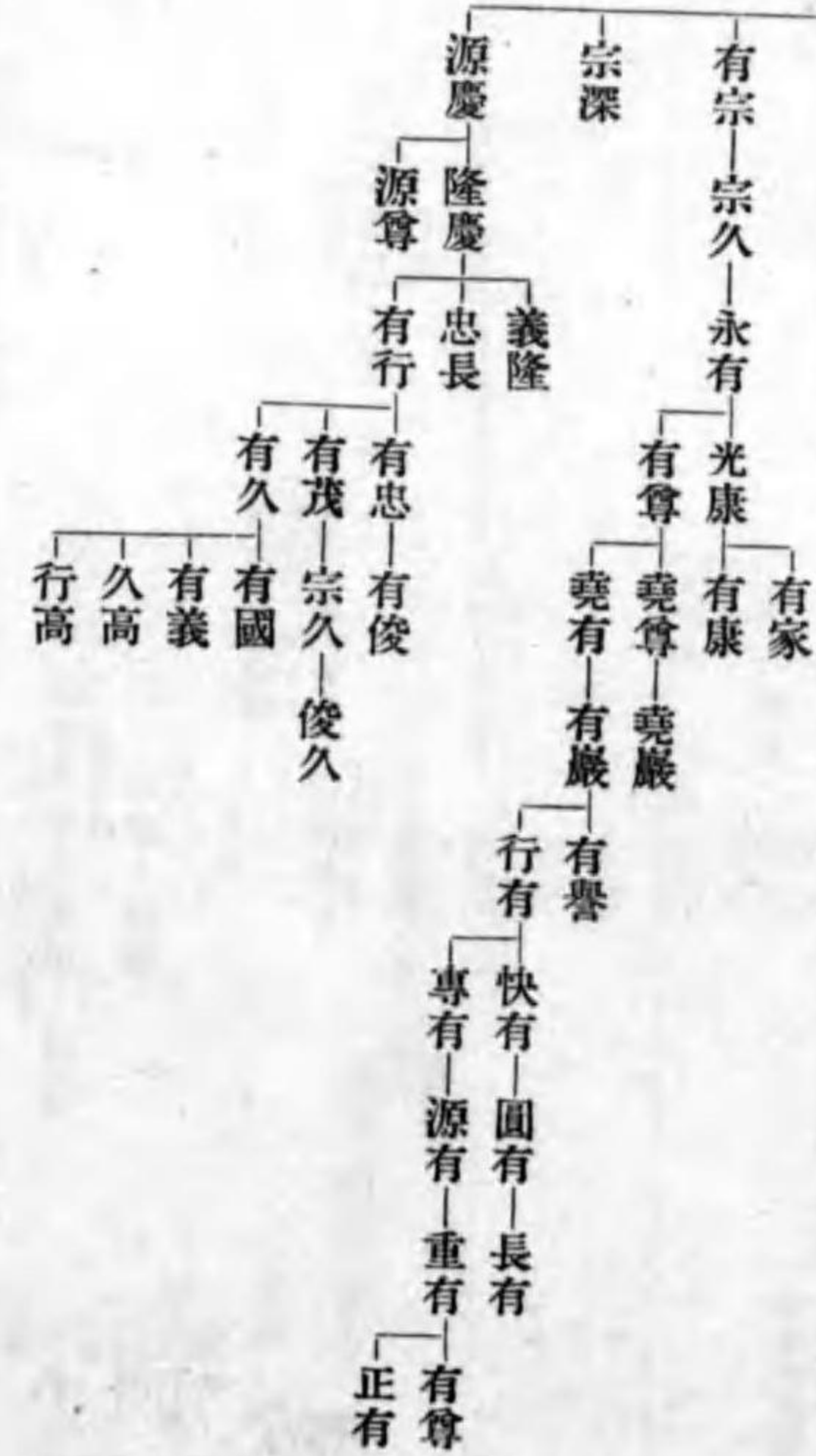
○大島流—種田流

○新八條流

繪畫諸流

巨勢氏系圖

○金岡 公忠—公茂—公義—深江—弘高—是重—信茂—宗茂—益宗—兼茂
相見



宅磨家畫譜

○巨勢弘高ト同時 長曆中ノ人 此間考可ラズ 保安中ノ人 爲遠爲久 滋賀 勝賀 父子傳統詳ナラズ 漢畫ノ筆法ヲ學ブ此ニ始ルト云フ
 ○爲氏 爲成 百年ノ莖アリ 爲遠爲久 滋賀 勝賀 成ハ云勝賀ノ子ト 榮賀 榮賀同時ノ人 嘉曆中ノ人 了尊 嘉曆中ノ人 淨宏 永享中ノ人 松谿

繪畫諸流

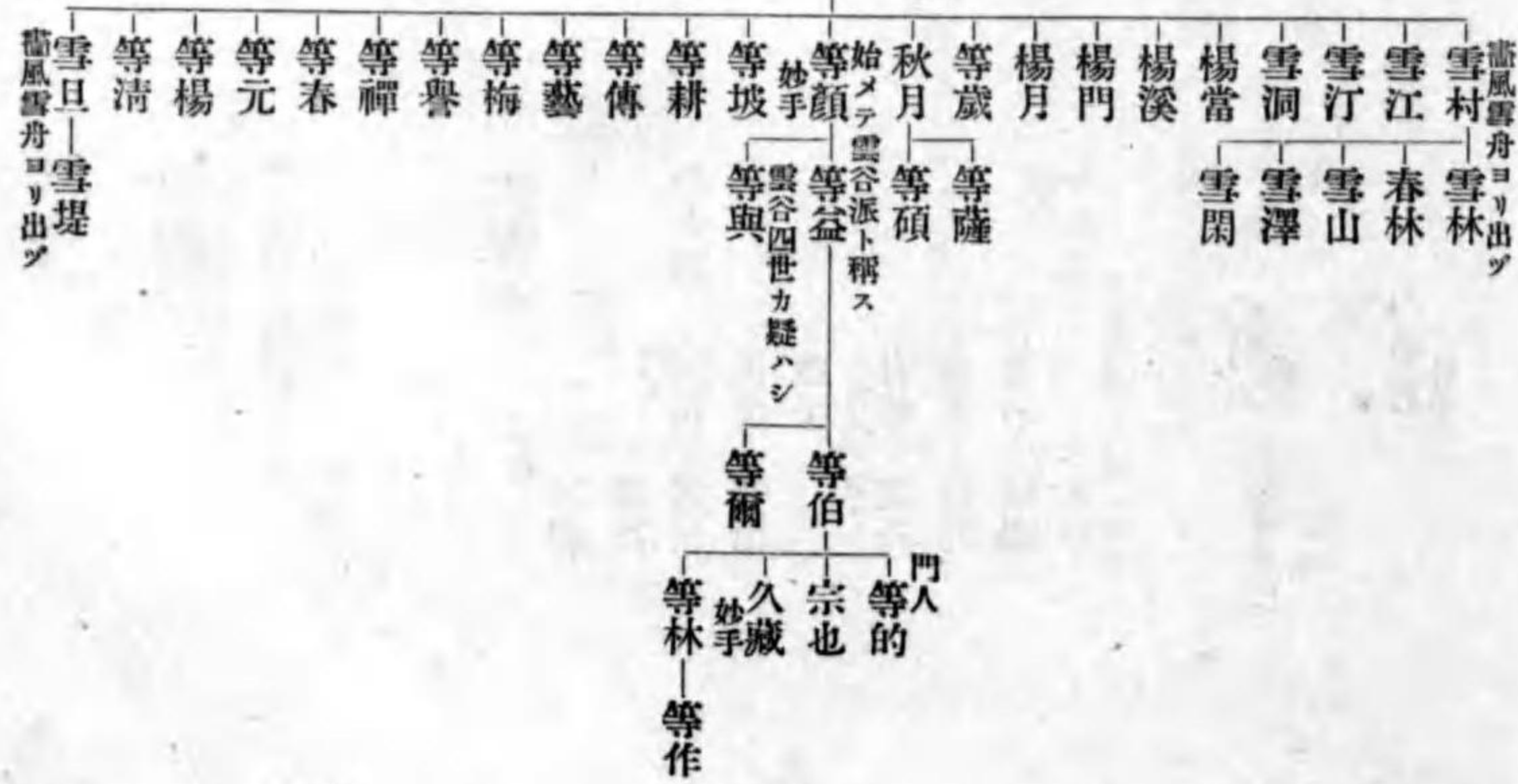
祥啓派畫譜

○祥啓 性安 呼ンテ啓畫記ト曰フ

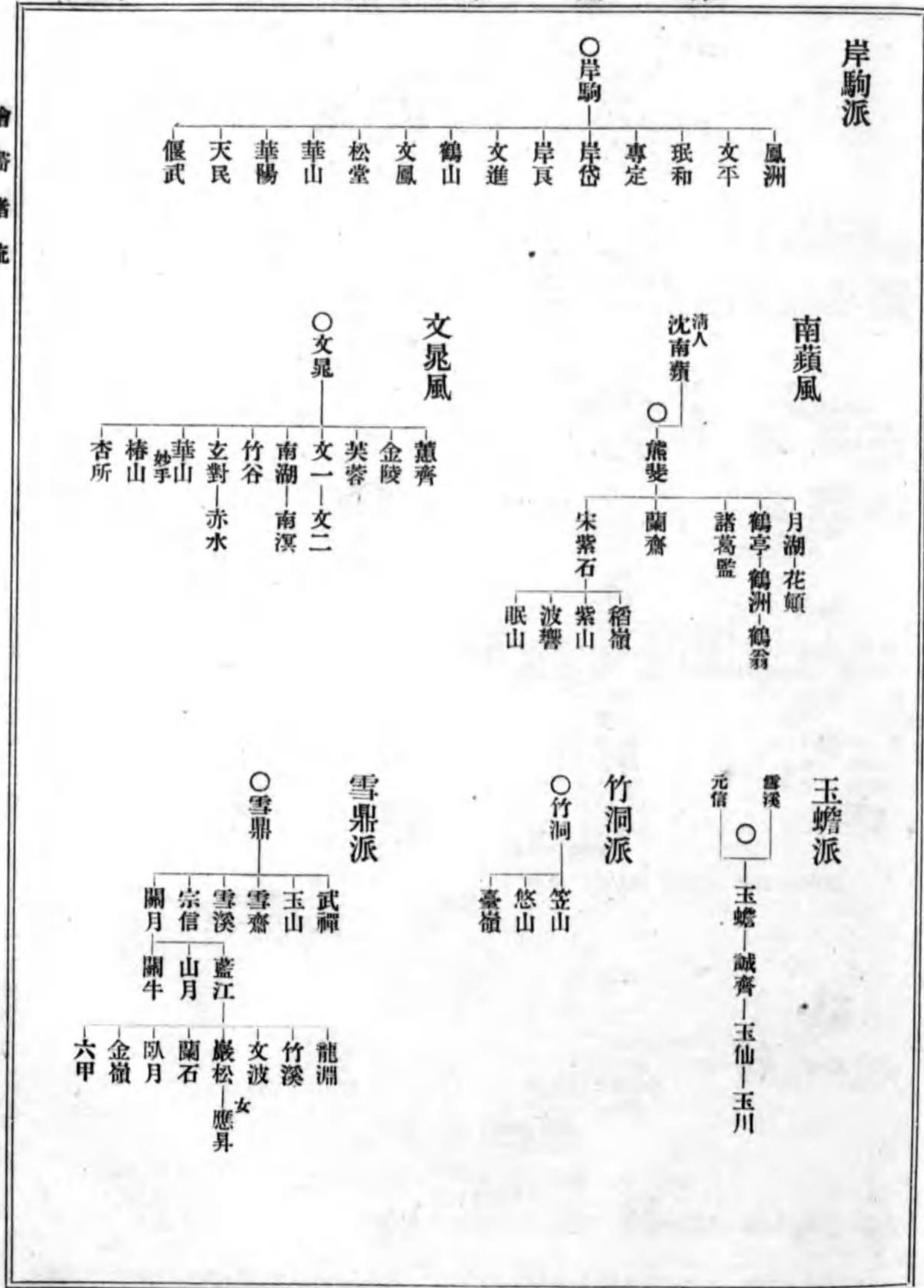


雲谷派畫譜

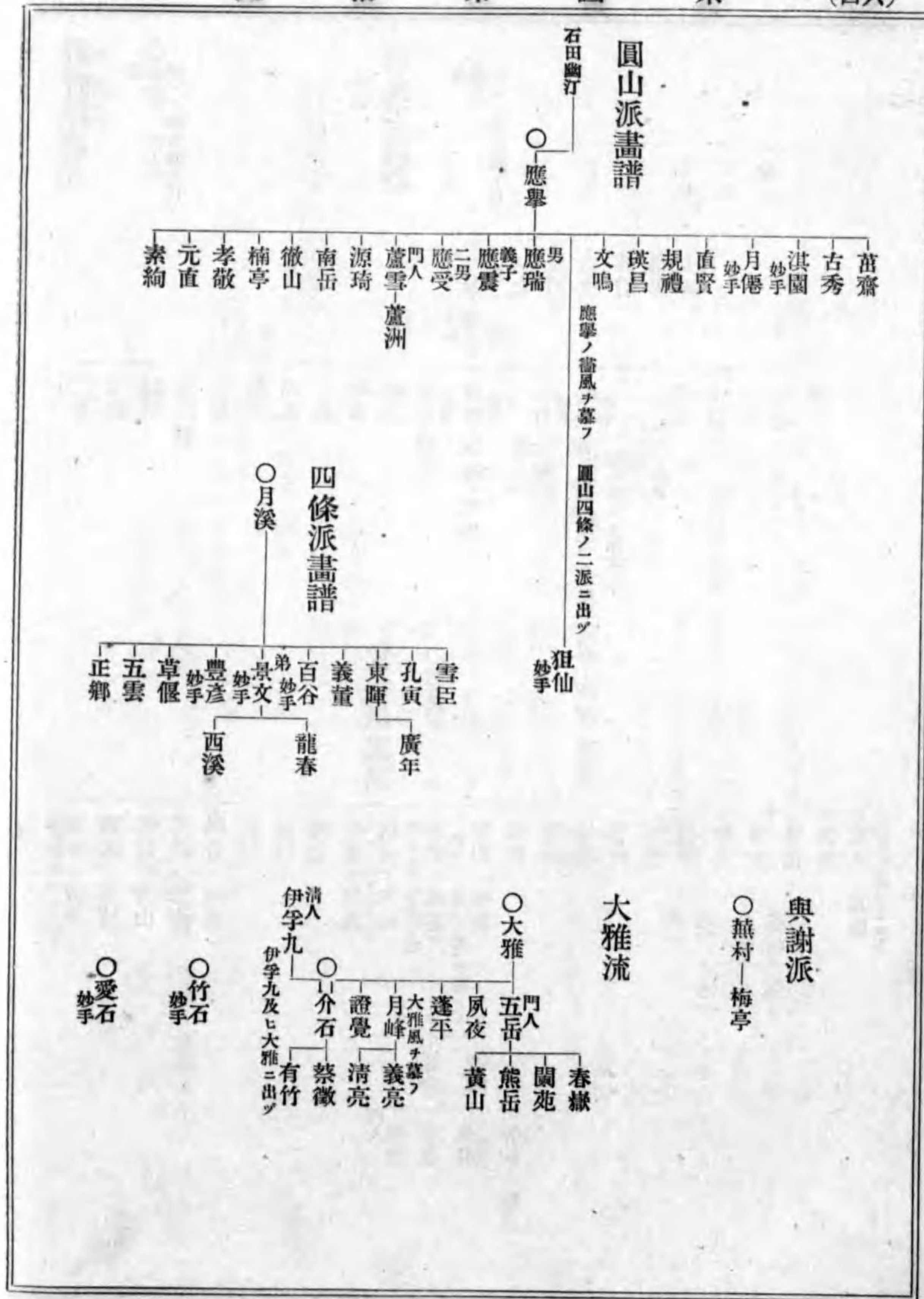
○雪舟



繪畫諸流



繪畫諸流



刀劍師系圖

備前一流系圖

○亥成 友成 介成 友安 友則 介光 友成 助友 助秀 助近 行秀

右同斷

○倍房 高平 助平 光宗 國總 貞直 高包 言氏

○包平 行光 末行 永富 真依 宗依 有清

備前國長船物之系圖

○近忠 光忠 安忠 景秀 景則 景安 真長 光忠 長重 爲宗 女子 義秀 忠近 俊光 康久 次光 長義 長義 長清 康光

長光 義光 景光 兼光 友光 師光 盛光 兼安 有光 忠光 清光 勝光
吉光 弘光 久光 經家 基光 秀光 行久 行宗 守元
經家 謙光 長光 久光 忠光 貞光 光景 重光

信濃多藝鍛冶系圖

○兼定 兼定 兼定 兼常 兼元 兼貞 兼貞

美濃赤坂鍛冶系圖

○忠義 忠哲 泉水 國長 國長 國光 長廣 廣長 兼光 兼角 下坂

美濃國西郡系圖

○外藤 長基 女子 壽命 壽命 壽命 壽命 宗吉 宗次 助宗 宗吉

大和國當麻系圖

○國行 友清 友綱 友長 友行 未利 利光 有光 俊行 有法師 次有 有俊 女子 信長

大和尻懸系圖

○則弘 則長 則長 則長 女子 則貞 弘村

大和手搔系圖

○包永 包永 包利 包行 包真 包持 女子 包定 包清 包次 包貞 包俊

大和保昌系圖

○國光 貞吉 貞宗 貞清 貞光 貞光 女子 貞興

平安城物之系圖

○長光 光長 女子 長吉 吉永 吉則 女子 吉則 吉廣 吉廣 吉次 吉次 重次 定家 長吉

山城國綾小路物之系圖

○永昌 定利 女子 介定 末行 定家 家俊 女子 忠家

備前葦田郡物之系圖

○助國兼行「行吉秀次」一乘國吉國乘
兼安金行兼光重俊

和泉和田加賀四郎系圖

○正清正清「政清」資正資次
○清常常清正清

京三條宗近一流系圖

○宗近吉家在國「宗近」兼永國永

粟田口物之系圖

○國賴國家國友「則國」友末玉
久國則國國吉國光國延吉正「景長」景長景長
系國久元有國國綱國弘有國國光

備前福岡一文字

○延房「宗吉」吉家「吉平」吉守「家俊」吉用次家吉友
延正「吉房」吉房吉元「宗長」依宗乘安「家忠」則依助依

備前福岡一文字

○守近宗家守家「守家」家助
家安真守宗恒守俊經家

備前國物之系圖

○雲生雲同「雲重」雲次雲次

備前大宮物之系圖

○國盛助盛「盛助」盛恒盛次盛景「景政」次盛助盛
女子盛則

相摸國鎌倉物之系圖

○國宗國光國重國廣國泰正宗「廣光」義弘金重國重兼光長義則重左衛門兼氏盛高
貞宗秋廣「秋廣」廣光「吉廣」廣光女子正廣廣正隆廣助廣
元重重廣國光

右相傳之系圖

○延真延房延正國真國宗國宗國重國次行光正宗貞宗秋廣

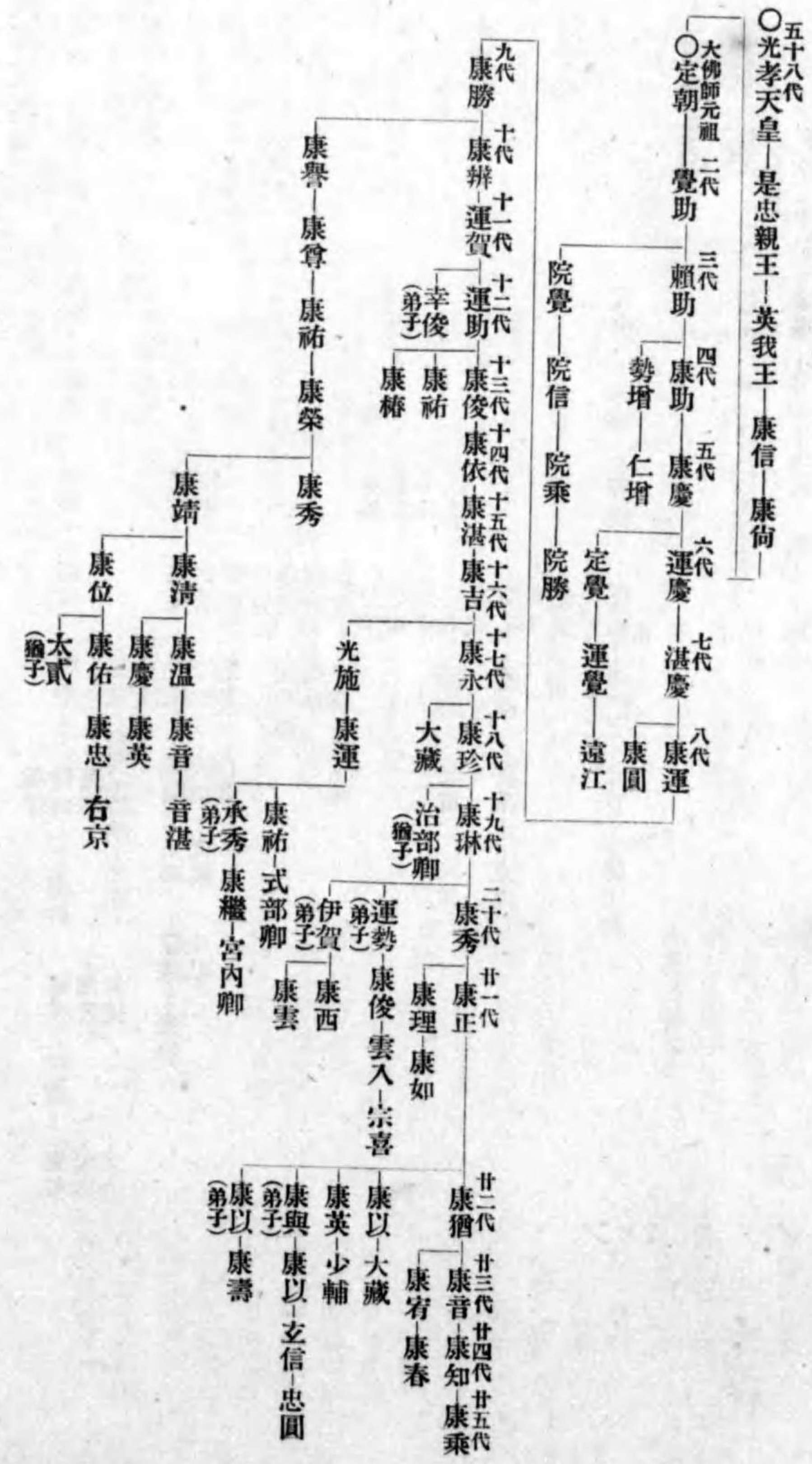
古備前國物之系圖

○正恒「正次」正真村守常保真則久則
正恒「近包」近村真恒

佛工系圖

(六七)

系圖第貳拾貳



相撲

大關

(○印ハ横綱)

系圖第貳拾參 (七七)

- 明石志賀之助
- 兩國梶之助
- 菅谷勘四郎
- 比良ヶ嶽志賀右衛門
- 鬼方島磯右衛門
- 今雲灘右衛門
- 鷺ヶ濱音右衛門
- 廣原海濱右衛門
- 吹歸寅右衛門
- 鐵石城五郎
- 千田川音松
- 谷風梶之助
- 陣幕島之助
- 鬼面山與一右衛門
- 玉垣額之助
- 緋威 力彌
- 武隈文右衛門
- 境川浪右衛門
- 境川浪右衛門
- 梅ヶ谷藤太郎
- 小錦八十吉
- 仁王仁太夫
- 御用木無次右衛門
- 大矢島新右衛門
- 駒ヶ嶽儀右衛門
- 源氏森繁右衛門
- 鷺海灘右衛門
- 四海瀉國右衛門
- 押尾川卷右衛門
- 錦木塚右衛門
- 千田川熊藏
- 源氏山綱五郎
- 小野川喜三郎
- 九國山新治
- 大岬丈右衛門
- 源氏山吉太夫
- 追手風喜太夫
- 鏡岩濱之助
- 雲龍 久吉
- 象ヶ鼻平助
- 楯山久三郎
- 大鳴門灘右衛門
- 山嵐嶽右衛門
- 大碓灘右衛門
- 箕島重太左衛門
- 鳴澤音右衛門
- 鷺ヶ嶽右衛門
- 鍛鐵岡右衛門
- 鶴渡國右衛門
- 關ノ戸音右衛門
- 小ノ瀧定右衛門
- 山ノ井鷺之助
- 秋津風音右衛門
- 九紋龍清太夫
- 雷電爲右衛門
- 銀音五郎
- 四賀峯東吉
- 劍山谷右衛門
- 小柳 常吉
- 不知火光右衛門
- 綾瀬川三左衛門
- 西ノ海嘉次郎
- 八幡山定吉
- 白山新三郎
- 兩國市太左衛門
- 細石嵯峨右衛門
- 大木戸源太夫
- 繪島瀉灘右衛門
- 二荒山瀧右衛門
- 龍ヶ洞谷之助
- 市ノ上淺右衛門
- 鬼面山與一右衛門
- 有馬山瀧右衛門
- 不動山岡右衛門
- 鬼面山谷五郎
- 平石七右衛門
- 鳳凰谷五郎
- 阿武松縁之助
- 不知火諾右衛門
- 猪王山森右衛門
- 鬼面山谷五郎
- 雷電震右衛門
- 劍山谷右衛門
- 大戸平廣吉
- 鬼勝象之助
- 丸山權太左衛門
- 北國官太夫
- 虹ヶ嶽仙右衛門
- 二所ヶ尾軍太夫
- 筑紫瀉増右衛門
- 木幡山森右衛門
- 大見崎音右衛門
- 白川志賀右衛門
- 荒馬大五郎
- 惠蘇ヶ嶽峯右衛門
- 玉垣額之助
- 柏戸宗五郎
- 柏戸 利助
- 稻妻雷五郎
- 秀山雷五郎
- 階ヶ嶽龍右衛門
- 陣幕久五郎
- 朝日嶽鶴之助
- 大達羽左衛門
- 大碓紋太郎

相撲

觀世流

○觀世路阿彌 彌七郎 永田春 萬五郎 源右衛門

○福王太夫 少次郎 神右衛門 盛義 盛貞 盛厚 盛親 盛仍 盛信 盛有 茂左衛門

○進藤久右衛門 權右衛門 權三郎 權十郎 十郎右衛門 久右衛門 權右衛門 權兵衛 彦三郎 平右衛門

○春日道幽 又三郎 市右衛門 又三郎 八兵衛 市右衛門 又三郎 淺澤孫次郎 彦之丞

○牧野與左衛門 牛尾玄笛 穴戶伯耆守 森田庄兵衛 庄兵衛 庄兵衛 長藏 庄兵衛 長藏

○大藏五郎 道意 平藏 源右衛門 源右衛門 源六藏 長右衛門 長右衛門 六藏 重兵衛 重兵衛 七左衛門 又四郎 權三郎 隅之丞 葛野九郎兵衛 庄九郎 九郎兵衛 市郎兵衛 小忠 庄九郎 九郎兵衛 市郎兵衛

驚狂言元祖

○驚太夫 三郎四郎 三之丞 仁右衛門 養子 仁右衛門 猪右衛門 仁右衛門 仁右衛門 權之丞 源右衛門

系圖第貳拾四

系圖第貳拾四 (一八)

金剛派

○金剛善覺 五郎 次郎三郎 新六 孫太郎 又兵衛 右京 右京 右京 右近 又兵衛 新六 彌市郎 喜內 男脇方 四郎左衛門 又兵衛 伊右衛門 太郎左衛門 太郎左衛門 太郎左衛門 彦太郎 彦太郎 彦九郎

○高安與太郎 與兵衛 與八郎 久右衛門 長左衛門 彦十郎

○三右衛門 三右衛門 三九郎 平三郎 三太郎 久三郎 新三郎

喜多派

○喜多七太夫 左京 大仁 十太夫 七太夫 十太夫 權左衛門 十太夫 榮之丞 八之丞 權左衛門 權左衛門 權十郎 六平

表年人偉本日大 (二一)

紀元	100	110	1110	11110	1120	1130	1140	1150	1160	1170	1180
紀元											
年號											
天子											
宰相											
將軍											
執權											
將士											
學者											
名僧											
醫師											
畫人											
俳優											
淨瑠璃											
戲作者											
金工											
雜曲											

偉人年表(紀元自一〇〇至二八〇)

安樂天皇
大觀元年
出雲命

安樂天皇
大觀元年
出雲命

表年人偉本日大 (三一)

紀元	190	1100	1110	11110	111110	11120	11130	11140	11150	11160	11170	11180
紀元												
年號												
天子												
宰相												
將軍												
執權												
將士												
學者												
名僧												
醫師												
畫人												
俳優												
淨瑠璃												
戲作者												
金工												
雜曲												

偉人年表(紀元自一〇〇至二八〇)

孝昭天皇
孝安天皇
出雲命

孝昭天皇
孝安天皇
出雲命

偉人年表(紀元自四八〇至六六〇)

紀元	年號	天子	宰相	將軍	執權	將士	學者	名僧	醫師	畫人	俳人及	知識人及	武術	俳優	淨瑠璃	戲作者	金工	雜曲	紀元
四八〇	四九〇	開化天皇	大臣大縣押命 大臣武履命 大臣伊香色羅命																四八〇
四九〇	五〇〇																		四九〇
五〇〇	五一〇																		五一〇
五一〇	五二〇																		五二〇
五二〇	五三〇																		五三〇
五三〇	五四〇																		五四〇
五四〇	五五〇																		五五〇
五五〇	五六〇																		五六〇

偉人年表(紀元自四八〇至六六〇) (六一)

紀元	年號	天子	宰相	將軍	執權	將士	學者	名僧	醫師	畫人	俳人及	知識人及	武術	俳優	淨瑠璃	戲作者	金工	雜曲	紀元
五七〇	五八〇	崇神天皇	諸心命 多辨命 安毛建奏命 大連御膳別命																五七〇
五八〇	五九〇																		五八〇
五九〇	六〇〇																		六〇〇
六〇〇	六一〇																		六一〇
六一〇	六二〇																		六二〇
六二〇	六三〇																		六三〇
六三〇	六四〇	垂仁天皇																	六四〇
六四〇	六五〇																		六五〇
六五〇	六六〇																		六六〇

偉人年表(紀元自四八〇至六六〇) (七一)

偉人年表(紀元自四八〇至六六〇)

偉人年表(紀元自一〇五〇至一一九〇)

(一三) 大日本偉人年表

紀元	1050	1060	1070	1080	1090	1100	1110	1120	1130	
天子	履中天皇 反正天皇 允恭天皇	履中天皇 反正天皇 允恭天皇	履中天皇 反正天皇 允恭天皇	履中天皇 反正天皇 允恭天皇	履中天皇 反正天皇 允恭天皇	履中天皇 反正天皇 允恭天皇	履中天皇 反正天皇 允恭天皇	履中天皇 反正天皇 允恭天皇	履中天皇 反正天皇 允恭天皇	履中天皇 反正天皇 允恭天皇
宰相	平藤實光 藤原實成 藤原實房	平藤實光 藤原實成 藤原實房	平藤實光 藤原實成 藤原實房	平藤實光 藤原實成 藤原實房	平藤實光 藤原實成 藤原實房	平藤實光 藤原實成 藤原實房	平藤實光 藤原實成 藤原實房	平藤實光 藤原實成 藤原實房	平藤實光 藤原實成 藤原實房	平藤實光 藤原實成 藤原實房
將軍	大伴善房 大伴善房 大伴善房	大伴善房 大伴善房 大伴善房	大伴善房 大伴善房 大伴善房	大伴善房 大伴善房 大伴善房	大伴善房 大伴善房 大伴善房	大伴善房 大伴善房 大伴善房	大伴善房 大伴善房 大伴善房	大伴善房 大伴善房 大伴善房	大伴善房 大伴善房 大伴善房	大伴善房 大伴善房 大伴善房
執權										
將士	紀小呂 秦酒君									
學者										
名僧										
醫師										
書人										
佛人及 和歌人及 武術										
伊優										
淨瑠璃										
戲作者										
金工										
諸曲										
紀元	1050	1060	1070	1080	1090	1100	1110	1120	1130	

偉人年表(紀元自一〇五〇至一一九〇)

(一三) 大日本偉人年表

紀元	1140	1150	1160	1170	1180	1190	
天子	清寧天皇 應永天皇 仁賢天皇	清寧天皇 應永天皇 仁賢天皇	清寧天皇 應永天皇 仁賢天皇	清寧天皇 應永天皇 仁賢天皇	清寧天皇 應永天皇 仁賢天皇	清寧天皇 應永天皇 仁賢天皇	清寧天皇 應永天皇 仁賢天皇
宰相	大伴善房 大伴善房 大伴善房	大伴善房 大伴善房 大伴善房	大伴善房 大伴善房 大伴善房	大伴善房 大伴善房 大伴善房	大伴善房 大伴善房 大伴善房	大伴善房 大伴善房 大伴善房	大伴善房 大伴善房 大伴善房
將軍	大伴善房 大伴善房 大伴善房	大伴善房 大伴善房 大伴善房	大伴善房 大伴善房 大伴善房	大伴善房 大伴善房 大伴善房	大伴善房 大伴善房 大伴善房	大伴善房 大伴善房 大伴善房	大伴善房 大伴善房 大伴善房
執權							
將士							
學者							
名僧							
醫師							
書人							
佛人及 和歌人及 武術							
伊優							
淨瑠璃							
戲作者							
金工							
諸曲							
紀元	1140	1150	1160	1170	1180	1190	

偉人年表(紀元自一三五〇至一四七〇)

紀元	年號	天子	宰相	將軍	執權	將士	學者	名僧	醫師	畫人	俳人及	和歌人及	武者	伊優	淨瑠璃	戲作者	金工	諸曲	紀元
一三五〇	崇鳥	崇鳥天皇	多治比島 阿部御主人 藤原不比等	藤原不比等		筑紫益	道昭	道昭				安部房俊	安部房俊						一三五〇
一三六〇	大實	崇鳥天皇	多治比島 阿部御主人 藤原不比等	藤原不比等		大實	道昭	道昭				安部房俊	安部房俊						一三六〇
一三七〇	大實	崇鳥天皇	多治比島 阿部御主人 藤原不比等	藤原不比等		大實	道昭	道昭				安部房俊	安部房俊						一三七〇
一三八〇	大實	崇鳥天皇	多治比島 阿部御主人 藤原不比等	藤原不比等		大實	道昭	道昭				安部房俊	安部房俊						一三八〇
一三九〇	大實	崇鳥天皇	多治比島 阿部御主人 藤原不比等	藤原不比等		大實	道昭	道昭				安部房俊	安部房俊						一三九〇

偉人年表(紀元自一四七〇至一三五〇)

紀元	年號	天子	宰相	將軍	執權	將士	學者	名僧	醫師	畫人	俳人及	和歌人及	武者	伊優	淨瑠璃	戲作者	金工	諸曲	紀元
一四〇〇	大實	崇鳥天皇	多治比島 阿部御主人 藤原不比等	藤原不比等		大實	道昭	道昭				安部房俊	安部房俊						一四〇〇
一四一〇	大實	崇鳥天皇	多治比島 阿部御主人 藤原不比等	藤原不比等		大實	道昭	道昭				安部房俊	安部房俊						一四一〇
一四二〇	大實	崇鳥天皇	多治比島 阿部御主人 藤原不比等	藤原不比等		大實	道昭	道昭				安部房俊	安部房俊						一四二〇
一四三〇	大實	崇鳥天皇	多治比島 阿部御主人 藤原不比等	藤原不比等		大實	道昭	道昭				安部房俊	安部房俊						一四三〇
一四四〇	大實	崇鳥天皇	多治比島 阿部御主人 藤原不比等	藤原不比等		大實	道昭	道昭				安部房俊	安部房俊						一四四〇
一四五〇	大實	崇鳥天皇	多治比島 阿部御主人 藤原不比等	藤原不比等		大實	道昭	道昭				安部房俊	安部房俊						一四五〇
一四六〇	大實	崇鳥天皇	多治比島 阿部御主人 藤原不比等	藤原不比等		大實	道昭	道昭				安部房俊	安部房俊						一四六〇
一四七〇	大實	崇鳥天皇	多治比島 阿部御主人 藤原不比等	藤原不比等		大實	道昭	道昭				安部房俊	安部房俊						一四七〇

偉人年表(紀元自一三五〇至一四七〇)

偉人年表(紀元自一四七〇至一三五〇)

偉人年表(紀元自一六三〇至一六八〇)

紀元	年號	天子	宰相	將軍	執權	將士	學者	名僧	醫師	畫人	茶人及 俳人	和歌人 及紀伊侍	武術	俳優	淨瑠璃	戲作者	金工	漆曲	紀元
1630	應和康保安和	冷泉天皇 圖融天皇	源高明 藤原師忠 藤原實賴 藤原在朝 藤原伊文 藤原賴通	源高明 藤原師忠 藤原實賴 藤原在朝 藤原伊文 藤原賴通		源延光 平貞盛	藤原直幹 加茂保盛	應和淨藏 仲實義 空照 空也增祐	藤原淡勢 丹波重雅 丹波藤賴	巨勢公敏		源順							1640
1640	天延貞元 元永觀寬和	花山天皇	藤原藤親 藤原賴忠	藤原藤親 藤原賴忠		藤原惟成 藤原義實	藤原惟正 大江匡衡 安部晴明	源和淨藏 仲實義 空照 空也增祐	丹波重雅 丹波藤賴	巨勢公敏									1650

大日本偉人年表 (一三〇)

紀元	年號	天子	宰相	將軍	執權	將士	學者	名僧	醫師	畫人	茶人及 俳人	和歌人 及紀伊侍	武術	俳優	淨瑠璃	戲作者	金工	漆曲	紀元
1650	永延永祿 正曆長德 長保寬弘	一條天皇 三條天皇 後一條天皇	藤原兼家 藤原重信 藤原隆光 藤原隆長	藤原兼家 藤原重信 藤原隆光 藤原隆長		源清仲	藤原元輔 清原光榮 大江以實 加茂光榮 阿部吉平 阿部吉昌	勤信陽生 鏡義 增實 實朝 實興 性雅 空慶 藥濟源慶 智然信圓 慶壽	清原為時 大春日藤 河內博遠	名鹿房兵 巨勢弘高		藤原長能 平兼盛 赤坂右衛門 藤原實方 伊勢大輔 和泉式部							1660
1660	一六七〇					源賴光			丹波忠明			源賴家							1670
1670	一六八〇											源賴家							1680

大日本偉人年表 (一三一)

偉人年表(紀元自一六三〇至一六八〇)

紀元	年號	天子	宰相	將軍	執權	將士	學者	名僧	醫師	書人	茶人及 佛人及	和歌人及 藤原保昌 源賴實	武術	俳優	淨瑠璃	戲作者	金工	諸曲
一六九〇	長元	後崇徳天皇	藤原實通	藤原實通				源延慶	源延慶	巨勢光重 老鷹為成							正恒	
一七〇〇	長曆	後崇徳天皇	藤原實通	藤原實通				源成慶	源成慶									
一七一〇	長久	後冷泉天皇	藤原教通	藤原教通				源成典	源成典									
一七二〇	長承	後冷泉天皇	藤原實通	藤原實通				源成典	源成典									
一七三〇	長平	後三條天皇	藤原實通	藤原實通				源成典	源成典									

大日本偉人年表 (二三一)

紀元	年號	承保	承保	承保	承保	承保	承保	承保	承保	承保	承保	承保	承保	承保	承保	承保	承保	承保
一七四〇	承保	承保	承保	承保	承保	承保	承保	承保	承保	承保	承保	承保	承保	承保	承保	承保	承保	承保
一七五〇	承保	承保	承保	承保	承保	承保	承保	承保	承保	承保	承保	承保	承保	承保	承保	承保	承保	承保
一七六〇	承保	承保	承保	承保	承保	承保	承保	承保	承保	承保	承保	承保	承保	承保	承保	承保	承保	承保

大日本偉人年表 (三三一)

偉人年表(紀元自一七七〇至一八一〇)

紀元	年號	天子	宰相	將軍	執權	將士	學者	名僧	醫師	畫人	俳人及 和歌人及	武術	俳優	淨瑠璃	戲作者	金工	諸曲	紀元
一七九〇	嘉承天仁	鳥羽天皇	藤原忠實 藤原家忠 藤原實能	藤原雅實		藤原通俊 藤原季仲		永觀經波	丹波雅康 安倍盛親	巨勢經宗	藤原顯季							一七九〇
一七八〇	永承久元	崇德天皇						永祿時 覺 重法親王 怡行 四條	和氣重基	覺 仁	源後賴							一七八〇
一七七〇	天承天仁																	一七七〇

大日本偉人年表 (一三三)

紀元	年號	天子	宰相	將軍	執權	將士	學者	名僧	醫師	畫人	俳人及 和歌人及	武術	俳優	淨瑠璃	戲作者	金工	諸曲	紀元
一八〇〇	長承保延	近衛天皇	藤原忠通 藤原實能 藤原基實	藤原賴長		源為朝 藤原光賴 源義朝 平朝綱	清原信俊	伊芝 運 覺 覺 圓能		鳥羽信正	待賢ノ小侍 藤原教長 源雅隆							一八〇〇
一八一〇	仁平久壽保元平治									巨勢有宗								一八一〇

大日本偉人年表 (一三五)

偉人年表(紀元自一七七〇至一八一〇)

偉人年表(紀元自一九二〇至一九八〇)

紀元	年號	天子	宰相	將軍	執權	將士	學者	名僧	醫師	畫人	茶人及俳人	和歌人及學者	武術	俳優	淨瑠璃	戲作者	金工	諸曲	紀元
一九二〇	正嘉正元	龜山天皇	藤原公相 藤原實經 藤原長實	藤原公相 藤原實經 藤原長實	北條長時	肯德藤綱		龜照親章		巨勢有行 藤原實實 土佐孫隆		藤原家 和氣長世 藤原為氏					平手院行信來國行 一字吉用	備前宗國 粟田口吉 一字宗明 一字經泰 中手一文字 包永長 光永長俊	一九二〇
一九三〇	長文永建		藤原忠經 藤原經家 藤原忠實	藤原忠經 藤原經家 藤原忠實	惟康親王 北條時宗村			性空 信念 佛日聖一 光惠一 蓮龍信肥 照元昭主 普大正敬 門明念覺 慧覺 曉心		藤原長隆 土佐長隆 巨勢光隆								一九三〇	
一九四〇	弘安正應		藤原公守 藤原基隆 藤原公平	藤原公守 藤原基隆 藤原公平	久明親王 北條貞時														一九四〇
一九五〇	永仁		藤原公忠 藤原冬實 藤原冬平	藤原公忠 藤原冬實 藤原冬平															一九五〇

偉人年表(紀元自一九二〇至一九八〇) (一四一)

紀元	年號	天子	宰相	將軍	執權	將士	學者	名僧	醫師	畫人	茶人及俳人	和歌人及學者	武術	俳優	淨瑠璃	戲作者	金工	諸曲	紀元
一九六〇	正安乾元	後伏見天皇 後醍醐天皇	藤原公忠 藤原冬實 藤原冬平	藤原公忠 藤原冬實 藤原冬平	北條貞時 北條時宗	藤原公衡													一九六〇
一九七〇	長正和文	長正和文 保元應永	藤原公忠 藤原冬實 藤原冬平	藤原公忠 藤原冬實 藤原冬平															一九七〇
一九八〇	應永		藤原公忠 藤原冬實 藤原冬平	藤原公忠 藤原冬實 藤原冬平															一九八〇

偉人年表(紀元自一九二〇至一九八〇) (一四一)

偉人年表(紀元自一九二〇至一九八〇)

偉人年表(紀元自二一三〇至二二七〇)

紀元	年號	天子	宰相	將軍	執權	將士	學者	名僧	醫師	書人	俳人及	和歌人及	武術	俳優	淨瑠璃	職作者	金工	謡曲	紀元
二二七〇	實正	後土御門天皇	藤原實房	足利義隆	足利義隆	三好長綱	總論獨立	一休知命	土佐廣親	土佐信	石鳥道雄	飛鳥井雅經	藤原小傳				加賀正清	觀世政盛	二二七〇
二二六〇	長享	後相原天皇	藤原長實	足利義隆	足利義隆	三好長綱		義快	高麗龜	豐後守信		宗憲	藤原小傳			正勝		二二六〇	
二二五〇	長享	長享天皇	藤原長實	足利義隆	足利義隆	三好長綱		義快	高麗龜	豐後守信		宗憲	藤原小傳			正勝		二二五〇	
二二四〇	長享	長享天皇	藤原長實	足利義隆	足利義隆	三好長綱		義快	高麗龜	豐後守信		宗憲	藤原小傳			正勝		二二四〇	

偉人年表(紀元自二一三〇至二二七〇) (六四一)

紀元	年號	天子	宰相	將軍	執權	將士	學者	名僧	醫師	書人	俳人及	和歌人及	武術	俳優	淨瑠璃	職作者	金工	謡曲	紀元
二二八〇	永承	後奈良天皇	藤原實房	足利義隆	足利義隆	三好長綱	藤原實房	一休知命	土佐廣親	土佐信	石鳥道雄	飛鳥井雅經	藤原小傳				加賀正清	觀世政盛	二二八〇
二二七〇	永承	後奈良天皇	藤原實房	足利義隆	足利義隆	三好長綱	藤原實房	一休知命	土佐廣親	土佐信	石鳥道雄	飛鳥井雅經	藤原小傳				加賀正清	觀世政盛	二二七〇
二二六〇	永承	後奈良天皇	藤原實房	足利義隆	足利義隆	三好長綱	藤原實房	一休知命	土佐廣親	土佐信	石鳥道雄	飛鳥井雅經	藤原小傳				加賀正清	觀世政盛	二二六〇
二二五〇	永承	後奈良天皇	藤原實房	足利義隆	足利義隆	三好長綱	藤原實房	一休知命	土佐廣親	土佐信	石鳥道雄	飛鳥井雅經	藤原小傳				加賀正清	觀世政盛	二二五〇

偉人年表(紀元自二一三〇至二二七〇) (七四一)

偉人年表(紀元自二一三〇至二二七〇)

偉人年表(紀元百二十四〇至百二十五〇)

Table with columns: 紀元, 年號, 天子, 字相, 將軍, 執權, 將士, 學者, 名僧, 醫師, 畫人, 佛人及, 和歌人及, 武術, 俳優, 淨瑠璃, 戲作者, 金工, 謡曲, 紀元. Rows include historical figures like 藤原朝臣, 藤原實家, 藤原朝隆, etc.

大日本偉人年表 (〇五一)

Table with columns: 紀元, 年號, 天子, 字相, 將軍, 執權, 將士, 學者, 名僧, 醫師, 畫人, 佛人及, 和歌人及, 武術, 俳優, 淨瑠璃, 戲作者, 金工, 謡曲, 紀元. Rows include historical figures like 藤原朝臣, 藤原實家, 藤原朝隆, etc.

大日本偉人年表 (一五一)

偉人年表(紀元百二十四〇至百二十五〇)

大日本偉人年表 (二五一)

Table with columns: 紀元 (Year), 年號 (Era), 天子 (Emperor), 宰相 (Prime Minister), 將軍 (General), 執權 (Shikken), 將軍 (Shogun), 學者 (Scholar), 名僧 (Famous Monk), 醫師 (Physician), 畫人 (Painter), 俳人 (Haikai), 和歌人 (Waka), 武術 (Martial Arts), 俳優 (Actor), 浄瑠璃 (Joruri), 戯作者 (Playwright), 金工 (Goldsmith), 諸曲 (Various Songs), 紀元 (Year).

大日本人名辭書上卷

ア之部

大日本人名辭書 (一)

アイ 愛の方にお相のは家康の侍女なり西郷の局といふ戸塚五郎大夫忠春か女なり忠春西郷彈正左衛門正勝か女に配...

アイセキ 愛石は書僧なり名は眞瑞、愛石は其の號、紀州の人、書を野呂介石に學ぶ後元明の遺蹟及び本朝先哲の書風を研究して大に上進し遂に一家をなす山水を畫くに水墨淡彩共に巧みなり世に野呂介石長町竹石と並び稱して三石と云ふ(扶桑書人傳)

アイ

アカガハダイゼム

アカガハ フウケイ

悪業輾まらず遂に伊豫の國藤が原と名つくる山中に入りて山賊
どなる須臾の間に附き従ふもの三十五人享保十一年正月五日
天一坊(其の時吉兵衛と稱す)偶々四國の沖に暴風に遇ひ辛
うじて死を免れ彷徨其の家に來りて寢食を求む大膳其の七百
餘金を懐にするを察し其の寐を窺ひて刺さんと欲す其の寢室
に至れば則ち天一坊在らず之を搜索すれば天一坊既に奥室に
在り泰然として高座に坐す風鉢凡ならず而して大言傲語毫も
應ずる色なし大膳其の豪膽に驚く遂に其の隠謀を聞きて主従
の約を結ぶ是より其の悪計を佐け同年十一月江戸に於て天一
坊と共に誅に伏す時に年四十五と是れ世上の口碑に傳ふる所
なりしが今徳川時代の裁判宣告を蒐録したる尤も信據すべき
温故實録に據れば左の如し

無宿浪人 赤川 大膳

此者儀先年不届ノ儀有之候ニ付主人ニテ門前拂ニ相成夫ヨリ
所々ニテ人殺ノ上盜賊致シ其上當時無宿實澤ト申合江戸エ出
テ公儀ヲ僞多クノ金銀ヲ欺取候段重々不届至極ニ付町中引廻
ノ上於品川獄門ニ行フ者也

アカガハ フウケイ 赤川楓溪は文祿中の書家なり名
は俊章(俊)に年 字は涼々、熊太郎と稱す楓溪は其の號、播州安
志藩の人江戸に住す(廣益譜家人名錄)

アカガリ ダイダ 肥太は豊後の士なり相傳ふ母某は
農家の女なり近里の美少年と感戀を通す而して少年の由て來
る所を知らず大に恠んで一日其の去る所を蹤す山腹に大洞あ
り少年蛇に化して其の中に入る女大に驚く已にして生む所の
子背に鱗を生じ其の腫常に脈あり故に渾名して脈太と曰ふ
臂力あり文治中の人(平家物語)

アカサカ クニナガ 赤坂國長は美濃赤坂の鍛工なり
泉水の子、道印と號す長享中の人其の子亦國(萬寶金書)

アカザキ カイモン 赤崎海門は昌平靈の儒官なり名
は植翰字は彦齡(一)に禮源助と稱す本と薩摩の士なり學識操行

アガタイヌカヒ オホトモ

共に名あり寛政の初め幕府の徵に應じ頼春水と共に經を昌平
靈に講し大に程朱の學を唱ふ文化中歿す年六十餘(歴代傳覽續
諸家人物志)

アカザ ナヲノリ 赤座直則は七郎右衛門と稱す美濃
浪人なり足利義昭に仕ふ其本國寺の假居を伺ひ三好松永等遠
に之を襲ふ直則寺中に馳入り寄手と戦ひ勇闘す本國寺七本鎗
の一人なり功を以て織田氏に仕ふ本國寺之變苦戰して明智勢
の爲に死す(天正外記)

アカシ カムザブラウ 明石勘三郎は二代猿若勘三郎
にして名優なり初代勘三郎の子、父と上京して朝廷より明石
と云ふ名を拜領し大夫元を勤むること十七年此時弟子市村竹
之丞菅屋町にて芝居相續す依て勘三郎より紋所鶴の丸を譲り
勘三郎市村座にて竹之丞引合せの口上を勤む此の紋所は憚る
所あり竹之丞が家の紋柄に改む今に顔見世入り替はり新役者
附櫓臺輪に中村座は舞鶴を市村座は鶴の丸を付るは昔の遺風
なり(燕石十種)

アカシ シガノスケ 明石志賀之助は寛永中の角力者
なり寛永元年一説には寛文元 寄相撲と名つけ江戸四谷鹽町に於
て晴天六日の間諸國相撲を興行す是れ江戸勘進相撲の始めな
り又京都四條河原に上覽の相撲ある時に志賀之助當時の名手
丸山仁太夫と撲て勝を得たりしかば其の名都下に噴々たりし
と云ふ(相撲大全、遊遊笑覽)

アカシ ジヤウレウ 明石城了は歌人なり名は城了、
後覺一と改む後醍醐帝の時總檢校に補す足利氏の支族なり性
和歌を嗜み「旅宿聞雨」の一詠天聽に達し後雨夜の號を後小
松天皇より受け又紫衣を賜はる之を盲人賜紫の始と爲すと云
ふ其の聞雨の歌に曰く「夜の雨の、窓をうつにも、碎くれは心
はもろき者にぞありける」應安四年播州明石に没す(野史)

アカシ モリシゲ 明石守重は宇喜多秀家の臣なり父
を三郎左衛門景親と稱す初め備前美作の領主浦上景宗に仕ふ

宗景の臣宇喜多直家其の國を奪はんことを謀る景親之に與し
て宗景を逐ひ直家を立て、主となす後ち直家の子秀家繼て立
つに及びて守重も亦父の後を承け秀家に仕へ掃部助と稱す邑
二萬石を食む關原の戦に西軍の先鋒となり三百の兵を率ひて
池尻より福田原を經進んで中村忠一と戦ひ之を破りしが西軍
卒に敗るゝに及び秀家奮然として此に戦死せんとす守重諫め
て曰く假令ひ大藩重臣皆大阪に叛くも幼主を輔けて時を待つ
は主公一人にして足らん備前美作は般富の地なり宜しく據り
て時機を俟つべし若し志を得ざれば岡山の城を枕とし天下の
兵を邀へて死を決するのみと秀家之に従ひ即左右數騎を以て
逃る守重先ちて岡上に歸る然るに留り居るもの既に城を棄て
て逃れ土寇之に乗じて其の資糧を奪ひ城壁を毀てり守重遂に
其の守るべからざるを知り備中蘆森に遁れ潜居すること數年
會々大坂の殘兵同志を糾合して再舉を謀る守重乃ち之に應じ
元和元年五月七日の戦に眞田幸村と相ひ謀りて東軍の後を撃
ち之を敗らんせしが時機を失して幸村戦没し天王寺口敗れ
東軍城に逼るに及び守重遂に退走す是より匿居流落三年を經
て赦に遇ひ後ち病んで死す(野史)

アカシヤ サムキヨ 明石屋三去は俳歌を能くせり東
都四日市の人、三去は其の號、一に遊居の號あり喜八と稱す弘
化中の人、其の俳歌に曰く「只一木いひ盡されす初さくら」(俳
諧海内人名錄)

アカシヤ リヤウシヨウ 明石屋涼松は俳歌を能くせ
り大坂の人、涼松は其の號、一に花隣亭の號あり壽次郎と稱す
弘化中の人其の俳歌に曰く「湯上りの場廣うすわるすゝみか
な」(俳諧海内人名錄)

アカシ ヨジベエ 赤石與次兵衛は播磨の舟夫なり女
祿元年征韓の役秀吉與次兵衛の船に駕して安藝に航す與次兵
衛其の船底に竅して之を沈めんと欲す露はれて殺さる或は曰
ふ與次兵衛征韓を非とするの將某の命を承けて秀吉を害せん

アカガハ フウケイ

アガタイヌカヒ オホトモ

と謀れるなりと(太閤記)

アカシ ヨダイフ 明石與太夫は水府金工の元祖な
り(聖工譜)

アカゾメ エモム 赤染右衛門は有名の歌人なり大隅
守時用の女或は曰く平の兼盛の女なりと右衛門の母初め兼盛
の妻たりしが懷妊中離縁となりて女子を擧ぐ後之を擧へて再
たび檢非違使赤染時用に嫁す時用養ひて己が子とす因て赤染
右衛門と稱す右衛門初め攝政道長の妻倫子に仕へ後大江
匡衡に嫁す才思あり和歌を善くして和泉式部と聲名を齊うす
傳へ云ふ其の子擧周曾て重病に罹り久しく癒えず右衛門之を
憂ひて住吉神社に祈り己が命を以て代らんことを請ふ三本の
幣を奉りて各々之れに和歌を附す其の歌の一に曰く「わらむと
真し」其の夜白髪のお翁出で來りて此の幣を社内に納むと夢む
後ち幾もなくして病平癒すと藤原公任將に中納言を辭せんと
欲して當世の名儒紀齊名大江以言に屬して辭表を作らしむる
に皆其の意に合はず因りて更に匡衡に依頼す匡衡家に還りて
鬱悒の色あり右衛門怪んで問ふ匡衡實を告げ且曰く齊名以言
の才學を以て猶ほ其の心を満たす能はず私に恐る吾が女亦其
の望に愜ふ能はざらんことをと右衛門曰く此の公給飾の意多
し今盛に其の門地の貴きを述へて隠に官位沈滞の意を露はす
べしと匡衡之に従ふ公任果して悦んで其の表を用うと右衛門
の穎悟なること此の如し女あり江侍従と曰ふ亦和歌を以著は
る(大日本史、本朝列女傳、歌道人物志、十訓抄)

アガタイヌカヒ イラツメ 縣犬養娘子は萬葉作者の
一に列し和歌を善くするを以て其の名を知らる詠歌は載せて
其の第八卷に在り(萬葉集作者履歷)

アガタイヌカヒ オホトモ 縣犬養大伴は壬申の亂に
天武帝に從て東國に赴く事平いで功を論じ一百戸に封ぜらる
八年疾あり帝其の第に幸して之を視る位直廣壹に至る大寶元

アガタイヌカヒ キヨヒト

年卒す淨廣肆夜氣王等を遣して第に就て詔を傳へしめ正廣壹を贈り封四分の一を其の子に賜ふ(大日本史)

アガタイヌカヒ キヨヒト 縣犬養淨人は和歌を善くして萬葉作者の一に列す詠歌は載せて其の第二十卷に在り勝寶七年下總少目に任せられ從七位下に叙せらる弘仁十四年從六位に進み十五年從五位下に至る(萬葉集作者履歷)

アガタイヌカヒ ヒトガミ 縣犬養人上は天平實龜間和歌を善くするを以て其の名を知らる秀歌は多く萬葉集等に載せたり(萬葉集作者履歷)

アガタイヌカヒ ヒロトジ 縣犬養廣刀自は聖武帝の夫人なり讚岐守唐の女、帝儲武たりし時納れて夫人となす安積親王、井上内親王、不破内親王を生む正三位に叙す實字五年都を保良に遷す稻四萬東を賜ふ明年十月薨す(大日本史)

アガタイヌカヒ ミチヨ 縣犬養二千代は萬城王の母なり和歌に工みなるを以つて知らる養老元年從四位上を授けられ三年從三位に累進し五年正三位に叙せられ食封實人を賜はる三千代固辭す優詔して聽さず天平五年薨す從四位下高安王等を遣はして喪事を監護せしめ從一位を贈らる(萬葉集作者履歷)

アガタイヌカヒ ヨシヲ 縣犬養吉男は神魂命八世の孫佐居大命の後なり和歌を善くして萬葉作者の一に列す其名頗る人に知らる詠歌は載せて其の第八卷等に在り實字二年六位を歷て從五位下に叙せられ三年從五位上に進み肥前守と爲り八年伊豫守に轉じ内舍人に至る(萬葉集作者履歷)

アガタイヌカヒ ヲジ 縣犬養男耳は光仁帝の妃なり初め女孀と爲る從五位下に叙せらる帝龍潛の日のを幸す廣根諸勝を生む(大日本史)

アガタイヌカヒ モチヲ 縣犬養持男は天平實龜間の人なり和歌を善くして萬葉作者の一に列し其の名頗る世に著はる(萬葉集作者履歷)

アカボシ ソウハム

アガタ ソウチ 縣宗知は遠州流の茶人なり江戸の人、上柳甫齋に從ひて學ぶ玉泉子と稱す享保六年六月十二日没す或は云ふ廿七日に没すと法號見性宗知居士と曰ふ(墓所一覽茶人系傳全集)

アガタ ロゲム 縣魯彦は儒家也字は子楳、通稱は秀八、淺川と號す山縣周南の門人にして俊才あり(諸家人物誌)

アガタ井ノオキナ 縣居翁「カモマアチ」

アカツキノカ子ナリ 曉鐘成「キムラケムカダウ」を見よ

アカニツダウ 緒入道「ヤマナモチトヨ」

アカ子ヤ ソウサ 茜屋宗佐は泉州堺の茶人なり茶道を武野紹鷗に學びて其の法を善くせり家に漢器の茶入を藏す鶴頭と稱する名器なり(茶人系傳全集)

アカ子ヤ ハンシチ 茜屋半七は歌妓美濃屋三勝と情死せるを以て有名なり半七は五條新町の者にて豆腐屋を業となし三勝は大坂長町四丁目美濃屋平左衛門が女房の妹にてお三と呼び三勝は其藝名にて元祿八乙亥年十二月七日西成郡難波村の墓地にて咽喉を突て情死したるなりとぞ其豆腐屋の看板及び書置き代官所より掄視の記録等は今尙同地の舊家宗田猪太郎の家に保存しありて半七の家屋は同地新町十五番地の岡本きくといへるが住する家なり同地極樂寺の石碑は寛政三年に建てしものにて尙大阪の舊千日寺の墓地にも俳優の建てし石碑あり江戸の某寺にも寛政八年に俳優岩井半四郎の建てたるものありと又大阪法善寺中に南無阿彌陀佛の名號と梅と桐の紋を彫りたる石碑あり昔しより之を三勝半七の墓なりといへど然らず

アガノ キザウ 上野喜藏はもと朝鮮の人名を尊階といへり慶長五年細川忠興封土を豊前に受けし時尊階を招き其國の上野村に居られしめ尊階の名を上野喜藏と改め俸祿を與へて瀬戸風の茶壺を製造せしむこれを上野焼といふ寛永九年忠

アガタイヌカヒ キヨヒト

再ひ窓を開き陶器を製出す其地の工人業を傳へて今に至れり(工藝志)

アガハニ シゲカズ 赤埴重賢は赤穂四十七士の一なり源藏と稱す淺野長矩に事へて馬廻と爲り二百石を食む後姓名を變して高畑源野右衛門と曰ふ既に仇を復し矢田助武と水を爐に灌き火災を豫防し去る死する時年三十五、世相ひ傳ふ重賢は播州龍野の城主脇坂侯の藩士鹽山伊左衛門の弟にして淺野家の臣赤埴氏に養はれて其の後を繼ぐ淺野氏祀を絶ち源藏派士となりしより常に酒を好み飲衣泥酔數々兄伊左衛門の家に行きて酒を請ふ伊左衛門の妻及び奴婢等之を見て指彈す元祿十四年十二月十四日赤穂の遺臣將に事を擧げんとす源藏白雪を冒し頭に破笠を載き身に敵套を着け伊左衛門を訪ふ意暗に永訣を爲さんと欲す是の時伊左衛門猶は未だ公より退かず乃嫂に見えんとを請ふ嫂病と稱して見ず是に於て源藏携へ來りし所の古徳利を出して曰く余去年三月浪士となりしより兄の高情を受くる一ならず今幸に西國の一諸侯に聘せられ將に國に就かんとす故に之を携へ來りて聊か離別の意を表す唯た兄の未だ歸らざるを憾む兄歸らば之を供せよと自ら數杯

アカボシ ソウハム

を傾け餘る所を置て去る翌朝に及んで赤穂遺臣復讐の聲聞喧し伊左衛門昨夜源藏の來りしは之れが爲めならんと疑ひ竊かに僕を遣はして遺臣の通路を窺はしむるに果して源藏あり背に兜頭巾を負ひ白布を以て顔巻とし鎗を曳き威風凛々として風林往日と異なり僕大に驚き歸りて急に之を主人に報す是に於て人源藏が昔日の舉動は全く人をして己れが大望の在る所を知らざらしめん爲なるを知り其の忠義の名一般に顯はれ伊左衛門爲めに一層の面目を加ふと云ふ(赤穂四十七士傳并口傳)

アカバ ハイタラウ 赤羽平太郎は舊唐津藩士多賀某の子にして幼年の折舊會津藩士赤羽氏の養子となる幼より學を好みて數學を善くし曾て東京外國語學校に入りて佛語を學ひ其後參謀本部の選に預り朝鮮へ留學を命せられ渡韓せしは明治十三年三月にして時に年餘僅に十六爾來同國に在ると五年屢々同國地方を巡回して地理風俗人情を視察し明治十七年秋又巡回の命を蒙り十月廿七日磯林真三と共に江原道地方に出發せしが歸途十二月廿七日頃京城近傍へ來りし際偶々暴動の事を聞き直に京城へ入らんとして暴徒の爲めに殺害せらる時に明治十八年一月なり

アガフ トキハル 淡河時治は北條時房の孫なり父時盛掃部權助越後守と爲り六波羅南方に判たり家佐介に在り因て佐介氏と稱す後今之氏に改む醍醐帝北條高時を討つに及んで時治適々越前平原の地頭たりしが兵を集めて北軍を防ぐ六波羅敗ぶるに及んで部下逃散する者多し平泉寺の僧徒敵に乗じて來り攻む時治勢ひ敵せざるを知て其の妻と訣れ二子を水に沈め潰腹して死す妻も亦水に赴て死す(大日本史)

アカボシ アリヌカ 赤星有隆は三郎入道宗愚といふ其女は菊池武時之妻たり元弘三年三月十三日武時と共に博多に於て王事に斃る(菊池軍記)

アカボシ ソウハム 赤星宗範は天草の反徒なり肥前天草島に住し鍼醫を業とす寛永八年五月佳節に天草甚兵衛人を

招く宗範に至らず... 赤松鶴年... 赤松小三郎... 赤松氏... 赤松氏は源氏、則村の子、人...

アカボシ タクツラ

アカマツ サウシウ

四壁のみ遊人... 赤松氏... 赤松氏は源氏、則村の子、人... 赤松氏は源氏、則村の子、人...

アカマツ クワクチム 赤松鶴年... 赤松小三郎... 赤松氏... 赤松氏は源氏、則村の子、人...

アカボシ タクツラ

アカマツ サウシウ

を欲仰し招聘... 赤松氏... 赤松氏は源氏、則村の子、人... 赤松氏は源氏、則村の子、人...

アカマツ サオウ

け再び平安に出て、學を講ずるに赤穂に反る享和元年没す年八十一、滄洲容貌魁偉髪美なり特に天性豪直、惡を疾むと誓の如し其の不可とする所に至りては權貴をも避けず嘗て君侯の前に在りて藩士某を面折す某勃然として色を變し侯亦敢て滄洲の言を以て是とせず滄洲乃ち曰く君、臣の言を容れざれば先づ臣が首を斬れ否されは某の任に堪へざるを責めて其の職を罷めよ順逆可否何ぞ喋々を待たんと其の屈撓せざることを率ね此の如し、著はす所周易象微、尙書獨斷、論語省解、博物彙編、讀孟子、疏客談記、赤穂四十六士論、靜思亭雜著、靜思亭文集、一得錄、遺集等あり滄洲二子あり兄勳字は大業、蘭室と號す弟倫字は大經、魯齋と號す皆な學術富贍、伯は五十一叔は廿三にして先没す(先哲叢談編輯、近世叢書、續諸家人物志)

アカマツ サオウ 赤松沙鷗は江戸の儒者なり名は舊邦、字は新甫、沙鷗は其の號、播磨の人其の先は赤松則祐より出つ則祐七世の孫肥前守治忠豊太閤に給仕す即ち沙鷗の曾祖なり沙鷗元祿中江戸に來り儒を以て松山侯に遊事す明和四年四月其の子大庚を喪ひ哀毀疾を爲し其の年十一月晦日而四没す年一百、墓所は麻布善福寺に在り(先哲叢談、江戸名家墓所一覽)

アカマツ サダノリ 赤松貞範は則村の子なり筑前守と稱す建武二年足利尊氏に從ひて東、北條時行を征す時行軍破れて箱根の水飲嶺を保つ貞範嶺を冒し衝撃して之を破る時行退て相摸川を阻て、陣す貞範諸軍と夜潜かに河を渡り攻めて之を走らす尋て尊氏に從ひて王師を竹の下に禦ぐ後ち美作守護と爲り薙髮して名を世貞と更む山名氏的美作に入るや貞範弟則祐と之を拒で克たす(大日本史)

アカマツ サダムラ 赤松貞村は圓心入道の二男美作守貞範の曾孫なり伊豆守に任す嘉吉の變諸將と赤松滿祐を白旗城に攻む初め屢々大將軍足利義教の眷遇を蒙り弒逆に會ふの日自ら抗する能はず又殉する能はず幕府議して賞罰を加へず又是非を問はず歳初椀飯を獻す傍人或は嘲て曰く椀飯の精力

を播州に發し滿祐に對して一矢を繼つ式裝華麗に過る遠しと貞村之れを開き憂悔悔途に病を成して卒す(野史)

アカマツ シユムアン 赤松春菴は醫儒なり名は惟義、字は子方、本姓は越智氏、播磨の人、少時に郷を去りて河内に居り後大阪に徙り醫を以て業と爲す常に性命を談し道學者を以て自ら任す人と爲り朴實、知りて言はざるなく見て規せざるなし自謂ふ余は直情徑行、巧みに交遊の間に俯仰する能はず尾藤二洲と最も親し常に謂ふ吾晩に儒學に志して一も得る所なし幸に一子ありて吾が志を繼がしむべし夫醫は富み易く儒は貧なり易し而れども吾が父子共に生計に拙なり則ち儒醫奚ぞ異ならん其醫に饑ゑんよりは寧ろ儒に饑ゑんと死に臨み其の子翼を二洲に託す翼字は文平高洲と號す帷を垂れて教授す(讀近世叢書)

アカマツ スケノリ 赤松祐則は後編別記東寺過去は播磨入道滿政の子也三郎と稱す貞村愛死して後ち赤松氏の一族一人も幕府に仕ふる者なし初め明德の亂祐則の祖父滿則幕府の爲めに戦死し且四職の一員たるを以て嘉吉二年殊に祐則を赦して出入せしむ赤松氏の遺士祐則を擁して山名氏を滅せんことを謀り攝津を歴て播磨に入り屢々戦を挑む軍敗れて兵の死する者數千人祐則事の爲す可からざるを知り父滿政と有馬郡に入りて自殺す(野史)

アカマツ オイユ 赤松太庚は江戸の儒者なり名は弘、又通稱に用う、字は毅甫、太庚は其の號又赤草と號す、述齋、木瓜翁皆其の別號、江戸の人、父沙鷗播州より江戸に來り儒を以て松山侯に遊事す櫻井氏を娶りて太庚を養ひ後田の侯邸に生む時に寶永六年なり太庚若冠にして父に學ひ後太宰春臺に就き心を六經に留め研究して已まらず遂に經藝を以て當時に名あり其の學専ら漢宋を主とせず自家の言を成す後ち易書詩春秋三禮孝經論語解を著はし號して九經述と曰ふ凡て百三十卷、我が邦群經の註解を作爲すること未曾て斯の如きの浩卷

アカマツ サオウ

あらず識者嘆服す太庚常に名教を以て己が任と爲す其の自ら信すると甚た厚し王侯貴人厚幣豐祿を以て招くと雖も敢て顧みずして曰く豈我れ四方髦俊の士を得て之を教育し其の材徳を達し各をして國家の用に供せしむるに若かんやと人皆其の操志を高とす太庚資性雍熙絶えて浮燥粗豪の氣なし明和四年四月十二日歿す麻布善福寺に葬る享年五十九著書九經述の外に家語述赤草子初編二編あり(先哲叢談後編、近代名家著述目録、名家全書、續諸家人物志、江戸名家墓所一覽)

アカマツ トモノリ 赤松朝範は則祐の末子、肥前權守たり正平十年足利義詮の山名時氏と神南に戦ふや朝範父と共の義詮に從ひ山西に陣して先づ敗る朝範深く以て愧と爲し敵の一將を得て相刺して死なんど倒る敵乃ち其の喉を刺し棄てて去る戦罷む比ひに遂に蘇へるを得て還る(大日本史)

アカマツ ナホヨリ 赤松直頼は範資の二子也足利尊氏の弟直義と兵を構へ敗れて松岡城に逃る、や直頼年甫めて十三父に從ひて此城に在り尊氏置酒して訣を爲す範資直頼に誠めて曰く我れ今將に死して將軍に殉はんぞ汝尙ほ幼なり且つ則祐嘗て汝を養ふて子と爲さんと欲す宜しく郷里に還りて叔に事ふる猶ほ我れに事ふるがごとくすべし然らざれば僧と爲りて吾が冥福を祈れと直頼容を改め對へて曰く世間の是非は見既に粗々之を辨知す豈に大人の死を目視して生きて還るに忍びん耶決して命を奉せずと神色甚だ壯んなり事平いで父に從ひて還る、山名師義の播磨に入るや直頼大山路を塞ぎて之を拒ぐ師義進むことを得ず轉じて丹波に向ふ後ち掃部助と爲る(大日本史)

アカマツ ノリザネ 赤松範實は範資の三子、叔父則祐の爲めに子とし養はる彦五郎と稱す足利義詮に從ひて吉野を犯し細川清氏と先登して龍泉城を陥る後ち南朝に歸順して清氏と義詮を攻む則祐招き還して再び義詮に屬す(大日本史)

アカマツ ノリスケ

アカマツ ノリスケ 赤松範資は則村の長子、則村の義を起すや常に從ひて力戦す功を以て信濃守と爲る延元元年尊氏關を犯す範資京師に在り將に亡げて播磨に歸り國兵を率ゐて之に應ぜんとし途に細川定禪に遇ふ定禪喜び則村元弘入京の故事に違ひ範資に請ひて先鋒と爲す并河に陣す尊氏已に山崎に至る範資書を送りて合して南軍を撃んことを約す尊氏大に喜び明日進んで範資等と脇屋義助を攻めて之を走らす是に於て南軍皆な敗られ京師遂に陥る又細川顯氏及び高師直に從ひて補正行と譽田林四條驛に戦ふ幾ばくもなく尊氏弟直義と兵を構へ敗れて松岡城に入る範資及び高師直師泰等僅に五百人之に從ふ事平いで攝津守護職に補せらる後剃髮して世範と法名す世に七條赤松氏と稱す子光範、直頼、範實、則春あり(大日本史)

アカマツ ノリスケ 赤松教祐は則村の第三子初め僧と爲りて延暦寺に居り護良親王に給事し權律師に任せられ律師師と稱し妙善と號す或は自夫と稱す護良親王の大和に走るや則祐村上義光等と之に從ひ十津川に匿る、こと半歳復た從ひ

は滿祐の第一子にして字を彦二郎と稱す滿祐既に大將軍足利義教を弒して白旗城に據る教祐從ひて城に在り而して其の陷るに及び父の命に因りて伊勢に逃る國司拒て納れず享徳三年山名宗全幕府の命に返るに及び教祐細川成之に憑りて宗全を伐ち以て舊封に復せんを請ふ幕府之れを聽す教祐乃ち弟則尙と播磨に適く康正元年四月教祐國人を募り分ちて二隊となし一隊は檀特山に據り他の一隊は山名政豊を室山城に攻む五月宗全兵を率ひて播州に入り普當山に陣す而して檀特山を攻めて克たす退て坂本に次す教祐兄弟室山を措て宗全と戦はんぞ欲し兵を回す而して宗全の武威敵し難しと聞き士卒多く逃走し檀特山の成兵亦た壁を棄て、走り教祐遂に伊勢に奔りて自殺す(野史)

アカマツ ノリスケ

て吉野に奔る途に敵の爲めに拒せらる則祐等心を悉して扶持し僅に免るゝことを得たり親王大に喜び平賀三郎村上義光と並びに三傑と稱す親王吉野に赴き義徒を募集するに及びて則祐も亦た令旨を請ひて播磨に歸り則村に勸めて義を擧げしめ俱に摩耶城を守る賊來り攻む則村迎へ撃ちて之を破り將に兵を斂めて城に歸らんす則祐曰く賊兵を悉して來り攻む今己に敗れ歸る卒勞れ馬疲る我れ勝に乗じて追撃せば誰れか能く之を拒がん六波羅立どころに取る可しと、則村之を然りとし乃ち進んで桂河に至る賊の新兵二萬、岸に臨んで陣を爲す則祐馬を躍らして將に渡らんす則村之を止む則祐聽かずして曰く敵は多くして我は寡なり利、急に戦ふに在りと單騎流を絶ちて先づ渡る則村の兵三千之に雖も賊風を望んで潰走す則祐貞範四騎を従へて北ぐるを逐ひ徑より六波羅西門に至りて後軍の至るを竣つ時に日已に暮る賊兵四もに至る則祐貞範便ち徽號を徹して賊に混ず賊之を覺り令して曰く赤松の兵水を渡りて來る其の鎧馬沾濕する者は悉く執へて之を斬れと則祐等脱す可らざるを料り乃ち大に叫んで奮戦し從騎皆死し又た貞範と相失す則祐身を挺んで、本軍に脱し歸り復た散兵を収めて進んで七條に戦ひ又敗る王師凱旋の後幾ばくもなく足利尊氏に從ひて反す、則村死して播磨守護職を襲ぐ備前美作の守護職を兼ぬ正平六年高師直に從ひて光明山を攻む會ま美作に兵起ると聞き乃ち還りて白旗城を守る尋て南朝に歸順し護良親王の子陸良を奉じて尊氏を討つ明年復た叛して足利義詮に降り陸良を京師に幽す陸良脱して高山寺城に入り兵を集めて則祐を討つ則祐迎へて青山に戦ひ之を取ら十年佐々木高氏と義詮に從ひて山名時氏を神南に拒ぐ義詮軍敗れて將に自殺せんとす則祐高氏諫めて之を止む時氏勝に乗じて競ひ進む則祐輒ち起ちて幕を塞げ衆に令して曰く汝等力戦して死を效し主に報じて名を竹帛に垂れよと衆競ひ進んで奮戦し大に時氏を取ら、備前福岡を加賜せらる十六年時氏兵に將とし

アカマツ ノリナホ

アカマツ ノリムラ

て美作を略し將に倉懸城を攻めんとす則祐貞範等と兵二千を率めて倉懸を援く山名師義別に八百騎に將として之を待つ則祐等其の兵の寡きを見て將に進んで之を撃たんとす會々阿保眞禰等歸順して將に播磨を襲はんとす則祐法華山等五城を築きて之を守り使を譜岐に遣はして援を細川頼之に求む頼之備前に抵り兵寡きを以て進まざ城遂に陥る後諸將と義詮の萬里小路第を助作し功緩きに坐して一莊を削らる二十四年姪光範等を率て弟氏範を天王寺に撃ちて之を走らす建徳二年建仁寺大龍庵に死す其の子義則、義祐、將則、師範、朝範あり(大日本史)

アカマツ ノリナホ

赤松則尙は滿祐の第二子なり彦五郎と稱す嘗て兄教祐と與に兵を起して意を得ず備前の甲島に奔りて(野史)

アカマツ ノリムラ

赤松則房は義祐の子、幼字彌三郎、幼より織田信長に仕ふ天正十一年羽柴秀吉に腹を刺され從五位下に叙し上總介に任ず十三年五月食邑を阿波一萬石に徙す關原の亂大阪に黨し軍潰を林藪に潜匿して與平信昌の兵に殺さる(野史)

アカマツ ノリムラ

赤松則村は初め次郎と稱す父を茂則と曰ひ具平親王の後なり世々播磨に居す祖久範始めて赤松を以て氏と爲す則村夙に神教を崇み雅量して圓心と號す性懐豁にして大志あり事々人の下に出づるを欲せず元弘の亂に子則祐兵部卿護良親王の令旨を齎らして至るや則村深く以て榮と爲し本國佐用莊若細山に城きて義を擧ぐ奔附する者千餘人乃ち兵を出して杉阪山里を守り以て山陽山陰の二道を絶つ三年春中國の兵六波羅に赴き援ふ則村貞範を使はして之を舟阪山に拒ぎて伊東惟群等二十餘人を擒にす悉く其の死を免るして之を待つこと更に厚し惟群恩に感じ還りて三石山に據り以て則村の爲めに守る是に由つて兵勢益々振ふ進んで摩耶山に城きて之を守る北條仲時兵を遣して來り攻む則村敵を險處に

誘ひ則祐等をして高きに乗して連射せしむ敵軍擾動す因て兵を縦ちて突戦し大に之を取ら仲時等復た兵一萬を發して之を攻む則村城を出で、迎へ撃つ途に敵軍の行程を料るに其の至るは當に明日に在るべし會々急に雨至る民家に入て之を避く敵兵奄ち至る則村突出して血戦す左右纒に五十餘人衆寡敵せず兵漸く殲きて唯だ六騎を餘す則村便ち笠號を卷きて敵の兵中に混ず適く敵將將に馬に上らんとせり則村伴りて賤者の爲ぬして馬より下りて試みに扶けて之れを乗す敵將悟らず是に於て復た騎して敵衆を目し戦に赴く狀を爲して之れを欺き馳せて本軍に還る明日進んで敵を瀬川に攻め大に之れを破りて數百人を殺獲す勝に乗じて夜京師に向ひ火を民家に縱ちて進む敵兵二萬桂川に臨んで陣す則祐單騎先づ渡る則村乃ち衆を麾し悉く渡る敵兵氣を奪はれ戦はずして走る則村長驅して京師に入る光嚴帝之れを六波羅に避く時に日已に昏る則村兵寡く且つ疲るゝを以て軍を按して前まづ俄かにして敵騎を縦ちて後より掩撃す我が軍大に取る陣を整へて復た戦ふ又た取る途に山崎に走りて更に散卒を集め詐りて左近衛中將源定平を以て聖護院宮と稱し男山及び山崎に營し以て水陸兩路を扼す仲時兵を遣はして來り攻む則村之れを聞き兵を率めて先づ發し京師を距る三里許りにして道に沿ひて伏を三所に置し敵至れば則ち伏發し楯を擁して射る敵戦はずして過ぐ第二伏發し縱横衝突す第三伏將に其の後ろを繋断せんす敵駭き願みして大に潰ゆ尋で源定平僧良忠等と六波羅を攻めて利あらず時に後醍醐帝移りて船上に幸し源忠顯に詔して則村を助けしむ則村名越高家と久我暲に戦ふ部下射て高家を殺す敵軍崩潰す則村進みて東寺に陣し源忠顯足利尊氏等と三面より逼まり遂に進んで俱に六波羅を圍む北條仲時時益光嚴帝を奉じて東に走る道にして皆な誅せらる則村の功最も多きに居る尋きて諸子を將て車駕を兵庫に迎ふ帝蹕を駐めて自ら之を勞して曰く恢復の功は汝の忠效に依ると錦直垂を賜ふ從ひて京師に入

アカマツ ノリナホ

アカマツ ノリムラ

る時に護良親王志貴山に在り則村往き從ひて京師に還る時に朝廷功臣の爵封を定むるに異議紛紜として與奪常なし則村の功を論じて播磨守護職を賜ひ未だ幾ばくならざるに故なく職を被ひ獨り佐用莊を食ましむ是に於て則村大に失望を懷き心を樂まず、足利尊氏東征するに及びて子貞範之に從ふ尊氏反跡稍々露はる則村陰かに之に附す會々丹波に兵起る守護確非盛景援を求む則村應ぜず遂に尊氏の命を以て近郡の兵を招集す延元元年尊氏京師に逼る則村之に會す尊氏則村に授くるに播磨守護を以てす則村等大に官軍を山崎に敗ぶり追ひて京師に至る尊氏の兵庫に敗走するや則村密に説きて曰く士卒疲弊せば功を濟す可らず宜しく暫らく筑紫に逃れて息を休め銳を養ひ以て徐らに再擧を議すべし臣播磨に在りて中國を控壓せん(中略)今官軍は毎に錦旗を建つ而して我れ之を設くることを得ず何を以て惡名を免ることを得んや鎌倉滅してより持明院上皇内曆快を懷く若し其院宣を請ひ錦旗を揚げて以て慶かば天下の兵皆な景從せざるなけん是當今の良策なりと尊氏之に從ふ則村乃ち白旗城に城き未だ畢らざるに江田大節と室山に戦て利あらず新田義貞斑鳩澤に至る則村使を遣はして之を給きて曰く臣は元弘の草創にして恩賞殊に薄し是れ朝廷を憾む所以なり若し臣が罪を咎めず播磨守護を復せしめば願くは重ねて後效を致さんと義貞之を信じ馳せて京師に奏す往反句餘則村城壁を完繕す乃義貞に報じて曰く本國守護は足利將軍己に之を許るす復た翻覆の論旨を煩はさずと義貞怒りて圍み攻めて月を踰ゆ則村潛に則祐等を遣はし尊氏に説きて曰く城中食乏し滅亡旦夕に在らん若し白旗破れば中國の咽喉悉く敵有とならん云々と尊氏乃ち兵に將として發す義貞遠に圍を解きて去る見島範長義貞の軍に赴く則村那和に要撃す範長自殺す往きて尊氏に室津に會し足利直義に從ひて補正成と湊川に戦ひ之れを破る正平五年死す年七十四法雲寺と稱す(大日本史)

アカマツ ハルマサ 赤松晴政は本名は政祐父義政其の...

アカマツ ハルマサ

アカマツ ミツスケ

世の舊記を出たして懇請すること多年なり實光其の意を憫み...

アカマツ ミツスケ 赤松満祐は左京大夫義則の長子なり...

アカマツ ハルマサ

アカマツ ミツスケ

意あり嘉吉元年六月義教意決し將に備、播、作の三州を割き...

アカマツ ミツノリ

と爲り以て時を俟つべしと是に於て教祐辭して去り性具終に自殺す時に歳六十一なり親族六十九人之に從死す四子あり教祐、則尙、若松丸、乙松丸と曰ふ野史

アカマツ ミツノリ 赤松光範は範資の長子なり從五位下に叙せられ檢非違使信濃守と爲り攝津守護職を襲ぐ正平中足利義詮に從ひて吉野を犯し還りて佐々木高氏に誣陷せられて守護職を罷めらる後細川清氏と官軍を譽田村に拒ぐ(大日本史)

アカマツ ヨシシケ 赤松義祐は時政の子、逸史に義村兵部少輔上總介に任す宇喜多直家を擁へ浦上宗景と隙ありしむ義祐を織田信長に送くる永祿十二年十月池田勝政、伊丹親興等宗景を援けて遂に義祐を逐ふ子あり則房と曰ふ野史

アカマツ ヨシノリ 赤松義則は則祐の長子なり佐々木高氏の外孫を以て足利義満の爲めに寵せらる則祐死して播磨備前守護を襲ぎ左近衛將監上總介兵部少輔を歴て從四位下大膳大夫に至る義満赤松及び山名一色京極氏を以て侍所と爲し京師に居て訟獄を聽断せしむ因て四職と稱す元中中山名氏清と京師に戦ひて之を敗ぶる功を以て美作守護を加授せらる美作服せず兵を率ゐて撃ちて之を平らぐ天皇勅して風風桐の章を賜ふ幕府亦二引兩の章を授く又因州知頭郡、但州朝來郡、攝州中島等の地を賜ふ髪を別りて性松と號す法名は圓齋義則人と爲り短小因て世に三尺入道と稱す應永四年九月卒す年七十義則五子あり長は滿祐次は祐元常陸介と稱す次は則友出羽守と稱す次は則繁二郎と稱す入道して性通と號す季は義雅伊豫守となる義雅滿祐と城山に自殺す孫政則あり(大日本史野史)

アカマツ ヨシムラ 赤松義村 中國太平記に政村に作る路城城主小字は才松丸政村の長子、明應八年播、備、作三州亂れ東西黨を樹て、相ひ戦ふ浦上村宗才松丸を擁して鹽屋城に入る幕府命を下して東西和睦す是に於て義村二郎と稱し上總介に任

アカマツ ヨシムラ 赤松義村 中國太平記に政村に作る路城城主小字は才松丸政村の長子、明應八年播、備、作三州亂れ東西黨を樹て、相ひ戦ふ浦上村宗才松丸を擁して鹽屋城に入る幕府命を下して東西和睦す是に於て義村二郎と稱し上總介に任

アカマツ イツ

じ下野守民部少輔、播磨守を兼ぬ永正四年九月枝屬播磨守異圖を懐く平源二等之れに黨す義村兵を率ゐ撃て播磨餘黨永忠、永清を獲永正八年八月細川澄元を援けて兵庫浦を経て河原の林正頼を鷹屋城に攻む十五年十一月又兵を發して浦上村宗を三石城に攻む勝たす十六年義村松山城を攻む城主笠村氏城を棄て、走る十七年作人中村五郎左衛門村宗に通じ岩屋城に據りて兵を擧ぐ義村小寺則職をして赴き撃たしむ岩屋危急なり村宗陰に下野守村秀の弟中務丞五郎と謀を通じ急に則職を襲ひて之を殺す是に於て村宗強て義村を常印と號す是より先き大將軍義澄其子義晴を義村に託す十二月義村義晴を奉し潜かに置鹽を去りて榛谷に到り族人衣笠五郎左衛門、會弘岡左京進、別所則之等に頼りて兵を五著に起す村宗和を乞ふ大永元年七月村宗義晴を奉して京師に入り義村を室津實佐寺に幽す二年九月義村村宗の刺客菅野、花房、岩井彌六等の爲に弑に遇ふ法名は了堂姓圓禪光院と號す子晴政あり(野史)

アカマツ ラムダイ 赤松蘭臺は播州赤穂の儒者なり字は大業、蘭臺は其の號、太郎平と稱す滄洲の長子幼より詩文を善くす其の名稍々顯る天明中父に先て歿す年五十一著書赤城風雅集、赤城文獻志、弊帚集あり(續近世世語、續諸家人物誌)

アカマツ ロサイ 赤松魯齋は播州赤穂の儒者なり字は大經五郎と稱し魯齋と號す滄洲の二子、出て、河野氏を嗣く詩を善くす須磨懷古七言律詩三十首を作る二十三歳にして歿す魯齋詩鈔を著せり(續近世世語、續諸家人物誌)

アカマツ エンシン 赤松圓心「アカマツノリムラ」佐に任す天正二年九月廿九日土寇と勢州長島に戦ひ敗る信長危急に迫る春光大隅守信廣と共に奮戦して死す(信長忠)

アカマツ ハルミツ 赤見春光は織田信長の臣なり左衛門佐に任す天正二年九月廿九日土寇と勢州長島に戦ひ敗る信長危急に迫る春光大隅守信廣と共に奮戦して死す(信長忠)

アカマツ アシウエモム 赤井悪右衛門は勇猛の士なり家清の弟、名は直正、右衛門尉と稱す丹波人、兄家清氷上矢

アカマツ ミツノリ

田船井の三郡を領す悪右衛門年甫て七歳怪物あり夜人を惱ますと聞き潜に往て之れを斬る熟視するに石佛像なり衆目して悪右衛門尉となす外身棘野某野々直正怒て某を殺し族野を稱す永祿十二年織田信長明智光秀をして來伐せしむ悪右衛門之に降る天正七年光秀波多野氏を滅し郡邑を侵掠す直正孤立城に墜りて固拒す六月光秀城に迫る炎暑甚きを以て軍を收め八月再び來る秀吉脇坂安治をして光秀を加援せしむ光秀兵を併せて圍攻す是の時直正疔を患ふ布を以て腫をつみ、み逞兵を率ゐ出戦す士卒皆死す直正安治と槍を接へ遂に戦死す(野史)

アカマツ イヘキヨ 赤井家清は丹波の人、右兵衛と稱し天文中氷上矢田船井三郡を領し波多野氏に屬して幼より戰爭に臨めり弘治元年國人輩田某等亂を起す家清兵を率ゐて之を撃ち輩田等を擒にして之を平く是の時創傷を受け三年を歴て弘治三年二月に卒す年三十三子忠家尙は幼なり叔父悪右衛門之を輔く後忠家秀吉に仕へて采邑千石を賜ふ慶長庚子の亂家康に從ひ千石を加賜す子孫幕府に仕ふ(野史)

アカマツ カゲトシ 赤井景俊は勇猛の士なり藤太郎と稱し丹波國の住人、臂力衆に超ゆ一の谷の戦ひに九郎判官源義經に從ひて奮闘數刻敵二十餘名を斬り更らに進みて能登守教經を刺さんと欲し露はれて戦死す(本朝武功正傳)

アカマツ キズム 赤井龜年 赤井龜年は俳人なり阿波徳島の人、龜年はその號、一に優然亭の號あり通稱祐助と云ふ弘化中の人其の俳歌に曰く「散出して休みの見えぬ紅葉かな」(俳歌海内人名録)

アカマツ トウカイ 赤井東海は高松藩士十郎左衛門名は直道の子母は内田氏なり名は細字は士巽小字秀之助巖三と改む別に東海と號す驅幹雄偉少より武を好み十字槍を善くす年甫めて弱冠小技の爲すに足らざるを知り遂に家を弟吉兵衛に譲り古賀精里に昌平齋に從ひ戸を鍵して力學すること五年嘗

て嗜血を患ふ衆醫之を危む東海意とせず戯れに稗史を著し以て自から遺る坊間中井履軒の名を冒して刻する所の昔々春秋なる者其一也精里嘗て餡糰汁を諸生に與ふ東海食はす精里性み問ふ對て曰く東海生れて武門に長し酒を嗜みて甜きを忌むと精里憤然語らず然れども此れより東海を待つと厚きを加ふと云ふ文化癸酉年齋を辭して卜居教授す東海時に二十有五文政十二年藩侯召して十口俸を賜ひ世子に侍讀せしむ爾後屢々祿を加へ秩を陞せ遂に使番に班し米百石を賜ふ文久壬戌年十一月十四日病むて没す享年七十有六谷中妙福寺先塋の次に葬る(事實文編)

アカマツ ヒロカゲ 赤井熙景は上野の人、山城守と稱し別髪入道して緒連と號す又但馬入道と稱す弘治二年正月館林の城を築きて之に徙居す火袋稻荷を外郭に祀り是を尾曳郭と名く蓋し此地火袋稻荷の神託によりて築きしものなればなり永祿二年十月死す子勝連勇力を以て宇都宮廣綱に愛せられ五百貫文の地を予へらる後ち故ありて自殺す(野史)

アカマツ マイケイ 赤井明啓は書家なり文次郎と稱し明得水と號す加賀の人書法を佐々木志津摩に學びて頗る其の風を善くす著はす所筆法彙引、時用文案、俳諧閑梅あり又遺蹟に眞字千字文、草字千字文、八景詩歌、同文異舛、四箴、献壽法帖勸學文、字府永凝帖あり(鑒定便覽、續近代名家著述目録)

アカマツ イツ

赤尾伊豆は武勇の士なり父を美作と稱す、淺井長政に仕ふ長政亡ひて、美作之に死す、時に伊豆幼にして僧となり、多賀邑に匿る、十二歳の時、偶々外に遊ぶ武士其の前を過く伊豆誤まらて之に觸る、其士怒り、拳を擧て其の頭を毆つ、伊豆其の佩刀を奪ひ、一撃の下に之を殪す是に於て多賀を逃れて赤尾に潜む、年稍々長して、京極高次に仕へ、終に部將となる、慶長中、高次關東に屬し、大津城に籠る大阪黨、毛利元康久留米秀包等、三萬七千餘の兵を擧げ、來り攻む、伊豆城を出て數人を斫り、敵を卻け將に城に入んとし、敵

逐ひ出て降る尋て城陥る種長因て家祿を全うするを得たり慶長十九年卒(野史)
アキツギ タ子ヒデ 秋月種頼は種長七世の孫にして種美の子なり從五位下に叙し山城守と稱す後佐渡守に改む性學を好みて慈仁なり租税を輕くし賦役を減ず衆皆な悦ぶ文政二年卒年七十六卒する時領下皆悲しみ父母を失ふが如しと云ふ子孫世に俟たり(野史)
アキツギ タ子ミチ 秋月種道は對馬守大藏春實の後裔なり筑前權守と爲る建武中菊地 宇治、の族と兵を起して勤王す尋て足利尊氏を多多其濱に拒く軍敗るゝに及んで太宰府に走る敵兵退及す種道其の黨二十餘人と返關して之に死す秋月氏世々西邊に居て門族頗る多し然れども其業遂げず時人之を憐む(大日本史)
アキツギ トウセキ 秋月等碩「トウセキ」
アキトキ ケン 秋時憲は江戸の儒者なり字は習之小丘園と號し辰之進と稱す天明三年七月十八日歿す小石川三百坂慈照院に葬る(江戸名家傳所一覽)
アキナガマロ 商長磨呂は其の傳を詳かにせず和歌を善くするを以て名あり詠歌は萬葉集其の他諸書に出づ(萬葉集作者傳)
アキノ パウ 秋坊は加賀金澤の人風流を以て名あり嘗て俳諧を以て諸州に遊び湖南を過ぎて幻住庵を訪ふ芭蕉翁口吟して曰はく「我宿は蚊の小さきを馳走かな」と秋坊謝して鞋を脱す居ること數日辭して去る翁之を山下に送り別に臨んで又詠じて曰く「やがて死ぬ氣色は見えず蟬の聲」と其の京を去く郷に還へるに及んでや降雪霏々として肌を劈きき三衣一鉢の外又之を凌ぐ可きなし因て萬子を訪ふて木炭を乞はんとし乃ち詠じて曰く「寒ければ山より下を飛ぶ鷹に物打荷ふ人ぞ戀ひしき」と萬子答へて「寒ければ山より下を飛ぶ鷹に物打荷ふ人をこそやれ」と乃ち木炭を贈くる、其終焉は正月四日

アキツギ タ子ヒデ

アキヤマ キヨクサム

なり時に友人李東其柴門を訪ふ談笑平生に異なることなし坊忽ちにして曰く「正月四日より此世を去るによし」と言畢つて即ち瞑す李東驚き且つ歎じて曰く「稻つむと見せて失せけり秋の坊」と以て之を薦とす(佛家奇人談抄、俳林小傳)
アキノブ 章信 「カノアキノブ」
アキノブ 章信 「カノタムセム」
アキノブ 章信 「カノエトリウ」
アキノブ 昌信 「カノキウハクニ代」
アキノブ 昭信 「カノシユムス井」
アキノブ 秋廣は鎌倉の鍛工なり廣光の弟、貞宗の弟子と云ふ九郎三郎と稱す應永五年八十四歳にして歿す(玉石雜記)
アキモト シス井 秋元子帥は岡崎侯の文學なり名は以正、子帥は其字、喜内と稱す岬夷、淡園等の號あり物徂徠の門人、後ち岡崎侯に仕ふ寶曆中に歿す淡園初稿の著あり(諸家人物誌名家全書)
アキモト タカトモ 秋元喬朝は徳川幕府の老職なり初字を甚九郎と稱す戸田忠昌の子にして秋元富朝の外孫なり富朝男子なし因りて喬朝之れが養子と爲る萬治二年十二月喬朝從五位下に叙せられ但馬守と稱し攝津守と改たれ復た但馬守と稱す養子番、寺社奉行、少老等の職に歴任し元禄十二年冬老中と爲り尋て從四位下に叙せられ侍從に任せらるる而して累りに食色を賜はり武藏河越城に封せられ邑六萬石を領す後ち正徳四年八月卒す歳六十八、喬朝人となり聰明にして士民を恵み禮儀を重んじ平生訟獄を聽きて決せざるあれは寢食を安せずと云ふ子孫相繼ぎ曾孫涼朝に至り徙りて出羽の山形に封せられ又四世忠朝繼ぎて後ち上野の館林に轉し世々俟に列すと(野史)
アキモト ナガトモ 秋元長朝は行朝一本家譜にの子にして初字は孫四郎、越中守と稱す姓は藤原氏、上野の人、長朝

北條氏に隸屬し天正十八年小田原城に據りて之を守る城陥るに及んで國人多く徳川家康に歸降す長朝亦た井伊直政の勸めに依り赴きて麾下に歸服し食邑を賜はりて上野總社に居る慶長五庚子石田三成の亂に長朝命を受けて會津に赴き旨を直江兼續に達し與人をして白河關を險ゆるとなからしむ軍平々の後長朝再び使を奉りて會津に赴く此時に當り深谷の士大沼越後守副使となり豊光寺等亦た從ひて上杉景勝歸降す慶長六年長朝邑六千石を加賜せられ併せて一萬石を領す後元和八年致仕し寛永五年八月卒す法名は巨嶽元譽、江月院と號す子あり泰朝と曰ふ(野史)
アキモト マサタマ 秋元正忠は羽後秋田の鍛冶なり長左衛門と稱す土民より出て好んで刀鎗を鍛す師を江東に求め日夜鍛錬業成りて歸る文久年中秋田の藩士に擧らる奥羽戦争の時其の作頗る多し之を有するもの皆其の銳利を賞す明治十年六月歿す年四十九
アキモト ヤストモ 秋元泰朝は長朝の子にして姓は藤原氏、上野の人文祿元年泰朝始めて徳川家康に謁見す慶長七年食邑を賜はり八年二月從五位下に叙せられ但馬守と稱す泰朝松平正綱と與に駿府に仕へて親臣と爲る是れを稱して御近習出頭人といふ寛永十八年泰朝甲州郡内の城代と爲り十八年二月甲斐の谷村城に封せられ累りに采邑を増して一萬八千石に至る十九年冬卒す歳六十三、子あり富朝と曰ふ(野史)
アキモト ユキトモ 秋元行朝一本家譜に藤原氏、下野の人なり其の祖宇都宮朝綱の後泰業と云へるもの嘉祿年中上總周准郡秋元莊を領し始めて族を秋元と稱す泰業の八世孫朝の後秋元を以て通稱となす其の孫國朝と云へるもの亂を避けて下總に遷居す國朝の曾孫政朝復た秋元莊に住む是れを行朝の父と爲す行朝初め茂兵衛と稱す後ち越中、但馬守と稱し累世管領上杉氏に隸屬し井草、岡庭と共に深谷の宿老とす上野群馬郡總社を食む北條氏武威を山東に震ふに及びて行朝之れ

アキツギ タ子ヒデ

アキヤマ キヨクサム

に屬す後ち天正五年卒す子あり長朝と曰ふ(野史)
アキ モリイ 安藝守家は女科醫なり貞守の子、守定の孫、大膳亮刑部少輔に歴任す永享中足利幕府の室重子の産を治して功あり乃作州弓削の莊を賜はる(皇國名醫傳前編)
アキ モリサダ 安藝守定は女科醫なり其の先は安藝平氏に出つ因て氏とす延文中室町幕府の室紀貞子の娠を治し義滿を生む其の功を以て尙藥と爲り從四位上に叙し大膳亮に任せらるる子孫業を繼ぐ宮中産を治する皆安藝氏に屬す傳へ曰ふ守定春日祠に詣り通宵祈ることあり時に一女子ありて治を求む守定爲に鍼して藥を與ふ女の病頓に癒ゆ乃謝して曰く妾は猿澤の龍女なり君の厚恵を受くるも以て報の爲すべきなし妾に靈方あり願くは以て贈らんと乃一卷を遺して去る明早之を視れば治産方なり傍に龍鱗三片を留む守定之を異とす其の方を試みるに驗あらざるなし遂に女科の名を得と云ふ子貞守刑部少輔たり(皇國名醫傳前編)
アキヤマ キヨクサム 秋山玉山は肥後藩の文學者なり名は儀、一の名は定政、字は子羽、儀右衛門と稱す玉山は其の號、又青柯と號す本姓は中山氏、父定勝世々肥後侯に仕ふ叔父秋山需庵醫を以て亦祿を受く玉山出て、其の養子となり夙に其の技を習ふ又學を好み身水足屏山に從ひて儒を受け博く羣籍を窺ふ發明する所多く人の意表に出つ是に於て藩主靈雲公需庵に命じて更に他子を養ひて醫を嗣かしめ玉山をして一に儒學を専らせしむ玉山乃ち藩主に從ひて江都に至りて林風岡に就いて業を受く前後留學十年風岡其の才學を奇とす講説の日已れ事故あれば玉山をして代り講せしむ靈雲公卒するに及びて玉山乃ち國に歸る爾後門に入りて業を受くるもの千餘名嗣主隆徳公舉て侍讀とす祿百石を賜ふ公卒して靈感公立つ恩寵甚溼し常に左右に侍りて裨補する所少からず此より公東上すれば玉山必ず從ふ年五十に及んで擢られて鳥銃隊長となる寶曆四年熊本新に學校を建つ名くるに時習館を以

信長に受けて龜山に歸り光春を寢室に召し密かに謂て曰く余に一大事の在るあり願くは子が首を得んと光春曰く唯臣一人の首に止る乎と光春曰く此れ固に易々たるのみ思ふに大事必らず當に成るべしと光春驚きて曰く何を以て我が大事を知るぞ光春曰く何ぞ君が問の奇なるや君常に恨を信長に擁く臣の能く知る所也と光春曰く然り今將に信長を討たんとす而れども汝が力を假らざれば能はず但恐る汝が之に従はざるを故に汝若し余か命を拒まはば汝の生命を得んと欲せしなりと光春曰く君先づ一人に語らるれば臣當に諫争せん然れ共今事既に他に聞ゆ唯其の廣く泄れざるに及んで當に事を舉ぐべし猶豫機を誤らば勝を噬むの憂あらんと辭色共に勵し夜半急に勤めて兵を擧げしめ馳せて本能寺を圍み遂に織田信長を弑す光春先鋒を以て軍を率ひ攻めて本能寺を陥れ並河金右衛門と云へるもの信長の首及び白綾衣袖を獲たり光春乃ち陰かに之れを匿さしめんとす時に金右衛門其の功を陰に告る光春乃ち諭して曰く織田信長嘗て甲斐を伐ち武田勝頼の首を辱むるや人之れを誹謗せり今や主公之れを見れば怨恨の深き信長の勝頼に於けるの比に非ざるを以て必ずや戮辱詆辱して以て請を後代に遺さん抑々天命は畏るべし足下の功勞は我れ後證たらんと泣きて之れを強請す是に於て金右衛門其の志に感し乃ち之れを光春に託す光春之れを僧西譽に命じて歛葬すと云ふ而して光春諭らず偏く之れを求めて得ず乃ち齋藤利三を遣はし光春を請て曰く卿先鋒と爲りて未だ明證を得ず甚だ異むべし若し信長をして通れ去らしむるに於ては存乏を窮めざれば大事忽ちにして終らんと是に於て光春其の實を告ぐ利三之れに感し焦餘の白綾衣を取り以て證と爲し事止むを得たり光秀二條第を圍み光春尋て安土を留守す而して羽柴秀吉師三萬を率ひて東上すると聞くに及び赴きて戦はんと欲し火を縱ちて城を焚き兵を率ひて馳す途にして通兵に遇ひ光秀已に敗

アケチ ミツハル

アケチ ミツヒデ

死すに聞き坂本に入らんと欲し粟津原を過ぎ秀吉の先鋒堀秀政に大津に遇ひ打出濱に戦ひ兵寡きを以て敗られ三百餘人に充塞し以て之れを絶つ因りて光春馬を湖水に入れ徐々として大津唐崎を経て遂に坂本十三堂に達して馬を堂柱に繋ぎ片紙に書して左馬介湖水を渉るの馬と乃ち之を鬣に括して坂本城に入る時に秀政等追ひ來り圍み攻むる數重、是れに於て光春光秀の妻孥を天主樓に置き自ら羅郭櫓上に登りて敵兵を招く乃ち路長秀政自ら來りて其の故を問ふ光春乃ち不動國行及び二字國俊刀、藥研藤四郎佩刀、大耳柴茶器、御前釜、御番建蓋、虛堂書等の名器を漢織肩及び絹服に覆ひ之れを結ぶに婦人の襟帯を以てし且つ目錄書を附し之れを秀政に託し又二谷胃、黄金百兩を西教寺に贈りて後事を依託し光秀の妻孥及び我が孥を殺し而して火を樓屋に縱ち自殺す實に天正十年六月十四日なり(野史常山紀談)

アケチ ミツヒデ 明智光秀は土岐氏の支族なり美濃の人祖父を光繼と曰ひ父を光綱と曰ふ 若狭守護代年數に云く光秀は若して幼時より織工を好みて武藝を好みて近江に往き木下氏に仕へて明智十兵衛と稱し其の使者と爲りて尾張に赴むくや織田信長其の言辭鮮にして進退あるを愛し請ひ得て光秀歳甫めて十六にして元服を加へ十兵衛と稱し光秀と名く弘治二年四月齋藤義龍其の父を弑するや光秀の叔父、光安入道宗宿明智城に據りて之を拒く而して力戰勢屈し之に死す光秀之れに殉せんと欲す宗宿制止して曰く是れ汝の死すべき地に非らず宜しく命を保ちて家宗を興すべし是れ汝ち其の子光春等を托す是に於て光秀族を擡へて越前の穴馬に通れ又た諸州を遍歴し六年を踰えて歸り朝倉義景に仕ふ永祿八年冬人あり光秀を義景に請ひて曰く彼の舉動を察するに智謀勇健遠く衆に超ゆ他日宿臣を輕蔑し恐くは異圖を懷かんと義景漸く之れを疎斥す是に於て光秀遂に去りて長岡藤孝に仕へ歩手と爲る然れども其の老臣と協はずして亦た去る九年岐阜に赴むき始めて織田信長に仕ふ時に歳三十九なり信長其の

智勇を愛し擢んで士隊長に列す十年二月瀧川一益に従ひて北勢を伐ち上木、木股、持福等を下だし又木桶攝津守に箕城に克ち山路國友を高國城に攻む十一月池田城を攻めて守將勝政を下す十二年丹波を伐つ後元龜元年五月丹羽長秀と共に若狹を伐つ二年九月和爾城主和爾氏條を撃つ功を以て滋賀郡を賜はり坂本に城きて之に居り采邑十萬石を食む天正元年二月光秀柴田等と石田堅田を攻めて之に克ち七月自から木戸城及び田中城を攻め功を以て高島郡及び木戸、田中の二城を賜はり滋賀の郡領を併す二年三月從五位下に叙せられ日向守に任せらる三年春信長の命を以て旗を惟任と改ため丹波に封せらる時に國人所在に割據して一統せず光秀乃ち兵を率ひ赴き撃ちて之れを平く四年四月大坂の一向徒と戦ひて利あらず五年十月織田信忠に屬して片岡城を抜く後光秀丹波丹波の間に戦ひ多く城壁を屠ふり又人を殺す其の數を知らず其の波多野秀治を八上城に攻むるや敵兵固く拒きて屈せず光秀乃ち母を質と爲して成ぎを行ふ而して秀治及び弟秀尙を擒にして安土に送る信長之れを殺す是に於て波多野氏の國人怨憤し光秀の母を斬る因りて世人光秀を彈指して謂ふ母を殺せりり光秀之を怒り八上城を屠ふりて最も慘酷を極め且つ信長が其の母を奪還するを諒たらずして秀治兄弟を誅せるを恨む而して信長亦た光秀の詐偽卑怯を憎みて賞せずと云ふ後光秀赤井景遠を鬼城に攻めて之に克ち悉く丹波を平らげて其の守護と爲り龜山に城きて周山と號す而して窃かに己を以て周武王に比し信長を殷紂王に擬すと云ふ光秀人となり謹厚にして人に接して恭順嘗て信長醜を授けて七合入の盃を擧げて先づ柴田勝家に予へ次を以て光秀に授けしむ光秀辭して曰く臣能はずと信長刀を脱し請めて曰く酒を飲むか將た劍を飲むか汝の欲する所に任すと光秀乃ち酒を飲む光秀稻葉一鐵の家人那波和泉守齋藤利三を扶持し善く之を遇す一鐵信長に懇へて曰く光秀我が股腋の臣を奪ひ以て仕途を禁遏すと信長乃ち怒り

アケチ ミツハル

アケチ ミツヒデ

光秀の髪を採み引き伏せて鮮血迸しるに至る光秀首を俯して曰く臣大封を受け士を養ふは全く君の爲にして臣の利を計るに非らざるなりと信長手を脱して曰く吾今刀を佩びざるを以て子幸に頭あるを得たりと十年五月徳川家康穴山梅雪と安土に往き信長を見る信長乃ち光秀に命じて曰く孤嘗て濱松に過りし時家康待遇甚だ慇懃なり以て之れに酬あざるべからず汝馳走の事を司り努力して其の厚誼を報ひよと光秀悦びて命を拜し大寶坊を定めて客館と爲し湖畔に帳り人を京畿に遣はして珍羞器玩を購ひ供具甚だ盛にして善美を兼ね盡せり信長鷹を郊原に放ちて蹄途大寶坊を過ぎり其の魚鳥の腥氣あるを怒り草鞋にて薦蓆を蹂躪し器具を履碎す光秀更に亦之れを設く明智軍記に云く家康の安土に入るや光秀迎接最も謹み家人光春、光忠、光近等各々金銀を以て信長を奉り抑々孤は既に三合を請み四海を掌提す天下の群牧皆孤の旗となり然るや汝何の故に斯く厚く之れを接するや他日君主を擡する如きはなりと侍童數人扇を掲げて光秀を擁り森圍丸籠籠し鐵扇を揮ひて光秀の顔を撃ち血流れて面 此時に當りて羽柴秀吉軍に山陽道に在り信長に勸て西征せしむ信長秀吉の報を得て悦び令を畿甸の侯伯に下だし光秀を以て先鋒と爲し期を促して發遣せしむ光秀恨み且怒て曰く草禮未了了らざらば又遠征を命ず讎覆胡そ此に至るやと乃ち珍羞玩器を湖に投し馳せて坂本に還る尋て龜山に歸る信長殘忍にして殺虐を好み臣下を遇するに禮なし嘗て酒を置て高會し醉に乘し光秀を掖して其顔を指し以て鼓節を爲す光秀怨恨數回善憤日久うして決意する所あり廿七日愛宕山に登り西坊威徳院に舍し人を遣はして金銀を里民に頒與し竹木を伐りて路を作らしむ光秀時に卒爾として曰く本能寺の聖の深き幾はくそと既にして光秀龜山に歸り六月朔日の夜左馬助光春を寢室に招き悉く傍人を退け謂て曰く余に一大事あり子須らく蚊帳の中に入れて光春頭を蚊帳の中に入れて何事なるやと問ふ光秀曰く余願はくは汝の首を得んと光春曰く唯臣一人の首に止る乎と光秀曰く既に三人の首を貰ふ而して猶は足らざるが故なりと光春曰く此れ固に易々たる耳大事必らず當に成るべ

しと光秀驚きて曰く何を以て我が大事を知ると光春曰く何ぞ君が問の奇なるや君常に恨を信長に擲くは臣の能く知る所なりと光秀曰く然り今將に信長を討んとすれ共汝が力を假らざれば能はず但恐る汝が之に従はざらんを故に汝若し拒まば汝が生命を得んと欲せしなりと光春曰く先づ臣一人に語らばれば臣當に諫争すべし然れ共今既に事他に聞ゆ唯其の廣く泄れざるに及んで當に事を擧ぐべし猶豫機を誤らば臍を噬む共益なしと夜半俄かに軍兵を出し桂川を濟るに及ひて光秀策を揚げ大呼して曰く我が仇本能寺に在り努力する者は重賞あらんと衆始て其反せるを知る光秀兵一千を督して三條堀川に屯し光春騎兵三千五百を以て進んで本能寺を圍み鼓譟して登る信長の近侍森蘭丸長定兵馬の聲を聞き出て、望めば水色枯梗の旗幟已に寺門に逼れり信長長定を召し其政兵の誰たるを問ふ長定對て曰く光秀なりと言未だ畢らざるに前隊已に殿庭に亂入す信長白單衣を着弓を以て敵を射しに弦絶ゆ乃侍女十文字の鎗を呈す信長之を以て暫く防ぎしが事の爲す可らざるを察し内に入りて障子を閉づ然れども銀燭未だ滅せず信長の影映するを見て天野源左衛門鎗を延ばして刺し殺せり光春其の屍を隠して出さず光秀之を求めて得ず快々として樂しまず齋藤利三白綾衣の焦餘を搜得て之を刺して勝賊を發すと言ふ明智光忠兵四千を率ひて二條城を襲ふ信長の長子信忠火を縱ちて自殺す是の夜光秀妙心寺に入る意剃髮せんと欲す光春等諫めて曰く古今先蹤なきにあらず請ふ旗を京畿に掲げて禁闕を護衛し以て武名を後世に傳ふべし亦愉快ならざやと諸老亦諫む光秀遂に坂本城に入りて更に湖橋を修め尋て安土に入りて悉く帛金な收め以て與黨を賞す時に朝廷光秀の威唐を懼り詔して使者を賜ひ安土に到りて慰藉す光秀傲然將軍を以て自ら居る而して之に應ずる者は市井無賴の徒若くは亡命の姦兒のみ列侯世族に至りては一も至る者なし細川忠興のことき光秀の女婿なりと雖も使者を逐ふて絶を示す蒲生賢秀日野

アケチ ミツヨシ

アゲマキ

に據りて徹を四境に傳へ嚴に守備を設く是に於て光秀始めて懼心を生ず既にして光秀荒木行重に佐和山を妻木範賢に長濱を守らしめ自ら京師に往き入朝して禮を行ひ三宅秀朝を所司代に溝尾茂朝を町司監と爲して京師を鎮衛せしむ又人心を收めんと欲し輦轂の戸税を調き祠堂金と五山及び大徳、妙心二寺に寄附す天皇詔して其戸税を調くを嘉す光秀復た安土に往き將に日野を攻めんとし織田信雄の土山に次するを聞きて前むと能はず光秀初め以爲らく柴田勝家北越に在りて上杉氏と對抗し羽柴秀吉毛利氏と中國に相接し徳川家康界浦に在りて國城遠隔す而して信澄は忠興の女婿たり此時に乘して織田信長を弑殺せば天下圖るべきなりと而して意を遂ぐるに及び人を馳せ毛利氏に報ずるに其の人諷りて秀吉の蛙鼻陣中に到りて虜にせらる秀吉移文を見て乃ち喜悲交々至り遂に毛利氏と成ぎを行ひ長秀、勝入等と東上す又家康變を聞きて國に就き信澄は長秀の爲に殺され順慶、忠興亦來り會せず是に於て光秀安土を發し京師に適き預め守備を議す入朝して天顔を拜せんとを請ふ終に聽されず乃ち歩騎兵一萬八千を率ひて洞嶺に次し大に秀吉と山崎に戦ひ敗走す光秀遁れて青龍寺に入らんと欲す會ま／＼土寇群起して道を遮り漸く間道を経て青龍寺に入る時に見兵猶一千餘あり而して遁れ去るもの多く忽ち兵僅に數百を餘すに至れり城代三宅綱朝諫て曰く臣請ふ此に戰死せん宜しく疾く坂本に逃るべし是の夜二更光秀及び村越三十郎、堀與二郎、進士貞連等潛に青龍寺を出で伏見深草を経て四更小栗栖を過ぐ土寇路に要し數中より竹槍を以て之を刺して光秀の右腋を洞す光秀急に馳する數百歩にして馬より墜つ茂朝馳せ到る光秀切齒して曰く疾く首を刎ね以て密藏すべしと乃ち瞑す是に於て從者皆々自殺す茂朝光秀の首を取りて之を糶に裏み泥中に埋めて之に殉死す光秀歳五十七光秀旗を擧げてより僅かに十有三日なるを以て世に之を十三公方

と稱すと云ふ光秀和歌を善くし嘗て志賀唐崎に松を植え歌を作りて曰く「我ならで誰かはうろんひとつ松心して吹け志賀の浦かせ」と又茶道に通ず三男三女あり長は光慶次子志賀自然、季子字は乙壽丸、女は明知光忠、細川忠興、織田信澄に嫁す(野史、常山紀談、茶人系傳全集)

アケチ ミツヨシ 明智光慶は日向守光秀の子なり十兵衛と稱す英才にして孝徳あり行年十四歳天正十年の春より病に臥して丹州龜山に在り同年夏五月父光秀俄かに隱謀を企つと雖も光慶が賢才に恐れ必す諫争せん事を憂へ深く秘して此を告げず親族隠岐守をして附人とし偽つて西國出陣と號し遂に兵を催ふして京都に至り遽かに主君信長を殺し頼朝勅宣を受けて將軍に任す乃ち將軍宣下の事を早く光慶に告げて彼れか心を悦ばせんと飛檄を以て之を告ぐ光慶一たび此を聞き却つて大に悲泣し鬱氣胸に逼て遂に卒せり(約皮録)

アゲマキ 曙庵秋舉は三州岡崎の俳人なり文政天保の人(萬家人名錄)

アゲマキ 總角は京都島原里の娼妓なり元和中京師に助六といふ者あり任俠を以て聞ゆ其の姓氏を詳らかにせず或は云ふ貴族に出つと蓋其魚葉牡丹を用ひ記號と爲すを以て也島原里丹波屋と曰ふ青樓に畜ふ所の妓名は總角色藝千里に甲たり助六深くこれと相馴しむ人因て總角助六と號す四條街に家す僕を蓄ふ五六人居るに恒産なく亦兄弟妻子なし人と爲り清秀にして鄙ならず内剛にして外柔志を高うして義に任じ強きを挫き弱きを援け以て俠を世に立つ又藝事に多能なり常に高門に出入して他の俠者と伍するを屑しとせず時に陶器人浪遊して京に寓す初め朝倉義景の臣眞柄晴俊(門左衛門)と稱す勇天下に著らる義景の亡ふるや其役に死す子を某(門左衛門)と曰ふ家康其の名士の子たるを以て祿して以て麾下の士と爲さむと欲す未だ命せず病むて卒す子なし前に其妻の從弟陶七郎を養つて嗣とす七郎舊と大内氏に仕へ既に眞柄氏を冒かし改めて主馬と稱

アケチ ミツヨシ

アゲマキ

す妹あり色美に書を能くし忠輝に宮事す忠輝は家康の第六子に於て秀忠の弟也妹幸を得て側室と爲り盛寵あり主馬因て忠輝に出仕するを得乃ち本姓に復し更に要人と稱する人慧敏俊便常に忠輝に事ふるに其好む所を勸め稍以て寵を要人慧敏俊輝に侍し大に威福を作す故を以て藩士これを怨む傳相山田某長門守に深く之を憂ひ屢々忠輝を諫めて之を退けしむ聽かず其人懼れて某を讒す某知らず又顔面を犯して諫む忠輝大に怒り侍臣に命して之を前に戮せしむ秀忠これを聞き大に悦ひしして曰く山田某は神君が擇んで以て弟に傳する所なり今弟擅ま、之を誅する我其意を知らずと近臣高島伊織をして往て忠輝を責めしむ忠輝素と剛暴驕蹇既に使命を聽き忿氣沸然伊織に謂つて曰く汝我か爲めに幕府に謝せよ某已に弟が家に相たれば即ち弟が臣也今臣罪ありて弟これを誅す何ぞ幕府に謝せむ幕府尚ほ弟を怒りて横虐と爲さば弟請ふ腹を刎り以て罪を謝せむ且汝之を思へ我神君に於ける亦子也特に其後生の故を以て幕府に臣たる耳今小事必ず讓む何ぞ寛ならざるの甚たしきと言多く忌諱に觸る伊織已に退き謂らく是以て復命す可からず恐らくは其親を問する有らむかと徑ちに歸りて家居する三日幕府執政土井利重を召して之を問ふ利重乃ち退き伊織を其邸に召す伊織至り侍士を屏せけむと請ひ密に告ぐるに狀を以てし且曰ふ僕不幸にして此際在り唯一死あるのみと直ちに刀を執り自から其腹を刺す利重驚きて之を支ふ速はす遂に死す利重復た殿に上りて具さに聞す幕府之を悼み其の弟を以て嗣と爲し銀卅枚を賜ふて厚く屍を斂めしむ又利重に命して山田某の後を存せしむ忠輝の傳相皆川某遠山某共に忠輝を諫めて曰く往日伊織反命せずして自殺す幕府終に復た問はず是親に教き也君何ぞ獨り大兄に負て幕府に抗するか願くは死臣の忠言を思ひ速かに要人を退けて之を遠さけよ臣等敢て死を以て請ふと忠輝亦頗る悔い乃ち陰かに厚く資斧を賜ふて之を逐ふ要人弱かに意ふ今國家太子猶ほ幼なり幕府若し不諱あ

らは當に嗣て大位に即くべき者は吾か公に非らずして誰ぞ公にして社を獲ば我將に大に用ひられむと遂に大逆を謀り...

アゲマキ

所恩威樹立し諸侯異心なく百姓怨氣なし此の時方編戸の俣小臂を擧げて大事に當る恐らくは百一も成る無からむ且僕...

は禍基漸く大ならむ僕謹しむて國家の爲めに之を誅し且以て忠輝公の爲に冤を雪がば僕亦冀くは以て難を免かざるを得む...

アゲマキ

在るをいかむ嫌ひを避けざるを得ず、請ふ且らく之をして卿か所に在らしめよ衣食の資は我敢て卿を煩はさずと主曰く敬...

大小二刀を帯ふるを許し以て其義を旌らばす更に奉行私邸の諸役に命し要人を論して反逆を爲し將に屍を日の岡に磔せむとす治助請ふて曰く要人死に臨み僕に屬するに屍を飲むるを以てす言猶ほ耳に在り僕負くに忍びず伏して願ふ君公大仁を垂れ屍を以て僕に賜はらば幸甚と宗重其志を感して之を許す但罪條を掲げ著はして之を日の岡に建つ蓋し以て忠輝を警しむる也既にして總角治助に請ひ難髪して尼と爲り以て助六に香花を奉せむと治助曰く姑らく是を置け我將に汝の爲めに親に議せむとす我汝を諒とせざるに非ず然れども此に一あり我が妹幼時痘瘡を患ひ首髪少く膚漆の如く斑痕額に滿ち醜比すへきなし助六嘗て我に謂つて曰く令妹已に笄するも恐らくは終に售れざるを我當に乞ふて以て妻と爲すへしと時に我之に答へて曰く醜惡彼れの如し安くむそ巾櫛に侍せしむへけむと助六又曰く令妹の資性柔順貞淑、已に針機に巧みに兼ねて絲竹書詠を能くす其容醜くしと雖も其德甚だ美なり且妻何そ美醜を擇らばむ德何如を顧みる耳と我心に之を感荷す然れども敢て嫁せす妹之を聞き感泣して曰く人の棄つる所に於て之を納るを許す惠義の厚き三生報し且即ち簪帯を執らざるも妾に於て足れり其死を聞くに及むて哀感生意なし今汝夫の爲めに仇を報して已に一節を立つ汝にして尼と爲らば妹は則身を以て殉ふるならむ我甚だ之を憐む汝請ふ其事を以て之を妹に譲り其れをして因て以て身を終へしめば則妹亦一節を立て而して我助六と幽明に相喜むを得む況はむや汝は即ち別に琵琶を抱き改め嫁する者と大に異なるをやと總角曰く己に請ふ所を得されば寧ろ死あらむのみ但事貴妹に關る且君の厚意に背くも亦忍びざる所也事已に斯くの如くなれば唯命是從はむと是に於て治助總角を以て己が妹と爲し其從弟野口甚兵衛に嵯峨の里に嫁す妹祝髪して浮圖尼と爲り亦庵を其里に結ひ垢衣糲飯日夕佛に事へ専ら助六の爲めに後福を祈る後總角男を生む而して夫病むて歿す遂に比丘尼と爲り來て庵

アゲヤ キサイ

アサカ タンバク

に入り亦亡夫及び助六の爲めに浮圖道を修めて庵中に終ふ治助が妹善く佛經を讀み深く其旨を領し遂に一寺を創し寂するまで終身人道を知らずと云ふ(事實文苑)

アゲヤ キサイ 揚屋喜齋は終家なり頗る三絃の道に深し特に六筋懸に長す慶安明曆の間其の名最も著はる天下第一左衛門、庄左衛門等と名を齊うす(聲曲類書)

アケラ キウカム 明浦宮鑑は勢州の書人なり墨梅を畫きて甚だ清奇あり遠く補之の風を學びて尋常畫家の流に非ずと云ふ(本朝畫史)

アケラ クワンカウ 朱樂菅江は有名なる狂歌事師なり姓は山崎名は景貫字は道父通稱稱助といふ牛込二十騎町に住す幕府の先手與力なり内山樺軒の門に入りて廣く和漢の學に涉り最も和歌を能くす後蜀山人等と共に狂歌をもつて名聲世に聞ゆ菅江の名は初め俳名を貫立と云ひしを以て人皆貫公々々と呼しを菅江と書きしといふ中頃菅江の名聲ありと爲して漢江に改む日光宮公遊親王之を聞て曰く菅江何ぞ妨げんと因て後菅江に復す是れに朱樂の二字を加へしは安永の頃人酒を飲み戯れに行燈の紙に「我のみひとりあけら菅江」と書しを初めとす又淮南堂一に基陀利華庵と號す著書に大抵御覽狂歌大勢等あり斯道の虎の巻なり元文三年十月廿四日に生れ寛政十年十二月十二日歿す青山青原寺に葬る(狂歌時人評、狂歌師集)

アコ 阿己は尾張國の妓なり其の歌新續古今集離別の部にあり世に傳ふる景清が愛妓五條坂の遊君阿兒耶は是なる乎

アゴ井ム ジャウシム 安居院淨俊は梶井宮の執事に於て律師に任す護良親王を補佐し殿法印良忠と同勤たり中興の大業成るに及び足利尊氏兄弟の讒言により良忠と共に獄に下され建武元年十二月十二日殺さる(太平記)

アサエダ カカ 朝枝玖珂は防州吉川侯の儒臣なり名は世美、字は德濟、善次郎と稱す玖珂は其の號、自ら脩して晁

氏とす伊藤東涯の門に學ぶ能く華音に通し小説を解せり(墨定便覽、名家全書)

アサカ カケベエ 安積覺兵衛は小笠原藩に仕へ雙なき軍功者なりなければ侯音を更ためて訓とす覺兵衛とす關原の戦殊に大功を取たり大垣兵出で戦ふ日覺兵衛三人に疵を負せ五首を取て主君に示し再び槍を執て出つ敵六騎前後より夾撃す覺兵衛屈せず戰數合ならざるに二人を撞伏せたり時に礮丸流れて其一人を燈す三人驚駭し覺兵衛を捨て其傷者に集まる覺兵衛亦藥を出して之に與へ俱に扶けて其營に送り又三人と戦ひ又三首級を擧ぐ一日八級を得たるを以て人賞して唯一人の覺兵衛と稱せり前後比類なきの謂なり治平の後覺兵衛侯の無禮を怒ることありて辭せず其國を去り姓名を飯土用總内と改ため京師に寓止す侯怒て永く仕進の道を絶す水戸藩徳川氏其英名を稔聞し收用せんと欲す乃ち使者を遣はし侯に謂はしめて曰く聞く飯土用總内と云へるもの足下の譴責を受け沈淪年を累ぬと其罪の輕重を知らされども請ふ我が爲に赦し以て我面目を起さしめよ侯對て曰く吾家嘗て飯土用某なる者を扶持せしこと無し無ければ罪に處せん事もしど水戸徳川氏乃ち召して臣とす謂を執るの日原名に復せしむ其孫は即ち水藩有名の儒安積澹泊(參看)此なり(聲曲類書)

アサカ キサイ 安積希齋は水戸の人なり名は貞吉介之丞と稱す寛永七庚午歳生る性學を好み頗る詩に嫻ふ希齋と號す是時府下學に志す者少し義公故に貞吉を賞す父正信の幼なるや安積と淺香と邦音相通するを以て人誤りて淺香と書す竟に誤を傳へて改めす公其眞を失するを以て貞吉に命して其正に從はしむ年三十七寛文六年丙午七月十七日を以て歿す希齋詩集あり(盈篋錄)

アサカ ゴムサイ 安積良齋は字思順通稱は祐助良齋は其の號別號は見山樓奥州二本松の人徳川氏の儒臣なり幼にして學を好み穎異にして奇才あり慨然として奮ふて曰く僻野師

アゲヤ キサイ

アサカ タンバク

友に乏し豈に志を成す可けんやと乃ち笈を負ひて江戸に來り佐藤一齋の門に入る良齋家固と貧し學資給せず因て一齋に請ひて薪水の業に服し以て大に學ぶ時に年十七遂に祭酒林述齋の門に入り名聲鬱然として都下に震ふ嘗て良齋問話二卷同續編二卷を著す議論切實未だ嘗て間言語あらざる良齋固と文章を以て鳴る嘗て文を論じて曰く凡そ文を作くるの法は必しも六經ならず必しも秦漢ならず必しも唐と宋と元明とならず辭達するのみ吾が所謂辭達するとは能く自ら胸臆を臆り機軸を出して一家言を出す者なりと又詩名あり嘗て十二屬詩を作る命意奇拔頗る人口に膾炙す天保の末幕府令を下して學政を振興す是に於て諸藩風靡し絃誦の聲殆ど天下に遍ねし二本松藩亦學館を起し良齋を擧げて教授と爲す既にして將軍召して謁を賜ひ幾くもなく特旨擢んで昌平齋の教官と爲す人以此異數とす晩年に學術文章卓乎として後進に仰かれ書を挾みて睡る者陸續として門に盈ち列侯以下相延て講經を開き殆ど虛日なし萬延元年十一月歿す年七十一著はす所論孟荀旨、南柯餘篇、見山樓集、論語瑣註、東省錄、豆遊記、車輿考、良齋文畧正續、同詩畧數十種あり(近世先哲叢談、名家全書、香雪雅談)

アサカ シムウ 安積親王は聖武天皇の皇子也母は夫人縣犬養廣刀自、天平十六年閏正月帝に從て難波宮に行く途次脚氣を患ひ京に遷りて薨す年十七

アサカ タムバク 安積澹泊は水戸藩の碩儒なり名は覺字は子先覺兵衛と稱す澹泊は其の號、蓋し諸葛武侯が澹泊に非れば以て志を明すなしの語に取るなり又老圃常山の號あり晩に老牛居士と號す祖正信覺兵衛と稱し元和乙卯大坂の役、小笠原秀政に屬して戦功あり後水戸侯に仕ふ父貞吉繼て其の祿を食む澹泊生れて十歳朱舜水を師として江戸に來る明年父死したるを以て歸り十三の時復た舜水に江戸に從ふ舜水甚た其の才を愛して特に教授す居ること三年痘を疾みて還る故に親しく句讀を受くるものは僅に孝經小學論語其の他數部の

書のみ而れども長するに及んで博學能文にして尤も史學に長せり初め義公四方の英傑を招集して日本史編修の舉あり...

アサカ トモミツ

アサガハ ドウサイ

て、相田氏を嗣ぐ次は格字は天壽本姓に復し片山氏を稱す風世す第三子篤す因て大聖寺藩横江成美の子譽を養ひて嗣と爲し...

アサカ トモミツ

アサガハ ドウサイ

遺事、大日本史論贊、大日本史贊、神祖遺事あり(甘雨亭叢書、先哲叢談、近代名家著述目録) アサカ トモミツ 朝香朝光は西村流の砲術家なり...

を書せしことを記さず我人のために字を造る大小必らず手記に勝す今支子を照し索搜するに此ことなし見既に逝けり(男恭齋天す)三治(米菴養子遠菴)未だ贊せざる前なり當時たゞ...

記、紀効新書秘解、天正本孫子曹註輯補、征韓實記、長政暹羅戰記等あり(中根香亭通報)

アサギノ ウラナリ 淺黄裏成「シヤクヤクテイナガチ」
アサクサアム 淺草庵「セムサウアム」
アサクラ カデヒラ 朝倉景衡は日下部氏孫右衛門と稱す。號は南山字は君采新井白石の室の弟なり。著書數十部あり。錯着用次第、愚得隨筆、定西法師琉球物語、本朝軍器考圖式、及ひ遺老物語等なり(近代名家著述目録)

アサクラ トシカダ 朝倉敏景姓は日下部孝徳天皇の皇子日下部公袁采より出づ。後世廣景に至り。斯波氏に屬す。元中越前坂南郡本郷黒丸城に居る。敏景彈正左衛門尉と稱す。斯波氏三老臣の一となる。長祿二年斯波氏衰へ、其の臣甲斐某家事を恣にす。敏景撃ちて之を滅し、徒りて一乗谷に住む。應仁元年五月京極持清と戦ひ、之を取る。畠山義就敏景の勇を稱し、山名宗全に薦む。宗全之に甲刀及び馬を賜ふ。文明二年五月大將軍足利義尚敏景を越前の守護となす。是の歲敏景義尚の命を奉り、甲斐八郎及び斯波氏の族を伐ち、之に克つ。尋いて髪を削り、宗雄居士と號し、英林寺と稱す。久しからずして卒す(野史)

アサクラ ノブマサ 朝倉宣政は義景の再從兄弟なり。初の名は藤十郎父を在重と云ふ。宣政豐臣秀吉に仕へ、天正十八年使番となり。小田原に從ふ。慶長庚子の役、徳川秀忠に從ひて。上田城を攻む。鎗を把て城門に薄る。敵樓上より之を射る。宣政鎗を延はして、之を刺す。後從五位上に叙し、筑後守と稱す。秀忠の三子忠長に附屬し、掛川城邑二萬五千石を賜ふ。寛永九年郡山に流さる。十四年二月卒す。年六十五。子孫世々幕府に仕ふ(野史)

アサクラ ノリカダ 朝倉教景は敏景の子、小太郎と號す。兄を孫五郎景綱と云ふ。妾腹の子なり。故に坐次毎に教景に下る。文明十五年七月景綱教景を武藏場に殺さんとす。教景遁れて髪を剃り、宗滿と稱す。教景の母二位尼之を憤る。景綱京師に走り、細川氏に憑り、名を元景と改む。敏景の弟遠江守勇にして力あり。

アサギノ ウラナリ

アサダ ガウリツ

て義景に投す。義景親族群臣と謀りて、其の恢復の計を議す。會々義景の長子阿若死す。義景之を悲しみ、稍武事を怠る。義昭去て、美濃に行く。義景文を好み、和歌を詠ず。嘗て細川氏の女を妻り、卒す。近衛氏の女を迎ふ。又小宰相を愛し、近衛氏を送り歸へす。又齋藤兵部少輔の女を納る。小將と名く。一男を生む。之を愛王と名く。家政漸く衰へ、婦女口を出す。又老臣相尋で、没し。畿内大に行はれ、賞罰當らず。十一年九月織田信長義昭を擁立して、京師に入る。畿内の諸侯皆服從す。獨り義景疑て行かず。元龜元年信長家康と兵十萬を帥ひ、敦賀に到る。金筒手筒山の諸城遂に陥る。信長猶進で一乗谷を攻んとす。淺井長政義景と謀り、通して、信長の歸路を斷つ。義景兵を出し、之を追ふ。信長夜に乘り、京師に奔る。六月信長長政を攻む。義景族景健を遣はして、之を救はしむ。二十八日景健家康と姉川に戦ひ、大に敗れ、僅に免れて歸る。九月信長兵を攝津に用ふ。長政義景と合し、其虛を伐たんとす。一向の宗徒亦義景等を助けて、信長の歸路を遮ぎる。信長兵を還し、京師に入る。十一月彼我勢屈し、且北地雪深きを思ひ、義景等義昭に因り、信長と和す。三年七月信長虎御前山に城く。義景人を遣り、小谷を援け、自ら兵三萬餘を率ひて、梁瀬に陣す。此に於て和復た破る。天正元年七月信長兵を率ひ、虎御前山に陣す。八月長政の將叛く者あり。長政援を義景に乞ふ。義景兵を出して、之を救ふ。十日信長大嶽下野を攻め、降す。義景の兵敗を聞き、稍や脱し去る。義景狼狽甲を棄て、走る。信長の將佐々成政前田利家等追ひ到る。義景の兵死傷頗る多し。十五日義景僅に數騎を從へ、一乗谷に歸る。信長勝に乘り、連りに諸城を降し、敦賀に入る。義景の族景胤景健等皆信長に降る。義景朝倉景鏡鳥居景近等と謀りて、母廣徳院及び愛王を亥山東雲寺に匿し、書を平泉の僧徒に託りて、救を乞ふ。増徒從は、十八日信長府中龍門寺に入る。僧徒火を一乗谷に縱つ。朝倉氏累世の貨物悉く灰燼となる。景鏡素より反心あり、乃ち義景を勸め、母子と山田

アサギノ ウラナリ

アサダ ガウリツ

人呼て朝倉の小天狗と稱す。其の子孫四郎景豐竊に宗家を滅さんと計る。元景之を扶く。敏景の孫貞景(即ち宗)宗滿等をして之を伐たしむ。文龜三年四月朔日、其の不意を襲ひ、急に敦賀を圍み、景豐等を殺す。元景步騎一萬八千を率ひ、越前に入る。貞景伐ちて之に克つ。永正二年四月元景死す。宗滿功を以て、敦賀の郡司となる。三年七月越前一向宗の賊兵三十萬を囂聚し、河北を侵し、邑里を燒く。宗滿馳て根點寺に入り、僧を擒にし、率て一乗谷に到る。貞景悦び、宗滿及び山崎入道祖桂等をして、遼へ戦はしむ。遂に之を取る。其の脱し歸る者三分の一に過ぎず。享祿四年八月宗滿子景紀等と兵八千餘を率ひ、能越賀の漂客及び遊佐神保等と戦ひ、首を獲ると八百之を河岸に鳥す。十一月宗滿越前に歸る。天文二十一年宗滿年七十九。勢力尙衰へず。兵を率て、加賀に入り、津葉を攻て之を拔く。八月宗滿病甚しく、尋て卒す(野史)

アサクラ マスヒト 朝倉益人は和銅寶龜間の人なり。位外從五位下に至る。性和歌を好み、頗ぶる。其の蘊奥を究はむ。詠歌は載せて萬葉集其の他諸書に在り(萬葉集作者履歷)

アサクラ ヨシカダ 朝倉義景は越前の領主なり。世々一乗谷に居る。彈正左衛門孝景の子、孫二郎と稱す。初めの名は延景。二十一年六月大將軍義輝諱の字を賜ひ、左衛門督に任ず。永祿二年十二月義景從四位下に叙す。五年八月大覺寺の門主義俊越前に來る。義景爲に曲水の宴を設く。皆以て亂世の一興となす。是より先き加越の土賊越前の一向徒と謀り、合せ、囂集亂を作す。義景兵を遣はして、之を伐ち、賊と約して、手取川を境となし、以て半州の租税を收めしむ。尋て將軍義輝の命を受け、之と和して、女を本願寺教如に妻はす。悉く加賀の地を以て、本願寺に附す。之を暫くして、加賀の賊盟約に背き、本願寺の貢米を抑留し、又郡邑を侵し、行旅の資財を奪ふ。是に於て、義景人を遣はし、賊を諭さしむ。賊伴り謝す。九月二十日夜、又急に來り、月津御幸塚を襲ふ。勝蓮華景基等方、御幸之を取る。賊首坪坂伯耆力盡きて、來り降る。是に於て、義景の兵威大に振て、近江以北盡く服す。九年九月足利義昭來

六坊に徙らしむ。從者僅に八人。景鏡兵二百を率ひ、急に六坊賢松寺を圍みて、之を燒き、人を遣はし、義景に謂て曰く、運命既に盡く、請ふ自ら計をなせと。義景怒て曰く、姦孽憎む可し。設令我死すと。三年を出て、ずして、誓を復せんと。言未だ終らず。兵卒亂入す。義景劍を把て、自殺す。年四十一。鳥居景近高橋景信殉死す。景鏡義景の首及び母子を信長に呈す。或人景鏡の不義不道を惡み、之を誅せんと。請ふ秀吉曰く、彼無道と雖も、我に忠あり。之を殺すは來降の路を塞ぐ也。乃ち之を宥す。信長義景の首を京師及び岐阜に鼻し、母子を殺す。景鏡に命し、族を土橋と改めしむ。四月景鏡土寇の爲に殺され、二子皆屠らる。實に義景死後數月を出ず(野史)

アサクラ アリシダ 朝倉在重は仁左衛門と稱す。朝倉六兵衛在重の二男。元和元年大阪の役、牧野忠成に屬し、敵士の首を獲たり。使番目付を経て、町奉行にす。み從五位下石見守に叙任す。慶安三年十一月十九日死す。年六十八(寛政重修諸家譜)

アサコ チヨウウ 淺子女王「アサノミヤ」
アサダ ガウリツ 麻田剛立は天女家なり。名は安彰、綾部綱齋の次子。幼より穎悟人に負はれて、外に出る毎に仰て、列宿を視、其名を問ひ、悉く之を記憶して忘る。と無し。漸く長ずるに及び、深く天文曆術の學を好み、又醫術を究むるを喜び、二事を修むること二十餘年の長きに及び、家貧しくして、師を他郷に求むると難く、又求むべき師なかりければ、少しも師に據りて受くる所なく、獨學を以て、遂に大に其道に通じ、當時の學者未だ思はざるの發明をなすに、至れり。明和末年杵築侯に擢てられ、待醫に列し、駕に從つて、江戸に赴く。然れども、剛立は更に之を喜ばず。反て、我が學を妨ぐるものとし、郷に歸るや、否や書を上りて、仕を辭せんとす。三度遂に容られざるを見て、藩を脱して、大阪に至る。時に年三十八。姓を麻田と變して、醫を活業とし、心を星曆に潜め、空理を論せ、測量實驗を本とし、日夕磨ること、又二